



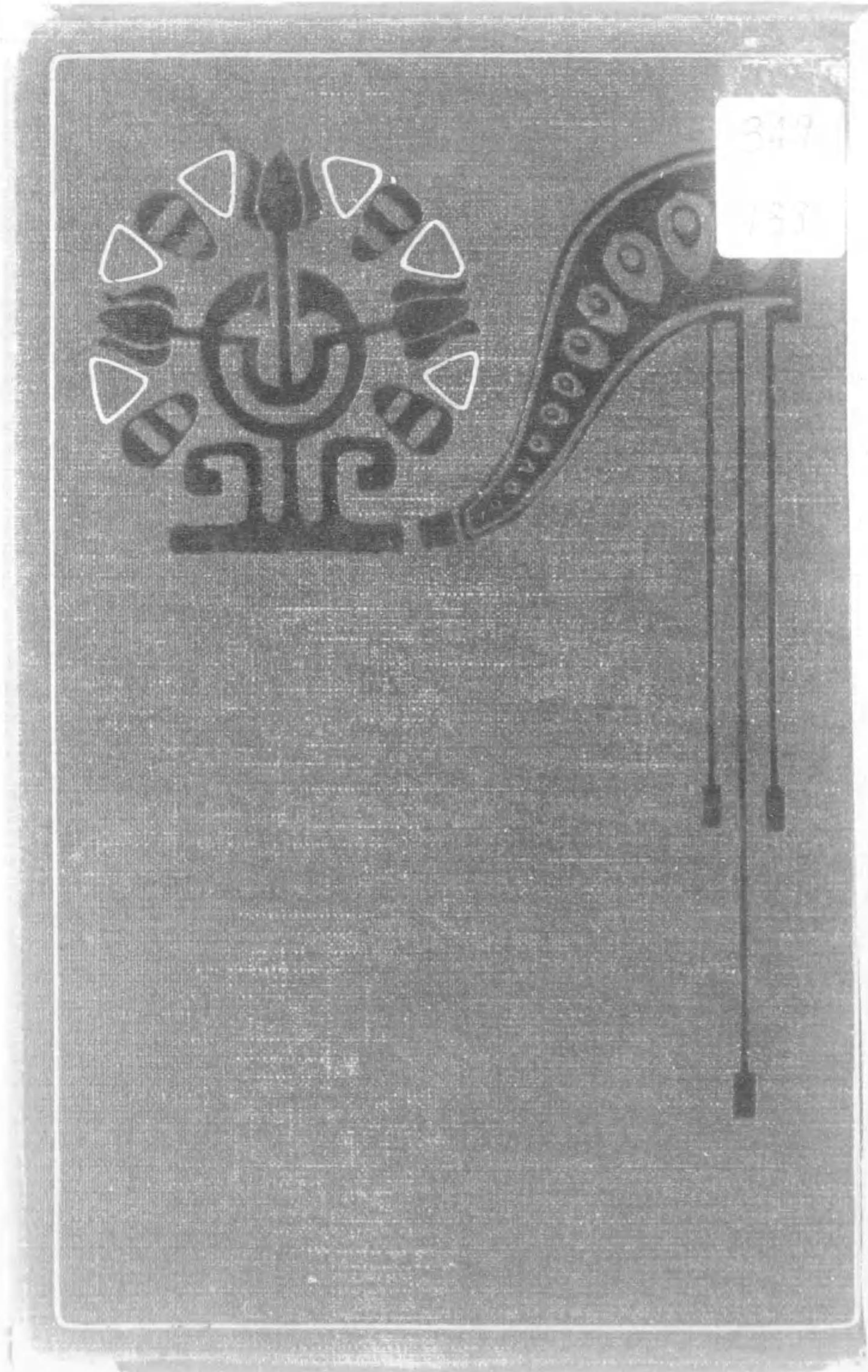
349

138

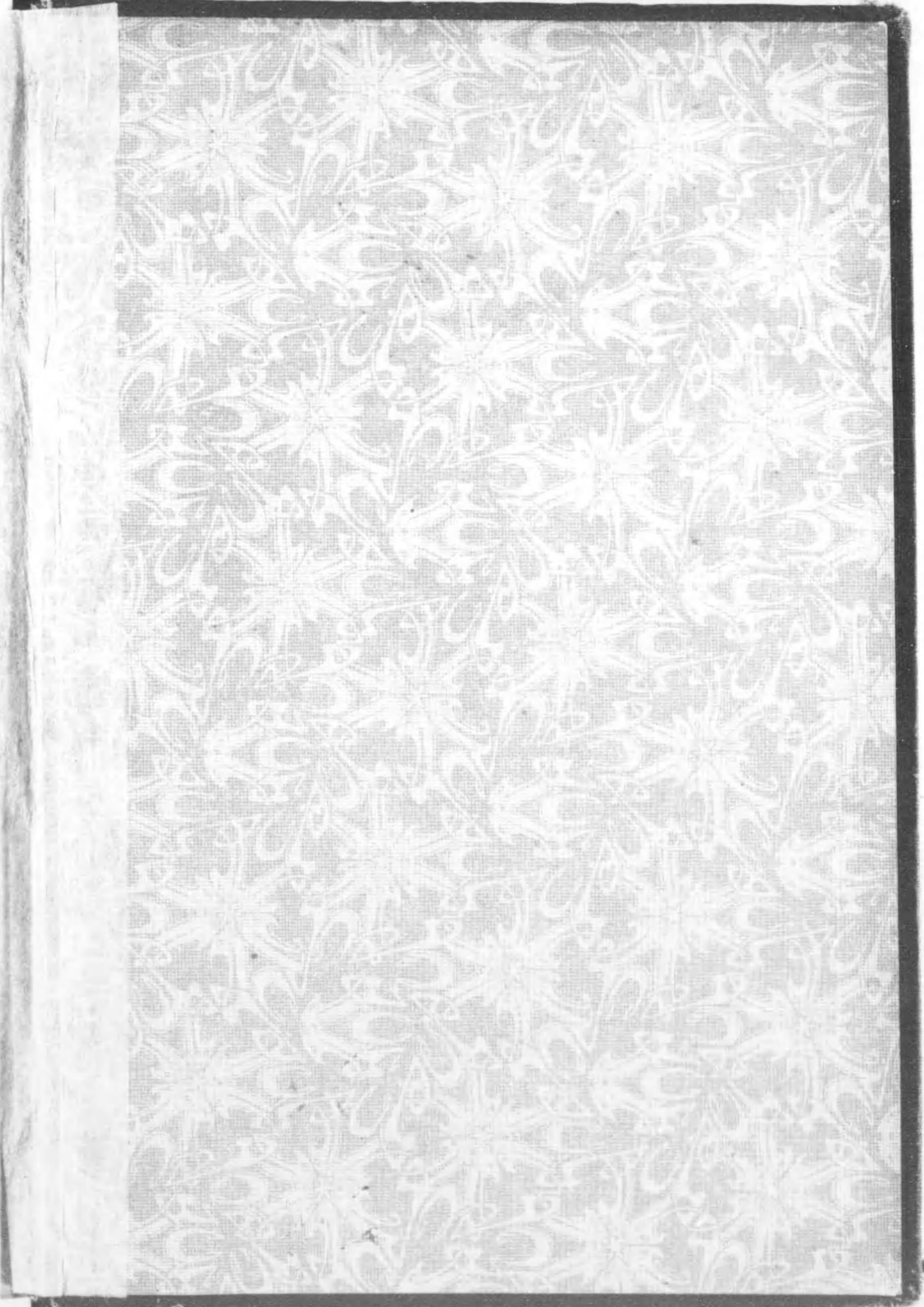
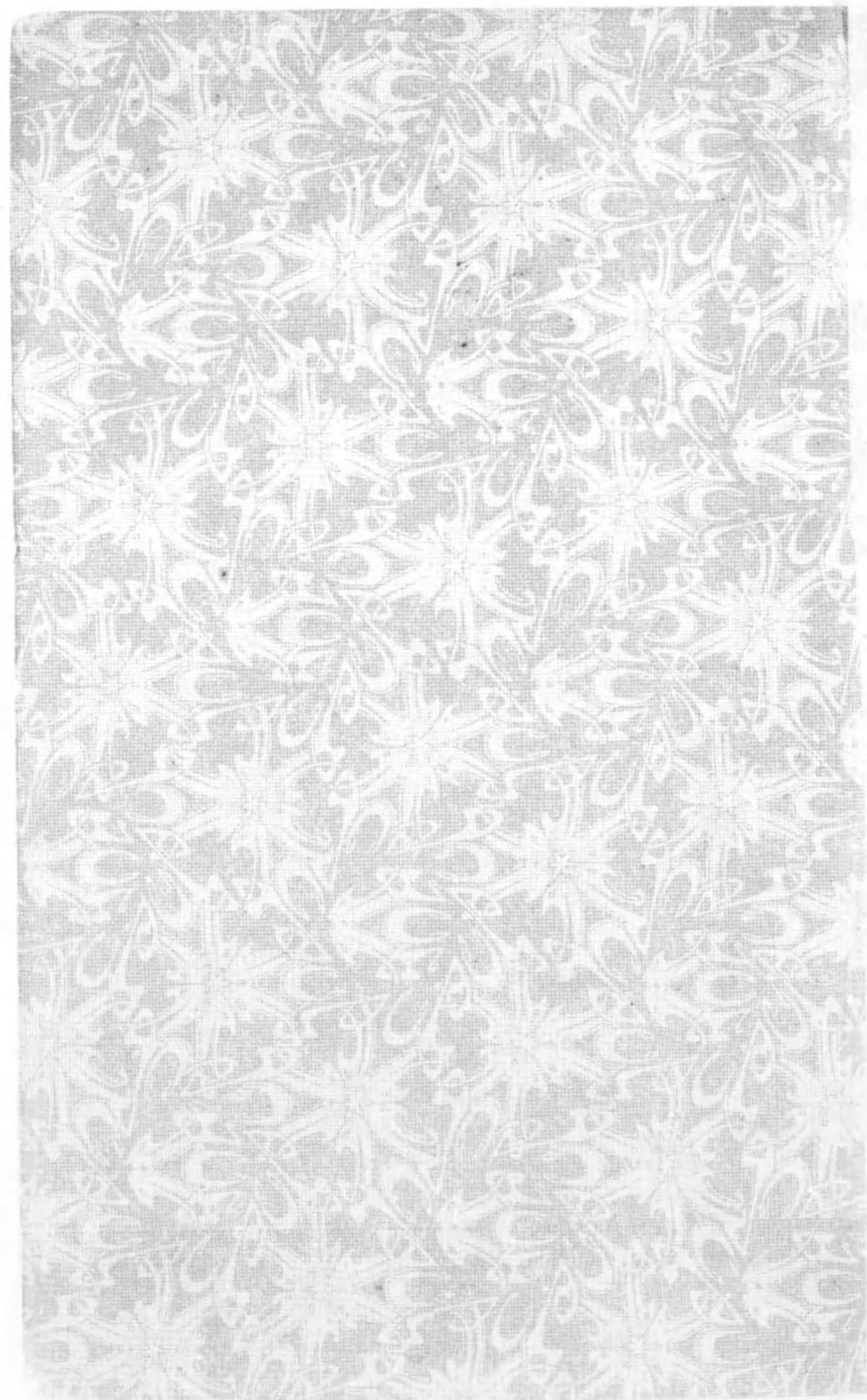


始





349  
753



男爵 澁澤榮一 述

井口 正之 編

男 澁

澤 爵

實

業

講

演

坤



大正  
2. 9. 5  
丙交

東京 帝國圖書出版株式會社藏版

澁澤男爵 實業講演「坤」目次

五一 實業米糧論……………一

吾人の前途は尙ほ遠遠なり——商工業者は平穩にして奇變なき時代を望む——吾人は米糧として茲に一言す

五二 戦争と經濟……………七

誤れる「あたり近所に事なかれ」主義——戦争と海外諸國の經濟的興亡——近く日本に實例を徴すれば——王者の職は寧ろ國運を振興せしむ——實業と軍人——私一身の懺悔談

五三 實業界に對する吾人銀行家の抱負……………二四

實業立國論——商工業の發達と手形交換——國旗の光彩に伴ふ實業界——孟子の所謂矢人函人——三年經つて三つになるの覺悟あり

五四 實業教育に對する希望……………三三

往古の學問と實業教育——卑下されたる既往の實業界——修業年限を短縮せよ——吹込主義と自修主義の教育——共同的觀念の養成を怠る勿れ——萬

能主義の教育を排す—至誠の觀念を鼓吹せよ

五五 タフト卿及びブルーズヴェルト嬢の來遊を迎ふ……………四九

北米合衆國に感謝す—此の一事を大統領に傳へられよ

五六 日露戦後の經營……………五三

戦後經營に對する悲觀説と樂觀説—内外公債の整理—軍備に對する意見—政費の節減—國富増進策—鐵道運輸の改良—滿韓經營

五七 戦後經營及び成功談……………六〇

戦後經營とは何ぞ—國家の財政に偏重偏輕の事ある可らず—補助の如き體格は取らず—何をか成功と云ふ—成功の眞意義—眞の成功の實例

五八 帝國聯合艦隊の凱旋を歓迎す……………七〇

如何なる歡喜の情を以て迎ふべきか—歡迎の辭として愚見を陳じたい

五九 我が國に於ける瓦斯事業の發達……………七四

東京瓦斯會社の三十五年間—倫敦の瓦斯事業との比較—自他共に一層努力せざる可らず

六〇 使命を全うして歸朝せる伊藤侯爵を迎ふ……………七九

千年の問題解決す—誠と徳とを以て事を處せり—希くは將來の指導を得ん

六一 本邦工業界の前途……………八三

工業の意義及び推移—工業分立の弊—工業發展の方面—内地工業の改善—動力の將來—工業家と下級技術者

六二 銀行集會所及び手形交換に就いて……………一〇一

司法機關と金融機關とは密接の關係あり—銀行集會所の由來—手形交換の方法—興信所と銀行との關係

六三 第三次韓國行……………一一〇

最初の旅行—第二次の旅行—最後の旅行—これ位愉快な旅行は無かつた—平壤見物—鎮南浦の狀況—京城及び仁川の發達—實業界より見たる朝鮮—今後の仕立方如何にあり

六四 陸軍將官の凱旋を歓迎す……………一二九

軍人商工者が吳越の感ありしは遺憾なり—吾人も亦國家を思ふの赤誠に變り無し—戦争に對する二種の見解—戦争と經濟—實業家として軍事組織の整備せるを羨む

六五 明治三十九年の經濟事情……………一四二

明治初年より十九年迄の經濟界一般——二十年以降の五年間——二十六年以降十年間の經濟狀態——日露戰爭前後の財界の有様——悲觀論者にも一分の疑問はある——或は樂觀論者であるかも知れぬ——財政の影響を受けたる結果には非ざるか——其の可否は數字に質さん

六六 實業家側より學者教育家に望む……………一六六

學問ほど俗人に必要なは無し——學問と實際との接近を切望す

六七 財政經濟の調和……………一六九

機運相當の進歩を計れ——財政と經濟との一致

六八 商工業者の職責は第二第三の戰爭に在り……………一七四

愉快なる晚餐會——眞正の擴張發達には必ず苦境の伴ふを免れず

六九 米業私見……………一七七

米商賣に對して直接關係少きも間接には其の關係深し——何が故に通々として進まざる——運搬方法を完全にせよ——米は必ず衣装を要するや——米商賣の方法に就いて——結論

七〇 利を見て弊を恐るゝも弊を見て利を失ふ勿れ……………一八〇

七一 經濟を論じ併せて甲州人士に一言す……………一八五

二種の見解と積極論——消極論——兩極は互に一致す  
甲州と余との關係——經濟上に就いて一言せん——經濟界は戰爭に伴うて發達を遂げたるものなるや——悲觀樂觀其の歸一する所を知らず——經濟界に對する余が斷案——甲州人士に一言を呈す

七二 實業界時事所感……………二〇五

自己が生活して育てた人に接する感がある——經濟界の發達は災厄の後に来る——事業に伴ふ多少の危険は免れぬ——従つて生ずる弊害——弊害除却の責任は諸君と共に吾人の雙肩にあり

七三 商業大學設置に就いて教育家諸君に望む……………二二六

今日の教育に就いて多少の不足を感ず——幕府時代の餘風——高等商業教育可否論——必要と認めなば斷行すべし——國家進運の内助は資本にあり

七四 社會文運の進歩と博文館の功績……………二二六

社會進歩と文運——明識ある大橋佐平君——社會に及ぼせる博文館の功績——大橋新太郎君に囑望す

七五 早稻田大學創立二十五年祝典に臨みて……………二三三

學校と自分との關係——國民の共に感謝すべき成績——遂に八百萬神を作り出さん

七六 佛國銀行家ファイナリー氏留別會席上演説……………三二九

叙勳の光榮を感謝す——余は昔日佛國に於て一念發起せり

七七 ファイナリー氏送別の辭……………三二四

余は經濟思想の源を佛國に於て養はる——徐々其の歩を進め著々其の實を占めよ

七八 品川白煉瓦株式會社の由來……………三二四

耐火煉瓦製造の起原——故西村勝三氏の遺志を繼承す——向後の希望

七九 財政偏重と經濟界……………三二〇

前座ばかりの討論會——財政と經濟との關係——兩者の權衡宜しきを得たし——師匠に御清書を直して戴く——三井君の洋行に就いて

八〇 日韓の親交に就いて……………三二七

日韓の親交——兩國國民の意志を如何にすべき

八一 嚮後の經濟界を如何にすべきか……………三二六

死力を普通力と見誤る勿れ——生産力を進めんと企てたる結果は如何——此の原因は財政經濟の二者不調和にあり——既往已に然り將來亦憂慮せざるを得ず——歐米諸國に比較したる我が國の歳出額——此の秋に於て唯一國民の努力あるのみ——併せて政治家の猛省を促す

八二 増税と實業家の覺悟……………三二四

財政經濟の二者果して權衡を保てるか——反對は當然の理由なり

八三 増税案反對意見……………三二六

前會に於ける余が注文——遺憾なる増税案と之に對する吾人の態度——不動尊の利劍を揮へ——金持征伐案か——是實に銀行集會所の輿論なり

八四 經濟家として見たる白河樂翁公……………三二六

樂翁公の性格——神明に誓うて其の職責に任ず——公が行はれたる財政整理——寛政三年の町觸——東京市の共有金の基礎——東京市養育院と樂翁公——推察に餘りある公の苦衷——安樂翁にあらず

八五 財政經濟に對して上下の同喜同憂を望む……………三〇三

大藏大臣の言に多少の懸念あり——物平を得ざれば期ち鳴る——唯々眞正なる同喜同憂を期せん



八六 外交と實業との連鎖……………三〇五

却て諄諄の中心に在る獨逸を羨望す—軍事設備も或は其の疑を増さしむる一因ならずや—伊集院大使に希望す—遠く近きは男女の間

八七 北日本の旅行……………三二〇

(一) 函館經濟俱樂部に於て……………三二〇

商賣往來と應劫記—會社組織を見る—船渠製麻銀行—不換紙幣と松方伯—日露戰爭

(二) 函館の紳士招待會に於て……………三二四

余は北海道と實業上の縁故淺からず—人造肥料會社と船渠會社—恐るべきは人心の凋落にあり

(三) 小樽歡迎會に於て……………三二七

維新以來經濟界長足の進歩—天下の事悦ぶ可くして悦ぶ可からざるもの多し—此の際吾人の執る可き方針

(四) 札幌に於ける演說……………三三一

早く視察せざりしを憾む—將來有望なる北海道の農業

(五) 札幌歡迎會に於て……………三三三

其の進歩發達は乗組員一同の責任—北海道の金融事情は札幌の家屋に等しからん—一人非成之也

(六) 青森歡迎會に於て……………三三六

關係ある事業—政府と北海道—岩村長官の相談に應じた回顧談—北海道見聞—我が國の實業—青森市民に警告す

八八 實業上の日米親善……………三三五

余は個人として特に感謝す—日米兩國の親善—國運の發展は貴我實業家の手腕にあり

八九 米國實業團の來遊を歓迎す……………三三九

米國に謝すべき二つの意味—日本に於ける銀行業の狀態—會社事業の概況—日米貿易の有様—相互に聊も不利益の生ずること無し

九〇 慈善事業と中央慈善協會……………三四九

世間の同情に待たねばならぬ—慈善事業の意義—組織的經濟的慈善—慈善は政治とも相俟つて行かねばならぬ—中央慈善協會設立の經過

九一 經濟時事談……………三五九

善果と惡果—日露戰爭の及ぼせる影響—輕佻浮華と眞摯著實—安全辯

無き蒸氣汽機—公債整理—稅制整理に就いて—調子附くは惡癖なり

九二 法律と實業家……………三七一

法官銀行者相互情意の疏通を欲す—法律に疎き吾人の指導を乞ふ

九三 關係諸事業重役辭任告別の辭……………三七四

各種事業關係の由來—守舊の風潮と新事業—先づ物質的事業に著手す  
—時代の要求と責任解除—辭任後の衷情

九四 實業界勇退と渡米の決意……………三九〇

退官と理想—富國的觀念と各種事業—實業勇退の眞意—渡米の決意と  
國際問題

九五 濟貧恤窮に就いて……………四〇一

濟貧恤窮は人道—東京養育院の起原—養育院の廢止とその感慨—自治  
制と養育院の復活—養育院の擴張—貧童別置と託鉢金—惡童と感化部  
—傳染病患者と空氣瘴氣—東京と倫敦の慈善事業—政治經濟人道と  
貧民

九六 東京瓦斯會社回顧談……………四三〇

瓦斯事業の起原—事業の一頓挫—瓦斯業の民營と擴張計畫—經營者と

社運—重役辭任の事情—回顧すれば三十五六年

九七 渡米告別の辭……………四三九

(一) 銀行俱樂部に於て……………四三九

渡米事情—猿芝居と年期—十二月が除隊

(二) 日本橋俱樂部に於て……………四四七

渡米の覺悟—後押し之力—昔と今の好對照

九八 米國視察談……………四五三

(一) 日米貿易の關係……………四五三

本會に謝せざる可らず—貿易に對する米人の批難と余の辯駁

(二) 銀行の天職……………四五五

亞米利加見物—ゼームスヒル氏の農業立國論—三年経つたら三つにな  
れ

(三) 渡米所感……………四六三

多忙なりし事—苦しかりし事—愉快なりし事—名譽なりし事—利益な  
りと思ひし事

(四) 米人に學ぶべき點……………四七三

本會成立の由來——不景氣挽回策に就いて——渡米視察談——事業集中の傾向——亞米利加人に學ぶべき氣質——結論

九九 財政の膨脹と經濟界……………四八二

農民豊年に苦しむ——財政と經濟——財政と人事沈衰——進歩的氣象と國民

一〇〇 本邦鐵道の回顧……………四九〇

明治初年洋行の土産は一種の感覺——京濱鐵道買收事情——京濱鐵道の始末——終始一貫民有主義の挫折——鐵道國有と當局者の宣言

一〇一 慈善救濟事業に就いて……………五〇一

國家の繁昌に伴ふ貧民の數——救濟事業の不整備——政治上の理由——經濟上より見たる關係——人道上よりの考察

一〇二 本邦公債制度の起原……………五一三

(附) 銀行及び取引所創設事情

公債の必要を知る——始めて公債を發行す——銀行及び取引所創設事情

一〇三 伊藤公と財政經濟……………五二〇

維新當時の伊藤公と大隈伯——伊藤公の亞米利加と改革意見——貨幣制度

及び官制改革意見——國立銀行條例の實施——公債制度の實施——貨幣制度の實施——官制制度の改革——伊藤公と實業界——米國旅行中に開きたる公の兇變——公に受けたる訓戒——公の爲人——追悼の詩

一〇四 朝鮮に於ける我が銀行發展の徑路……………五四〇

第一銀行韓國支店開始の由來——開業後の事業——計畫屢々阻礙す——遂に中央金融機關となる——第一銀行支店引繼の次第——將來に對しての希望を述べ

一〇五 東洋生命保險會社の革新と保險事業の回顧……………五四四

余が明治初年實業界に對する期念——海上保險會社成立の次第——經營者と事業の盛衰——保險事業の根本義——利益配當を目的にす可らず——唯努力の一あるのみ

一〇六 華族の處世法は偏務的にあらざるか……………五五七

徳川公爵の聲望——今の華族は何をか爲しつゝある——國家の位地を高むるは誰の責任ぞ

一〇七 渡清實業團の歸朝を迎ふ……………五七〇

國家の發展と相互の往來——渡清實業團の效果——未來の責任を遺却す可

らず

一〇八 今後に於ける諸君の責任……………五七六

過去二十年間—今後に於ける諸君の責任—乃公自ら任ずの覺悟を要す  
—母校の前途に就いて

一〇九 公債償還と税政整理……………五八一

政府當局者に感謝す—説明は大に了解せり—税制の整理と中央集權に  
就いて

一一〇 臺灣の發展と臺灣銀行……………五九二

祝辭を述ぶるは僭越ならん—共に空しからず—功績は二君及び明治昭  
代にあり—後來の覺悟

一一一 梅花に比したる清水組……………五九三

梅花と薰れ—梅花の心を以て世に處する清水組—花相似人不同

一一二 東京手形交換所新年會に所感を述ぶ……………五九七

豊川池田兩君の功—猪突的は銀行者に禁物—新任委員に助力を乞ふ

一一三 實業界の四問題……………六〇一

先づ吾人の注文を述べん—工場法案に就いて—會社重役に對する制裁

—特種銀行條例の改正—蠶絲業法

一一四 七十年の回顧及び感想……………六二二

溢美過賞の嫌あり—實業界の過去七十年—會社事業と郭泰駝の植木法  
—蟻通しの社と老人論—愉快なる晩

一一五 危險思想防衛策……………六三六

文明と共に輸入されたる世界的弊害—殖利生産と仁義道德—富の増加  
に比例する貧者の數—弱者保護の方法を講ぜよ—境遇に左右さるゝ結  
果多し—危險思想防衛の二案

一一六 星岳保勝會の設立に就いて……………六三九

喜多院と余との關係—其の土地を知らんと欲せば公共物を見よ—名刺  
の保存は國家社會に貢獻する所以

一一七 悦ぶ可き現象と憂ふ可き事相……………六四三

悦ぶ可き現象—國家社會の爲め憂慮す可き事相—青年諸君に一言す

一一八 九州の發達と福岡日々新聞……………六五〇

九州の發達—盛舉に滿幅の悦を表す

- 一一九 我が國保險事業の濫觸……………六五三  
 保險事業の起原を述べん—事物の進歩—商工業の進化—新進の輸入業  
 —創業の苦心—保險業と時代の要求—海上保險會社の起原—海上保  
 險會社と華族—海上保險會社の難産—日本の保險業—英國の保險業—  
 商業道德と保險事業
- 一二〇 當來の財政問題に就いて……………六七四  
 一片の祝辭—同僚の大藏大臣—國庫債券と銀行家—物其の平を得ざれ  
 ば則ち鳴る—桂内閣の公債整理—減稅的整理の急務
- 一二一 明治大學三十年記念祝賀會に臨みて……………六八八  
 社會の各方面三十年間の進歩—精神的向上
- 一二二 ホテル事業に對する所感……………六九二  
 金子子爵の御小言は當然なり—花より團子—ホテル事業と貿易
- 一二三 財政整理と吾人の希望……………六九四  
 有意味の會合たらしめしめし—財政問題に對する希望—稅制整理と行政  
 整理—官業膨脹の弊—對支那問題
- 一二四 遞信事務の回顧と現時の感想……………七〇三

- 昔の驛遞法—郵便制度の改良—電話開設の回顧談—通信事務の當局者  
 に感謝す—批評の言は諒納あれ
- 一二五 關西銀行大會に於て……………七二四  
 國際償還及び既定の方針の遂行に就いて—銀行者の本領—東京人の立  
 場より關西の實業界を羨む—地方の發達に留意ありし
- 一二六 銀行業の沿革……………七三一  
 銀行條例の發布と國立銀行の設立—各種銀行の進歩發達—銀行者の覺  
 悟及び抱負
- 一二七 生絲貿易の過去現在及び將來……………七三五  
 予と蠶絲業との關係—昔の年寄も—所謂蠶絲貿易—明治十四年の紛擾事  
 件—蠶絲業の趨勢—内國商の輸出高の増加—生絲價格に就いて—將來  
 に向うて—新舊養蠶地に對する希望—蠶絲業と金融との關係—彼を知  
 り己を知るの必要
- 一二八 明治四十五年の經濟狀態……………七四三  
 日露戰爭後の經濟界は順當に非ず—財政整理の實未だ舉らず—余の財  
 政整理案—中央集權の弊を除け—地方の發達と中央の發達とは相伴は

一二九 出版業者に望む……………七五

諸君と共に此の一日を樂しむ—『青淵百話』著述の由來—少年時代の書籍  
癖—人文發達と製紙事業—紙價の協定—余が本務の銀行も亦然り—出  
版業者も亦此の點に意を用ひざる可らず—人格を高め道徳心を強める

一三〇 慈善事業に對する雜感……………七五

慈善協會の性質—慈善の意義—救済の方法—防貧の方法—託兒所と宿  
泊—細民の金融機關—兒童の教育方法—生活難問題

附 錄

一 男爵澁澤榮一君 伯爵大隈重信君演說……………七九五

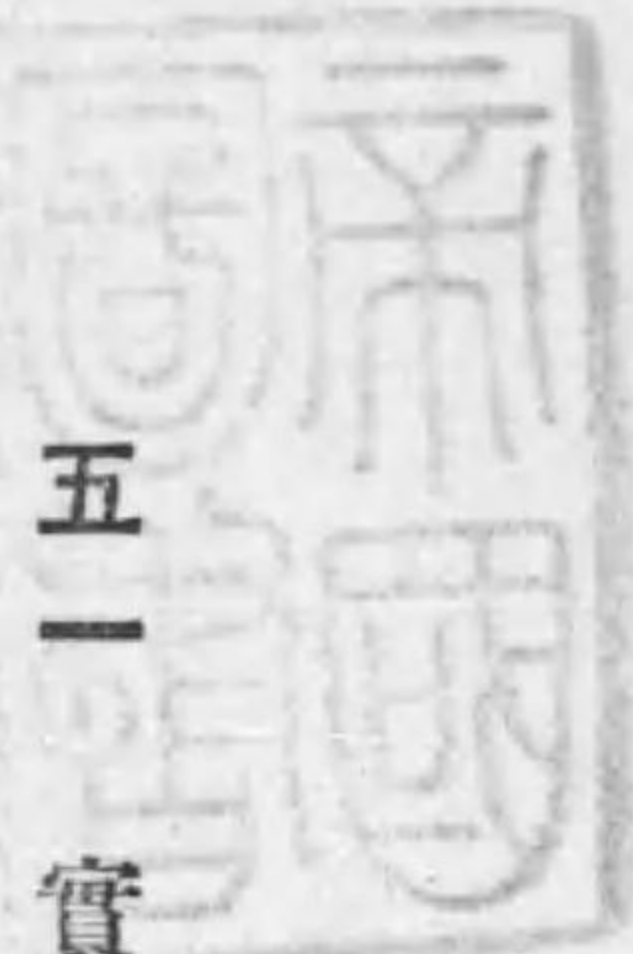
二 日本帝國實業界の開拓者澁澤男爵  
アルフレッド、ステッド稿 八十島親徳譯……………八八

三 澁澤青淵先生の演說……………八三

男爵澁澤 實業講演「坤」

男爵 澁澤 榮一 述

井口 正之 編



五一 實業米櫃論

吾人の前途は尙ほ遙遠なり

閣下及び諸君、當銀行俱樂部の晚餐會に大隈伯爵、片岡司令長官、目賀田君、山田司令長官の尊臨を得ましたのは、誠に此の會の光榮を増しました次第と感謝に堪へませぬのでございます。昨年戦局(日露戦争)の開けて以來、軍事關係より我々同業者が負擔をせねばならぬ事柄よりして、此の俱樂部に會議を開きましたことも數回に上つて居りますが、私は不幸にして一昨年來病氣に罹りました爲に、其の度毎に參列することを得ませんでした、頗る遺憾に存じまして、病幕に在つて唸り／＼世の中を慨嘆致し居りましたが、幸に今夕は此の席に列して伯爵及び名譽ある司令長

官、又目賀田君、山田君、其の他の諸君にも御會見を得まするのは、此の上もなき悦びでございます。只今大隈伯司令長官、目賀田君より種々我々を裨益する所の御演説を賜りまして、當俱樂部の爲に感謝に堪へませぬのでございます。伯の仰せに、今日の戦局に對して巨額の軍費に應じて困難の有様の見えぬのは、或は日本がまだ農業國であるからである。國の進歩が充分でないのが、寧ろ軍費の支出に堪ゆるてはなからうかと云ふ御説は、私共始めて之を聞きますると、或は大に疑を起す事てあります。さりながら深く玩味しますると如何にも御尤千萬て未だ工業國若くは商業國と其の位地を進めぬのが、即ち今日の場合に耐忍し易いのであると云ふ道理となる。斯く理會すると、一面には國の農事に於て餘力があるを悦ぶと同時に、一面には我々が三十餘年來苦辛して日本の國を商工業國に致したいとの希望は、まだこの戦争と共に前途遼遠だと云ふことを感ぜねばならぬと考へます。果して左様でござりまするならば、伯の御説の如く更に一年を重ねて戦争が續きましても、之に應ずる壯丁の力も、又一方の軍資に就いても、充分に堪へ得るであらうかと云ふ望は持ちますが、それと同時に若し平和が克復した曉に、支那朝鮮

に對して我が經濟力の進みゆく有様は如何なるかと思ふと、丁度前にいふ日本が農業國の爲に今日が維持出來ると云ふならば、即ち商業工業の進歩はまだ不充分の國であるから、其の場合には他國の後に墮若たらざるを得ぬと云ふ結果を來しはせぬかと憂ふるのであります。斯く考へて見ますると、御賞詞を頂戴したやうな伯の御言葉は、我々の頂門の一鍼にして、大に憂へ大に勉めねばならぬ必要を生ずるやうに存ぜられます。

實に開戦以來數回の國庫債券を募集されますにも拘らず、毎回充分に之に應ずると云ふことに一般の人氣が進んで參りますのも、實は一方に海陸軍の連戦連捷の力が我々一般の人氣と相應じて、斯く都合能く參るやうには考へますけれども、併し此の戦争は遂に平和は克復する、平和が克復した後が我々商工業者の眞正の責務である。それこそ日本の奮勵擔任すべきものである。其の擔任すべきものに於て、若し前に申す如く我々の力が充分でないと思ふと、考へますと、我々は是より大に努力せねばならぬと云ふことを自ら思ふのでござりまする。我々商工業者は平時に於きましても、亦國家有事の時に於きましても、始終成る可くだけ安穩に、奇

商工業者は  
平時に  
なすべき  
奇變に  
望む

變の少いことを望むと云ふのが我々の本分でございます。それに就いて甚だ古めかしい一の比喩を申上げるやうでございますが、私は平素漢籍を好みまして、『古文眞寶』といふ書物に唐子西の『古硯の銘』と云ふものを讀んで、其の論説の立て方に甚だ感心したことがござります。至つて活氣の無い陳腐の談てござりまするが、或は我々の位置が世の中に對して一つの比喩になりはせぬかと考へました爲に、試みに茲に一言を呈します。

唐子西の古硯の銘に、硯と筆墨は氣類が同一である。用法も一つである。共に文房具として人に珍重される。左様に用ひることは同一でありながら、壽命に於ては大なる懸隔がある。硯は世を以て數へる。墨は月を以て數へる。筆は日を以て數へる。等しく世人に珍重されて、同じ机上に装置しながら左様に年齢に大差がある。どう云ふ譯であらうか。想ふに硯と云ふものは甚だ静なものである。墨は決してさうでない。筆は又甚だ鋭きものである。果して然らば鋭きものは壽命が短くて、静なるものは壽命が長い。さう考へて見ても、若し又筆をして硯の如く静ならしめた所が、果して百年の壽を保つと云ふ譯には往くまい。然らば

鋭きと静とは性質に依つて、壽命の長短も亦其の天より命ぜられた處に依るものであらう。但し静なるものゝ壽命の長い硯を私は愛すると云ふ主意でございます。其の語は有益なことでも何でもござりませぬ。斯かる御場所に論ずるほどの價值のないものである。蓋し静を愛し鋭きことを嫌ふと云ふ、支那流の一つの寓意的の議論であらうと想像致しまするが、それに付いて、私が我々の業體を茲に比喩して考へましたのでございます。

吾人は米櫃として一言す

私共は硯でも何でもござりませぬけれども、凡そ社會を爲して居るには、種々な人類が國家を裝飾點綴して居る。政治家もござりませう。武官もござりませう。學者もござりませう。教育家もござりませう。總てのものが交互錯綜して、丁度或る方には是が發達し、此の方には是が努力し、各其の本分を盡して一國と云ふものが立派なる形を爲して居る。尙ほ一家の飾付を見ますと、床の間の置物もあれば、立關に飾る武器もあり、又書棚の書籍もあれば、骨董品の種類もある。奥の方、勝手の方へ往くと、米櫃もあれば、味噌澆もある。勝手道具もあると云ふのが、即ち一家の装置である。一國の有様も猶其の通りであらうかと思ひます。即ち前に



申す政治家、武官或は教育家、學者として之を譬へて見ようならば、政治家は或は床の間の掛物若くは置物の類でもございませうか。又武官は或は門前に飾る甲冑でもありませう。弓鐵砲でもございませう。書棚は即ち學者に喩へても宜しうございませうか。種々なる裝飾はそれで成立つが、扱我々實業家は如何なる器物に喩へ得るかといふと、即ち米櫃若くは勝手道具と云ふものであるのでございませう。平日一家の裝飾に於ては、此の米櫃、勝手道具は至つて閑散に堪へぬ。即ち客人に輕蔑されて居ります。併し或る場合一國の多難なる時、否一家に多人數の客來てもある場合には、必ず此の米櫃や勝手道具が甚だ必要になるのでございませう。我々は即ち彼の古硯の銘の硯が世の中に活潑なる効能が無い代りに壽命が長いと同様に、米櫃又は勝手道具が平生世人に持囃されぬ代りに、常に之を整頓し、或る場合に必要視されて、床の間の置物や、玄關の飾物と共に各、其の本分を盡すことを望むのであります。今晚は幸に國家を裝飾なさる、諸君の光臨に對して、我々米櫃として茲に御禮を申し上げます。(明治三十八年三月二十八日、銀行俱樂部晚餐會の席上に於て)

## 五二 戦争と經濟

演説は誠に素人てございまして、飛入に此處に這入りましたのでございませう。今晚の演説會に據なく驅出されたやうな次第で、斯かる檜舞臺で一度も演説など致したことはございませぬから、或は言論が諸君の御耳に通るまでに出來ないかと虞れますけれども、責を盡すの一端と心得て敢て參場致した次第でございませう。川柳に「河東節親類ゆゑに二段聴き」と云ふことがあります。此の御席には親類はたんと無いかも知れませぬが、二段は決してやりませぬ。一段で止めますから、どうぞ御辛抱の程を願ひます。

私が此の席で申上げたいと考へたのは「戦争と經濟」といふ演題であります。大層漠然たる問題でございまして、或は學者でも演じさうなことです。斯かる問題を掲出して何を申上げて宜いやら、自分自らもまだ方向に迷つて居るやうな次第であります。甚だ御迷惑に御感じだらうと頗る恐縮致します。諺に「金持と痛氣持と、地面持とは、あたり近所に事なかれ」と願つて居る」といふが私は其の經驗は、

誤れる  
「あたり  
近所に事  
なかれ」  
主義

持ちませぬ。個人としては金を持ちませぬけれども、職業が銀行屋の老爺でございますから、先づ金持と御看做を願はなければならぬ。左様に金持があたり近所に事なかれ、丁度取りも直さず戦争と経済が頗る相敵して居るもの、如く思ふは如何なものであらうかと、茲に一つの疑問を起したのでございます。如何にも能く考へて見ますると、戦争といふものは國家の富力を増すには大に妨害を爲すのである。なぜならば先づ第一に人を殺す。又其の人を殺す道具はどう云ふものを用ふるかと云ふと、昔は刀、槍、薙刀、弓矢、近頃は鐵砲、大砲、或は爆烈彈などといろいろなものて人を殺す。此の殺す道具を造るのも總て生産的のものではなく、悉く不生産的のものである。其の結果國に於ては公債も募り、租税も増し、ありとあらゆる軍費を徴收して人を殺す道具を頻りに造り且つ送ることをするから、成る程此の戦争と云ふものは経済とは、大變に敵藥であると解釋するも無理ならぬやうに思ひます。私は學問が古風であるから歐羅巴の事杯は甚だ疎い人間である。歐羅巴の事に疎いから東洋の事は詳かであるかと云ふと矢張同じであります。けれども極くあらましなる歴史を見ましても、兵を嗜み武を驕すと云ふことは總

て國家をして衰頹に陥らしめたと云ふ實例は、海の東西に拘らず國の古今に限らずして甚だ多い。故に此の戦争は経済に對して大敵藥だと或る金持が解釋して終に其の諺が始終傳つて居ると云ふことは甚だ尤と言はねばならぬのです。

ひとり日本の金持がさう云ふ解釋をしたばかりではない。極く近頃現在我が國の對手國なる露西亞にブルッポと云ふ學者がありまして、果して立派な學者であるかも知しくはさまてはないか知りませぬが、過般民友社で刊行になりました現時の戦争と経済と云ふ書物を讀んで見ました。此のブルッポの論ずるところで見ると、現時の戦争は果して経済が維持出來ぬところの戦争であると云ふことを述べある。而して此のブルッポといふ人は大戦術家と見えまして、陸海の戦争に付いて餘程詳細に取調べた議論が掲げてありました。して見ると日本の古風な金持ばかりが戦争が嫌ひでなくて、餘り極く文明とは稱せられぬか知らぬが、相當なる學力のある露西亞の學者と稱する人も、尙ほ戦争と経済とは頗る敵藥と論斷してございます。

しかし私が更に考一考しますると、前の日本の金持の判斷も、後の露國のブルッポ

の考も、其の一を知つて其の二を知らぬ説である。戦争と云ふものは経済と左様に敵棄てはない。否敵棄てないのみならず、國の進歩は戦争に依つて大に勃興するものであると云ふことを言はねばならぬ。是も古い歴史を長く述べ立てますと、甚だ冗長になりませうから先づつと、略しまして、否略すてはない私の詳しくは知らないのかも知らぬが、試に西洋の事から述べますれば、今も前席で圓城寺君が御述べになりました如く、凡そ百年前に英吉利の那勃烈翁に對する戦争が、二十年以上續いたと云ふことは、如何にも英吉利の國を困難に陥らせたやうに聞えるが、併し英吉利の發達は其の戦争が原因を爲したと云ふことは、同君も必ず證明するに相違ないと思ふ。獨り圓城寺君が證明するばかりでない。歴史が屹度證明するところであらうと思ふ。また近い千八百七十年の普佛の戦争に付いて普魯西の富が一時に進んだために、或は適度以上の擴張を爲したと種々なる學者の非難はありましたけれども、獨逸の商工業の大に發達したと云ふことは、即ち千八百七十年の戦争に依りて大に進み大に開けたと云ふことが充分に申上げられるだらうと思ふ。又佛蘭西は此の戦に負けた。縱令負けても、其の後の佛蘭西國民の

力は、矢張戦争を利用して其の富を進めたと申上げ得られるやうに考へられる。國を隔て、亞米利加の例を擧げて見ませう。亞米利加の建國の戦はどうでありませうか。亞米利加の國に強大なる力を興へたのは、即ち建國の時の戦争が其の根源を爲したと申すに憚らるのでございませう。又南北戦争は如何であつたか。千八百六十年の戦争よりして、終に亞米利加をして今日の如き雄大なる國柄たらしめたと申しても宜しいやうに思はれる。果して然らば、歐羅巴亞米利加共に皆戦争に依りて國の経済が大に勃興したと云ふことは、歴々として歴史が證據立つて居るようではございませぬか。東洋は如何であるか。私が學問がないばかりでなく、東洋に於ては總て歴史上に經濟の事が現はれて居らぬために、例へば支那あたりの戦争に付いても、爲に其の經濟は如何であつたと云ふことは、茲に評論するを甚だ苦しみませうけれども、併し、つと昔の唐虞三代の頃よりして國を變へ世を更へて戦争のある度毎に其の國民の富が大に進み、種々なる富力が其處に現はれたと云ふことは、歴史に於て明かに見えるやうに考へる。春秋の後七國が滅びて、終に秦に一致された後に、秦の富と云ふものは甚だ盛んであつたと云ふことは、

阿房宮の賦を見ても分るやうなものである。又前漢後漢唐宋續いて元明若くは當代の清に到るまでも必ず戦争の後に大に國家が進んで往つたと云ふことは、如何に經濟上の注意の薄い歴史であつても、尙且つ評し得られる様に思ひます。

近く日本  
に實例を  
徴すれば

我が國は如何であるか。其の昔外國との戦争に付いて、其の時に隨うて經濟上の力を増したと云ふ事は、詳細に取調べましたならば、充分なる證據が得られるのであらうと考へる。悲しいかな、さう云ふ事の調査を私は得ませぬけれども、近代の事に付いて考へて見ますと、應仁文明頃より元龜天正に至るまで我が國は長く戦争が續いた。其の戦争の續いた困難の間に、國民は如何したのかと追想して見ても、實に我が國ながら氣の毒の様に思ふが、併し其の間に相當なる富は進んだと思ふのは、豊臣秀吉が大坂に於て金人を十二造つたとか、其の他種々なる驕奢の事をしたとか、斯かる宏大な舉をしたとか云ふことは、皆戦争が國民の經濟を進めると云ふことに助を與へたと看做して差支ないと思ふ。又家康が天下を一統した場合は有様杯に於ても、最も此の戦後が國家を繁昌にせしめたと云ふことは證據立てられませう。更に一つ極く近い例を舉げて證據立てますと、即ち此の維新の

三十七年の間は如何なる有様であつたか。私は茲に實例を舉げて諸君の御判断を乞ひたいと思ふのでございます。先づ初めに王政復古の戦はさまでの戦争と申す様でもございませぬが、併し此の革命の舞臺から國家の經濟上に大に心を用ひ大に力を盡して來た。即ち經濟上の大基礎が成立致したと申して宜しいのである。其の後に國內の戦ではあつたが明治十年の役、此の十年の役の後の商賣の有様は如何でありました。銀行の成立は明治五六年頃でありましたけれども、此の銀行業の大に進んで參つたのは寧ろ十年からして十一年十二年頃であつたと云ふ事は諸君も御承知でございませう。而して海外貿易などの大に擴張したのは十二三年頃である。但し其の頃は貨幣の制度がまだ確實に成立して居らぬ。兌換紙幣はなくして所謂不換紙幣であつた爲に、商賣の擴張と共に銀貨と紙幣の比價に非常の差を起して、經濟界は大に混亂を來したけれども、詰り戦争の結果は經濟界の繁昌を爲したと云ふことは事實に於て現はれて居ります。續いて明治二十七年の戦争である。此の戦争は實に我が日本の經濟界に對しては偉大なる力を與へたと云ふことは、茲に立派に證據立て得られるのでございます。而して

此の戦争に清國より大なる償金を取りて政治に對しても軍事に對しても大に用ふるところがありました。随つて經濟界にも俄然として様々なる事業が勃興したと云ふことは宜なる譯ではあるが、併し當時の識者は此の仕方について非難があつた。縱令非難はあるにも拘らず、此の二十七年以降三十七年まで凡ての經濟事務が如何に進歩して居るか云ふことは、其の數字を確實に示し得るのてでございます。例へば船舶の噸數で申しますと、二十七年の末は僅に三十二萬噸であつたのが、三十七年の末の調では百十六萬八千噸である。殆ど三倍六割の増加と申して宜しい。而して此の船舶も二十七年には、巨大の船と云ふのが僅に三千噸に止つたと申して宜からうと思ふ。今日の船はどうであるか。六千噸以上の船が數十艘となつた。若し此の數十艘の巨大なる商船がなかつせば、昨年以來の運搬に付いて、我が兵力に大に限るところがあると思つても、蓋し過言ではないと思ふのであります。また鐵道はどうであるか。二十七年の末には二千一百哩であつたが、昨年の末の計算は四千四百哩である。外國の貿易はどうであつたか。二十七年には二億三千萬圓であつたのが、三十七年には六億九千萬圓、即ち三倍の

増加を來した。各銀行は如何なる有様であつたか。廿七年には其の資本額が一億二千九百萬圓であつたのが、三十六年の末には五億二千萬圓、即ち四倍以上の増加を致して居る。其の株式の呼高でない既に拂込になつて居るのは如何であつたか。二十七年の調は一億萬圓、三十七年は三億七千萬圓に進んで居る。銀行以外の商工業其の他の會社は如何であるか。二十七年には二億九千萬圓であつたのが、三十六年の末には七億千四百萬圓となつて居る。是も二倍以上の増加になつて居る。其の拂込は二十七年には一億二千萬圓であつたのが、三十七年には四億千二百萬圓と相成つて三倍の増加である。銀行に對する一般の預金の有様は如何であるか。二十七年末に一億四千五百八十三萬圓と云ふのが、三十六年の末には七億七千四百三十一萬圓、即ち五倍三割の増加を來した。殊に著しく増加致したのは商業手形でございます。手形の取引です。其の取引が多いから交換も随つて多い。二十七年の末には東京其の他五箇所——東京を合せて六箇所。其の五箇所は大阪、京都、名古屋、神戸、横濱で、二十七年の調に交換高が二億三千四百十四萬圓であつたのが、三十七年には四十一億五千六百八十二萬圓、即ち十六倍の増

加を示して居ります。二十七年の戦争が總ての經濟機關に此の如く進歩を與へたとは申せませうまいけれども、假に此の戦争が無く経過したと見たならば或は恐る、進歩は今一段低かつたてはなからうかと思ふのである。果して然らば戦争は經濟に對して大なる有効なるところの助力者であると申して宜しい。

王者の戰  
運を振興  
せしむ

斯く論じ來ると前に申す日本の古風な金持と地面持はあたり近所に事なかれ、又露西亞の學者が戦争は到底經濟とは兩立せぬ者であると斷言したのは全くの間違で、どうしても吾々は敬服する事の出来ぬ論と斷案するの外なからうと思ふのであります。而して此の判定が如何なる譯から斯く相成るかと思ふと、私は茲に一言に斷案する事が出来る。即ち戦争が所謂王者の戰國の一致したところの道理正しい義戰であつたなら、其の戦の後必ず國運は發達するものであると思ふのであります。之に反して不道理なる戰武を濫し兵を嗜むところの戦であつたならば、必ず其の戦争は國の經濟を妨害する者である。斯く判斷しましたならば、即ち現在我が對手國と我が國と、此の開戦に付いて何れが悪いかと云ふことは諸君に問ふまでもなく、諸君は直ぐ御分りてございませう。丁度ブルジョアが所謂夫子

實業家と  
軍人

自言の戦争は國の經濟に大害であると言ふたは成る程彼にしては其の通りでありませうと思ひます。ブルジョアの論斷と同様に、吾々もまた戦争と云ふ者は國に取つて甚だ利益ある者だと云ふ事を諸君と共に茲に一言したいと思ふのでございませう。斯様な有様でございませうから、此の戦争に對して軍費を續けると云ふ事に於ける國庫債券の募集の如きは、少しも御遠慮は要らない。深く御心配には及ばない。どうか、應募すれば益、富が増して來るに相違ない。此處に御出席の方には多くは組合會社に御從事の方と自分は思ふ。故にどうぞ御遠慮なく其の募集に應ぜられて、前に言ふ昔の金持流義に誤られぬやうになさる事を希望致します。本問題とは少し話が違ひますけれども、斯かる機會を以て私は一言茲に申述べて見たい事がございませう。それは此の維新の時に總てのものが根本から組立を變へられたと云ふことは事實である。併し其の中に最も甚しく打撃を受けて、最も強く根本から組立が變つたと云ふのは、戦争に必要なところの軍人、又經濟に必要なところの吾々實業家である。斯う申したまは、まだ能く分らないかも知れぬが、昔の戦争に従事するのは恰も請負仕事の様なるもので、武門武士であ

る。それもづつと昔ではない。七百年ばかり以前からして戦争は此の武門武士の商賣だ。よし來た、おれが請負つて遣ると云ふやうな有様で、申さば中受人が出來て居つた。其の中受人の武士と云ふ者に大層良い氣風があつて、今でも武士道と云ふものはそれ等から起きた氣風であります。其の武士をすつかり組變へたのが今日の徴兵法である。將校とか士官とか云ふ御方は、少し種類が違ひますか知りませぬが、先づ總體の軍事に力を入れる兵士は、魚屋の息子もございせう。八百屋の小僧もございませう。百姓もあり職人もあり總ての者が一列一體に出て、さうして右左と首を振つて稽古した連中が國家の干城となりますのであります。私は元來百姓でありますが、此の根本から組立てられた現今の兵士は、規律に於ては昔に優る所もあらうが、併し昔の武士よりは、すはと云ふ場合には或は弱くないかと云ふ如き疑を持つて居た。餘り大きな聲で申したら悪いか知らぬが、それと反對に吾々實業家——吾々實業家と云ふと大層な自負らしいのであります。先づ實業家の尻に附くものである。——此の實業家と云ふ者は昔は誠に卑劣なものであつた。と云ふと此處に御座る諸君が其の卑劣視された人の子息さんか

はませぬけれども、正直に申せば維新前の日本の商賣と云ふものは實に鄙劣なものであつた。總て租税は品物で取り、其の品物の大賣捌きと云ふやうな肝腎なことは皆政府の力でやるのであるから、其の頃の實業家と云ふものは殆ど糶吳服か小賣商人と云ふやうな有様であつた。然るに維新となりてより、第一に此の範圍を擴めねばならぬ。各國と交通をし各國と商賣をすると云ふことからして、此の商賣にも大變な金箔が附いて來た。のみならず國の進むと共に、種々なる人種が實業家として追々混入して來た。詰り申すと兵士と云ふ方は下級から混入して來て、商賣人は上流から混入して來たと言つて宜しいのである。果して然らば、商賣の方は維新以後には大に發達して參つて其の品格も宜しくなり、軍人の方は劣等になるべき譯である。然るに著々として軍事に付いては唯敬服するより外はないと云ふやうな實例を示されたのは、實に喜ばしいこととてございませぬが、其の喜ばしいと同時に吾々實業家は、軍人に對して後に瞠若たるやうな嫌がございませぬ。何に依つて然るか、と云ふことは、私は頻りに自問自答して見ましたが、之を一言に判斷するときは、どうも此の軍人は所謂「至誠以て貫く」と云ふ精神が甚だ強

い。幸に 上御一人に對して唯一死之に報ゆると云ふ精神は所謂武士道の繼續である。今は獨り武士道と云ふのみならず、下兵卒一般に其の觀念を強めて居る。此の觀念が即ち事に當つて甚だ強いと云ふ力を持つのである。これに引替へて吾々實業家は、或は複雑な事業、或は多少智慧の要る働をなすことからして、左様な至誠以て貫くと云ふ境遇に至ることが出来ない。これが同じく組立を變へられました間柄でありながら、彼に優勝の位地を占められると云ふ譯ではなからうかと、自ら感慨に堪へないのでございます。今日御列席の諸君は吾々のやうな實業家であらうと思ひます。果して然らば私の申すことを真に然りと思召すならば、どうぞ未來は至誠以て貫くといふことに心掛けられて、軍人同様組立を變へらるゝたる實業家であるが敬服なものであると云ふことを、一般の人から賞譽せらるゝやうにしたいと思ふ。

私一身の  
懺悔談

今一つ本問題と關係の薄いこと一言申上げて見たいことがございます。蓋し此の事は私の唯一身の懺悔談であつて、決して諸君を裨益するどころではない。寧ろ御恥かしい御話でございますが、斯かる機會に一言を述べまするも、また自ら

慰めるためにも相成らうと考へるのでございます。私は前々にも申す通り百姓でありまして此の東京より二十里ばかり田舎の埼玉縣の農民でございます。百姓と申して何だか大層卑下して申上げるやうであるが、さうでない。眞に百姓だから百姓だと云ふのであります。不圖したことで故郷に居ることが出来て、それから浪人になりました。其の浪人になつたと云ふのは如何なる理由でなつたかと云ふと、即ち攘夷家と云ふものであつた。攘夷家と云ふのは即ち外國人を逐拂ふと云ふので、其の時分に大層な流行でありました。年を取つた方は幾分か御覺えがありませう。今日は甚だ流行遅れの御話である。攘夷家と云ふもので到頭國に居られんで京都の方に彷彿して、それから續いて明治になる前年に歐羅巴へ旅行したのであります。歐羅巴へ旅行をする頃、始めて攘夷と云ふことは出来ぬものであると云ふことを發明致しました。けれども十四五歳から二十六七歳迄十二三年の間は、決して攘夷が出来ぬものではなからうと信じた。眞に外國人を見掛け次第に斬りたいやうな觀念が致したのでございます。實に懺悔談であります。抑、外國との交通は幕



府時代になりても昔から幾回もありまして、終に幕府の末路に至りて開港をせねばならぬと云ふ場合に立至つて、國家に大騒動を惹起したのであつた。けれども弘化の初めに和蘭よりの通知があつて、英佛の兩國より軍艦を以て交通を勧めに來ると言うて來た。それから數年經つて嘉永四年ベルリが浦賀に參つたのでございます。それが丁度私の十四の時である。斯様に申すと餘程の老人でありまして、併しまださうは老耄れぬ積りてあります。其の翌年に又再び參られた。終に假條約が出來ると云ふことになりました。

其の頃に政治を執つて外交談判を致した幕府の閣老は阿部伊勢守、堀田備中守、或は間部下總守、若くは安藤對馬守、終に井伊掃部頭と云ふ人が大老になつて、追々に外交が進んで參つたのであります。其の頃です、私共幕府が外國に對する政略は唯己が怯懦なるために服従するのである、所謂城下の盟であると、其の頃流行した水戸風の學問から支那宋末の歴史を讀みて、秦檜は金と和した、或は王倫孫近と云ふものは皆姦臣で、是等は皆國を誤る者であると云うて、胡濙庵の斬奸の表だとか、或は李綱の上書だとか、さう云ふやうな書物を見て、所謂慷慨悲歌の士で世の中

を押廻したのであります。其の頃には攘夷は必ず出來るものだとか考へた。斯様申すと私ばかり甚だ智恵のない人の如くに御聞きなさるか知らぬが、其の頃の輿論と云ふものは殆ど左様であつた。否、輿論のみではない。畏れながら、孝明天皇が、閩國焦土となるも攘夷はせねばならぬと云ふ、叡慮は、屢、あらせられたことである。然るに前に申す通り、明治の初め、歐羅巴に參るに付いて、段々世の中の有様を察して、是は攘夷と云ふことにのみ考へ居つたのは、大に心得違だと覺悟して、爾來三十七年間、誠に心得違な智恵のない人間だと今も尙ほ恥ぢて居りましたが、再び考へて見ると、矢張昔の幕府の官吏が政を誤つたと云ふことも決して無かつたのでない。又其の時分に外國にも差別があつたと云ふことを吾々解釋せなんだのである。若し誠に今日の露西亞であつたならば、矢張攘夷と覺悟したのが誠に尤であつたかも知らぬ。丁度文久元年である。露西亞は對州を占領しようとして、掛つたが、英吉利が力を盡したために、漸く對州を引拂つたことが、歴史に明瞭に書いてあります。果して然らば、其の時に吾々の夷狄と言つた亞米利加は夷狄でなかつた。英吉利も夷狄ではなかつたが、併し露西亞は夷狄であつたのである。斯

く判断しますと、三、四十年前の攘夷家は、聊か今日に於て面目を保つことが出来る  
と申して宜しいのである。若し此の中に其の當時の攘夷家が在るならば定めて  
蟄息してござらうが、今私の懺悔する如くに、吾々も其の時分の攘夷家だと自ら思  
はるゝのでありませう。(明治三十八年三月十五日、歌舞伎座に於て)

### 五三 實業界に對する吾人銀行家の抱負

大藏大臣、外務大臣閣下及び臨場の諸君、今晚は東京大阪等六箇所の手形交換所  
を組織して居ります銀行者が、毎年催します聯合の懇親會でございまして、か  
かる好機會に當局諸公の尊臨を仰ぎまして、種々なる御話を承りまするのは頗る  
光榮と考へて、總理大臣始め陸海軍の大臣まで尊臨を請ひ上げましたが、生憎と總  
理大臣及び陸海軍大臣は御差支の爲に光臨の榮を得ることが出来ませぬ。併し  
幸に吾々が最も營業上關係の深い大藏大臣並に次官、又外務大臣、日本銀行總裁、其  
他諸君の御尊臨を得ましたのは、吾々の最も感謝に堪へぬ次第でございませぬ。蓋  
し吾々が毎年催します所の聯合懇親會でございまして、折角の尊臨に對して

別に御響應を致す品もございませぬが、唯多人数相集つて雑話を御耳に供へ得る  
に過ぎませぬ。御接待の不行届は只管恥入りました次第にござります。私は茲  
に一同を代表致しまして、臨場を辱う致しました諸公に感謝の意を表します。

斯かる好機會に於て、此の交換所の經過と、吾々銀行者の抱持する意見とを尊聽  
に達しまするは、敢て無要の辯てなからうと考へます。但し餘り事古うございま  
するから、或は煩はしいといふ御嫌もございませうけれども、茲に一言申述べたう  
ござります。斯く申上げますと、下手な學校教員が經濟初歩の講義でも致す  
様に相成りまして、當局諸公に對し、又御集りの銀行者諸君に對して餘程御耳うる  
さう御感じなさらうとは思ひますけれども、存じ込みました事を少し御話し申上  
げたいと考へますから、どうぞ御懽陶しくも暫く清聽を煩はしたうございませぬ。

實業立國論

凡そ國家の富強は政治が善くなければならぬとか、教育が宜しきを得なければ  
ならぬとか、法律が完全でなければならぬとか、兵備が整うて元氣が強くなければ  
ならぬとかいふ事は、すべて緊切の要務であるといふことは論を待ちませぬが、其  
の中に吾々が最も數へ上げたいのは、即ち商工業の發達であると思ふのでござい

ます。若し前に數へ上げました數種のもが如何に完美であつても、眞の實力が進んで行かぬ國柄でありましたならば、決して富強を世界に誇ることが出来ぬであらうと思ひます。而して其の實業の發達するといふは如何なる事に原因するか、是も亦其の種類を擧げて論じましたならば實に數多いこととてございます。商賣も繁昌しなければならぬ。運輸も便にせねばならぬ。工業も盛ならねばならぬ。農業も進歩せねばならぬ。保險事業も整頓せねばならぬ。斯く數へ來りましたならば、社會百般の事皆實業中に數へ込まねばならぬ様になりまするが、中に就いて最も各般の實業をして發達せしむる大きな機關、必要なる利器は何であるかと云ふなら、私は金融上の宜しきを得ると否とに歸するといふことは、蓋し過言ではなからうと思ひます。

蓋し國に通貨あるは、頗る講義に類する言語に相成りまするけれども、尙ほ人の身體に於ける血液とも申すべきもので、若し甚だ其の度を過さんか、必ず各所に充血を起して、壯んなる身體も健全を保つ事が出来ぬ。又之を少くせんか、終に貧血の病を起さぬとは申せないでございませう。故に此の通貨といふものをして、商

工業に對して適度たらしむるといふことは、經濟學者も困難するところ、政治家も困難するところ、又吾々銀行者も困難するところ、始終相苦しんで居るのでございますが、而して其の宜しきを得るや、果して其の國の總ての物貨的物事が進んで往くといふことは、信じて疑はざるところと申して宜からうと思ひます。是に於て私共が、國家の富を計るに付いて實業が肝要であると云ふと同時に、吾々の職とする銀行が其の樞要なる位置にある、以て自ら重んぜねばならぬといふ事を、常に自ら信じ且つ勤勉して居ります次第でございます。

銀行の日本に創立せられましたのは、明治の初年でございます。歳月を経るごと最早三十年餘に相成ります。其の間前に申上げました通貨流通の方法に付いて政治上からも力を注いで下され、吾々自身も亦種々に考案を盡して、常に其の便利を計るといふことに盡力して成り立つたのが、手形の交換所であります。手形交換所の成立せない前に於ても、手形をして商業上の便利に供するといふことを務めたことは、蓋し日淺くはございませんので、幸に一般の機運が銀行を必要とし、又手形を必要とし、終に此の手形交換所といふものが世の中に、即ち實業社

商工業の  
發達と手  
形交換

會に必要視せらるゝやうに相成つて、東京に、大阪に、神戸に、西京に、横濱に、名古屋に、終に全國に六箇所の規則立つたる交換所を成立せしむるやうに至つたのでございます。

前に述べました通り、通貨の商賣上に必要なのは、尙ほ人體に於ける血液の必要と同じといふ例を近く申さうならば、若し此の貨幣の數のみを増すと致しましたならば、忽ち物價に強い影響を惹起して價位を騰貴せしむる。さらば甚だ其の數を減ぜんか、取引上に梗塞を生じて商業に不便を來すといふ様な譯で、譬へば今夕の宴會に於て、若し此の百名乃至百二十名の來客が一時に食事をするに對してどれ程の給仕を要するか。時を一にし場所を等しうして規則立つ運搬、便利なる配膳を致しましたならば、其の給仕人の數を大に少くして、其の用を達する事が出来る。試に百人の來客に對して十數人の給仕て用を辨ずるが、若し悉く別々に配膳せよと云うたら、百人に對して百人以上の給仕人ならては配膳をすることが出来ぬ。貨幣の物品に於けるも又これと同様でありませう。然らばこれを節せんか、方法其の宜しきを得なければならぬ。即ち此の手形の流通と手形交換所の便利

とが、貨幣を商業界に節約するに於て其の方法の宜しきを得たるものといふことは、卑近な譬ではございますが、前に申上げましたので、或は思ひ半に過ぎるであらうと考へます。而して此の六箇所の手形交換所は、年一年に其の交換高も進みまして、終に今日では明治三十七年の統計を一覽致しますると、六箇所で四十一億以上の高に進んで居ります。當三十八年に於ては、まだ四箇月だけの統計しか見ませぬが、既に業に十數億に上つて居りまして、前年に超ゆること殆ど三億近うございませぬ。或は五十億に垂んと致さうかと考へるのであります。以て此の手形交換の如何に必要であるか、如何に進歩したるかといふ事が證明し得られようと思ふのです。

吾々銀行者が通貨に付いて成るだけ便利を得たいといふのは、單に吾々銀行者のみが満足すればそれで宜しいといふ意味ではございませぬ。前にも申述べました通り、國家の富力、國家の強力といふ事を希望致す觀念からしては、決して吾々の意念は、日本の實業は唯此の日本だけの繁昌のみ満足すればそれで宜しいとは思はぬのでございます。蓋し政府當局者の意見も吾々と同じうして、朝鮮に、支那

國旗の光  
彩に伴ふ  
實業界

に、其の他の國々に努めて其の開放を計つて、吾々の商賣の便利を進めることに汲汲致して居る。我が日本の商工業を、少くとも東洋に於て其の中心の位置に立たないといふことは、決して吾々銀行者のみの希望ではないといふことは、蓋し過言ではないと信ずるのでございます。想ふに商賣といふものは、國旗の光彩に依つて發展するものである。又商賣の進度に依つて國旗の光彩が隨伴する。言葉を換へて云へば、此の關係といふものは、何れを先にして何れを後にするかといふことは、如何なる政治家と雖も學者と雖も、一朝一夕に論斷することが出来ぬと思ふのであります。

孟子の所謂  
矢人函

元來吾々銀行者などは成るべくたけ遠慮し、成るべくたけ謙遜するといふことは、恒に心掛けねばならぬのである。故に此の政治若くは軍務等のことに就きましても、餘り副はないといふことが常でございます。例へば政治家又は軍人などは、比較上多く物を費消するを務むるのである。吾々は物を生産するを務むるのである。こゝで孟子の所謂矢人函人、即ち鏝を造る人と矢を造る人の譬の如く「矢人、惟恐不傷人、函人、惟恐傷人」、殆ど其の性質が相反して居ります。丁度これ

と同じやうに、吾々は常に物の生産力を進めようと思へて居る。軍人は——或は其の中に政治家も入るかも知れませぬが、物を費消するといふことを考へて居られる。大藏大臣杯は無理槍に租税を御取りなさるが、一言に之を論じたならば、まゝて正反對のやうに考へられますが、蓋し此の費消たるや大に生産力を増すための費消と解釋致しますから、吾々は其の費消に對して不平も云はなければ苦情も云はない。獨り平日に於て不平苦情を云はないのみならず、萬一國家有事の際、即ち國家危急の場合に出會つた時に、奉公の念を逞しうして、明治二十七八年であれ、又明治三十七八年であれ、國家に報ずる務として、軍費に對する供給といふものは、此處に居る銀行者が率先して力を致したと云うても宜からうと思ふのでございます。斯様に平日餘り相副はぬが如く見える者が、左様に力を致すといふのは、即ち相共に國を愛するといふ赤誠から茲に至つたのであるといふ事を、私は諸君の御面前に於て申し上げたいと思ふのでございます。但し此の事を申し上げますに、陸海大臣の尊臨を得なかつたのは、私は少し遺憾に思ひますが、但し斯く大きな聲で申しましたならば、私の如き中耳炎を煩はぬ陸海軍大臣であられたならば

御耳に入るだらうと考へるのであります。

三年経つて三つに悟るの覺

吾々は國家に對して盡すといふ事は念々忘れは致しませぬが、唯悲しいかな、未だ歲月も十分に經過致したとは申されぬ。又一方には吾々の才も足らず、力も乏しく致して事志と相添ふ譯に至りませぬから、總てのことが彼の歐米杯の進んだ有様に比較すると甚だ慚愧に堪へませぬのです。支那の言葉に「士三日不<sup>レ</sup>會<sup>レ</sup>刮<sup>レ</sup>目可<sup>レ</sup>相待<sup>レ</sup>」僅に三日で大に面目を革めるといふ事を形容してございます。又此の東京が昔江戸と云うた時分の極く卑近な諺に「江戸兒は三年経てば三つになる」といふことがございました。是は蓋し物の成長して往く歲月の順序を意味したものと考へます。吾々は「三日不<sup>レ</sup>會<sup>レ</sup>刮<sup>レ</sup>目可<sup>レ</sup>相待<sup>レ</sup>」といふ程にはまゐりませぬ。一年經過しても唯僅に一割進んだとか一割五分進んだとか申す位であります。十年経つても十にしか成長せぬとかいふ有様ではございますけれども、併しながら明治初年の未だ銀行の成立しない前と比較し、又近くは手形交換所の眞正の成立は明治二十四年と考へますが、此の明治二十四年頃と比較し、若くは近く日清戦争の時期と此の日露戦争の大時局とを比較して見ましたならば、或は三年経つて三つに

なつたと申すことが言ひ得られようかと考へられます。但し政治上若くは軍事上の進歩は、三年にして十くらゐ御進みなさるやうてございますから、其の進歩に對しては後へに瞠若たらざるを得ませぬ。併し吾々も脊は低くとも足は短くとも、せつせと歩いて居るといふことだけは、どうぞ當局の諸公に御承認を願ひます。今夕は御忙しい中を御繰合を戴いて、御饗應も甚だ手薄いのに、斯く失禮なる言語を發して此の尊臨を謝し上げますのも、蓋し吾々共銀行者の衷情赤誠と御聽きなしを戴きましたら、實に有難い仕合でございます。茲に尊臨諸公の健康を祝しまするために祝杯を挙げます。

(本篇は全國交換所聯合會に於ける演説にして、明治三十八年七月二十日發行の龍門雜誌に掲載せられたるものなり)

## 五四 實業教育に對する希望

當區の教育會の講談會に於きまして、私にも意見を申述べる様にといふ、從來風祭區長さんとは御懇親が厚うございましたので、其の御依託を被りましたに付いて、此處に參席致して諸君に御目に懸る次第であります。御聞及びも下さいませ

す通り私は教育家で無し學者で無し斯かる御席に上つて諸君を裨益する御話をすることは甚だ困難でございます。併し既に御依託を受けて此處に罷出ました以上は、所見を申述べて御參考に供し併せて大方の御批評を請ひたい。そこて是は少しく教育家らしい「實業教育に對する希望」といふ演題を此處へ掲げた譯でございます。斯様な演題を出しますと何か大層教育に始終熱心に屈託して居る如くに思召すか知りませぬが、な、か、く、私は古風な教育を受けた人間で、近時の教育には甚だ御疎遠千萬でございますから、寧ろ教育に對する惡口でも言ふ様になるかも知れませんが、其の邊はどうぞ御容赦を願ひます。

今日は實に教育も充分に進歩して參りまして、種々な方面が殆ど完美と云うても宜い様になつたと思ひます。併し其の年月を教へて見るとまだ僅に三十年でございませぬ。私共はもう大分な年寄でございますから、今日の教育に與つた人間では無い。さらば如何なる教育に與つたかと御問になると、殆ど先づ無教育な人間と申さざるを得ぬのです。但し多少の漢籍だけは小供の時分に幾らか讀みました。さりながら、商工業などに對する教育といふものは當時は先づ無かつたて

往古の學問と實業教育

す。私は都會で生立つた人間で無い。田舎漢ですから、其の時分の都會の風を能く存じませぬが、我々の生長した田舎の商工業に對する教育は如何なるものがあるかと言ふと、「商賣往來」と「塵劫記」。あなた方多分さう云ふ書物を知らなうせう。此の二つが商業教育上唯一の書物であつた。「塵劫記」といふものは算術の書物、「商賣往來」は商賣をするに付いての手續である。偶、稍高等の教育といふものは、聖堂で漢學を修めるといふのが先づ都會に於ける教育で、田舎漢はそれく、の村學窮があつて漢籍を教へる。それは丁度前席にも誠心誠意の御話がありました、先づ大學、中庸、論語、孟子、或は孝經、史記、漢書、左傳といふやうな鹽梅に讀ませる教育法であつたのです。故に科學上の教育などといふものは殆ど無かつたのです。例へば理科であるとか、文科であるとか、工科であるとかいふ如き種々なる學科は、維新後に於て國家の發達は教育を盛んにせねばならぬと先覺者が著目し、大にそこへ力を入れられた結果で出來た學風です。而して此の教育を盛んにしたのは、先づ日本の國運が今日の如く發揚した元素と申しても宜からうと思ひます。例へば兵事が此の如く進んで行つたのも、法律が此の如く完備し

卑下され  
たる既住  
の實業界

たのも、又商工業の制度が進んで参りましたのも、皆教育の力に依ると申して宜しい。さりながら、其の中にも實業に對する教育は、或は他の教育の種類に較べて見ますると、寧ろ後から進んで参つたといふことは事實争はれぬのでございませう。是も既往の御話ですが、一例を申しませうならば、私は其の本務は銀行者でございませうけれども、種々な工業にも關係致して居る。今現に東京に瓦斯會社といふものがあります。此の瓦斯會社のその以前は、東京府廳でやつて居つた者で、瓦斯局と稱へ、而して其の事業は一の化學的作用に依つて石炭を焼いて瓦斯を作つて、之を鐵管に依つて送つて家々の燈火にする。さう云ふ事業である。其の事業にはそれ／＼技師が要る。初めは外國人に依つて經營致して居りましたが、何時も外國人のみに依つて經營しては甚だ面白くないから、是非日本人を技師に使ひたいと言つて其の頃の帝國大學の總長をして居つたのは、今も尙ほ存在して御出で、加藤弘之君であつたです。私は其の瓦斯事業の局長といふことを東京府知事に依託されてやつて居るが、日本人を是非技師に雇ひたいというて種々心配して大學卒業生を相談致した。其の相談した時に於て、大學卒業生が官員になるのな

ら宜いけれども、どうも瓦斯事業などと申すのは所謂民業である。丁度民間に降るやうな理窟になるから、他の人と比較して、せめて給料でも餘計にならなければ私は嫌だと、斯う云ふ斷りてありました。今聞くと少し可笑しい様で、——此の御席は多くは官途に御座る御方は殆ど無いでせう。故にさう云ふ話を聞いたら、怪しからん奴だと御憤りがありませう。私も其の時に大に憤つた。どうも此の世の中に於て、左様に學者が考へて居られるといふ事は大間違ぢやないか。殊に政治學でもした人ならば、まだしも宜いが、理化の學問であつて應用化學を致した人が、民業に移ることは甚だ恥かしいと言ふに至つては、成る程其の同輩が皆大抵教員たり官吏たりといふ有様であるものですから、其の人がさう云ふ觀念を起したけれども、其の觀念は詰り其の周圍が悪いのだ。其の先輩の之を教育する人が悪いのだと、斯う私は深く感じて、遂には其の事に付いて加藤弘之君に喧しう御話をして、此の如き主義を持ち、此の如き意見を以て教育を盛んにして御座るといふと、出来る人も出来る人も皆御役人、御役人にあらざれば教師……教へられる人が無く、治められる人が何處にも無く、皆治める人ばかり皆教へる人ばかりであつたら、



天下は富みもしなければ強くもならぬといふ理窟にはなりませぬか。随分可笑しい議論で、今日は小學校を卒業した人も其の位な事は譯は無い。今湯本さんが言はれた程度の低いといふ商人すら尙ほ理解する理窟であるが、其の時分私は相當の年であつたが、赤い顔をして議論をする程の次第であつたてすから、日本といふものは未だ教育も幼稚だといふことは、諸君餘程御考を下さらくちやならぬのです。さう云ふ時代があつたのです。併し是も其の一時の有様で、爾來殆ど廿四五年の歳月を経ました。今の御話は明治十三年と記憶いたしますが、今日に至りますると實業の教育に付いても、種々なる方面に相當な設備が整つて、又縦し實業とのみ言はぬ。或は大學であれ其の他の學校であれ、政治に法律に依つて學ばれた人も、尙ほ實業に意を用ひて、實業家となるといふ程に、世の中が進んで參りましたといふ事を私は喜ぶのであります。前の既往談は、唯教育といふものが維新以前は如何なる有様であつたか、維新後と雖も斯かる場合もあつたといふ事を一つの経過の道行として茲に一言を申述べるのであります。さて現在の有様は誠に完美いたしたと申して宜しいが、私は此の教育に對して二三の希望を述べ

修業年限  
を短縮せよ

て置きたいと思ふのでございます。但己が教育の實務に従事した人てなし、又教育を充分受けた身體でないから、素人が何を言ふかと、臨場の諸君の中には大分御黒人の御方も御列席の様でありますから、或は私の申上げることが正鵠を失うて居るかも知れませぬけれども、若し又是が假令素人の言葉と雖も、所謂他山の石以て玉を磨くことが出来たらば、此の上もない仕合と思ふのでございます。先づ此の教育と云ふことにも種々ございしますが、私が茲に申すのは我が本務上から實業に關することを意味して申上げたいと思ひます。例へば其の實業と言つても、どうも此の日本の教育が餘り數が多いためか、年限がどうも少し餘計過ぎはしないか。尤も或る程度に止めて、其の向ふは實務に就くとして行くならば、それは二十の時からでも實務に就けるが、蓋し中學だけを卒業して直様實務に就くと言つては、世間が之を完美なる教育を受けた人とは言つて呉れぬ。少くも高等商業學校位は卒らねばいけぬといふ事にしますると、年が二十四五にはどうしてもなりません。又若しこれを大學まで修め了るとすると二十七八に相成る。まあ追々に衛生法も喧ましくなり、醫術も進んで參るから、日本人全體の年齢が大分

延びるやうになるでせう。例へば平均三十五であつた者が四十にも四十五にもなるてありませうけれども、併しどうも歐羅巴人と比較して見ると、生きる年限も少し少いやうな、又弱る年限も早いやうに私には思はれる。我々は前に申す通り殆ど無教育と言はれるかも知らぬが、僅か漢學教育の人間であるから、例へば碌な學問はしませぬが、併し働く年限は長いのです。現に私は十七八の時からどうやら斯うやら働きました(一人前とは言へぬでせうが)。さうしますると丁度殆ど五十年働いて居る譯だ。當年六十六歳だ。假に十六から働くといふと五十年働いて居る。所が今學校を卒る人が二十七八で卒つて、それからどうしても二三年は見習實務を経ねばならぬ。さうすると三十以上になる。若し五十四五から弱くなるものとするも、働く年限は二十年位にしかならぬ。比較して之を計算する私の學問は極く金が要らぬ學問で、而して年限が短くて、——成る程働きは確かなことは出來ぬ。出來ぬが今大學の御方はどんな事を致しますか。或は色々な機械の學問がどうか、世界の地理歴史がどうかとかいふことを講釋させたら私より豪いでせう。併しそれは日々要るかといふとそれ程要りはしない。また羅

馬字の講釋でもそれ程の効能はありませぬ。併しその費す時日、費す心勞は私と比較すると大變に餘計費す。それは誠に多とするに足り、實に勞苦を御察しするが、其の御察しする中に世の中に効能が現はれば宜いが世の中に現はれる効能は甚だ少い。一向差引勘定が合はぬ。まあ悪く申すといふと、土地の悪い所て出來た蜜柑が皮ばかり厚くて、筋がたんとあつて中身は極少々で、喰べて見ると酸ばい。斯う云ふ様な有様だ。兎も角も先づ其の様に學問を粗末にせいといふ意味でないから、二年も三年も詰めるといふ譯にいかないが、何しろ私は一年若くは一年半も此の學業の成る時間を詰めて成業せしむるといふ趣向が、教育家が御考へなされたなら好くは有りはすまいかと思ふ。甚だ是は希望に堪へぬのでございませぬ。併し此の教育の方法は、長い間に斯かる形造りをなしたので、俄かに變更しようといふことは、な、か、く、今日私が此の席で大きな聲をして饒舌り、皆さんが手を御拍ち下すつても速かに直るものでも無いけれど、併し事實さう思ふならば、即ち先刻湯本さんが言はれた通り、誠心誠意といふことを私は茲に表的に見たいと思ふ。

第二に御話して見たいと思ふのは、何と申して宜しからうか、吹込主義と自修主義の教育です。何でも護謨か何かにも吹込む様に、ふつと吹込んで膨らがつたのは暫時膨れて居るけれども、自身で膨らがつたので無いから、其の息を吹込む間は宜いが、息が無くなると直ぐと抜けて仕舞ふ。是は鼓吹的教育と自修的教育と、文字で言うたらそんなものになりませう。私は好い文字を知らぬけれども、最う少し吹込主義を減じて、さうして自修教育といふ事が大切かと思ふ。但し極くまだ小學若くは高等小學中學位までの者が自修の學問を先として行つたならば我儘に陥る。小供の中には吹込むといふことが必ず無いとは申されませぬけれども、家庭なり教師なり、相當な檢束を加へ誘導する間に監督を充分せねばならぬといふことは論を俟ちませぬのです。唯單に放任的自修を私は望むといふのではないけれども、干渉して何處迄も鉢植の盆栽見たやうに考へるといふ教育は、寧ろ宜く無いと斯う言ひたいのでございます。今日の有様は、決して教育が唯吹込主義鉢植教育をすると全體を批評する譯では無いが、若しさう云ふ有様であつたらいけない。先づ最前はさう云ふ姿が強かつたが餘程改正し掛つた様だ。尙ほ

今日其の點に於て注意が欲しいと斯う申上げるのでございます。

最う一つ申上げたいのは、此の生徒を教育する先生方は、成るべくだけ生徒の小孩の中から努めて共同的觀念を惹起させる様になりたいと思ふ。どうも元來日本には私に屬する事は餘程進んで居るけれども、公德の修らぬといふ弊害の強いといふ事は、歐羅巴人に誇られることであります。其の根原は何處に在るかといふと、初めの教育から、それ／＼充分なる注意を以て、自然の習慣を作るといふことが甚だ必要ではないかと思ふ。蓋し國家は箇々別々に限られる者では無い。共同の力で進んで行くといふことは、私が茲に論ずるまでも無いことで、殆ど定論である。また日本の一體の有様が歐羅巴の有様と異なるのも、此の公私の分界である。成るべくだけ此の公德を修める様に、多くの人間の集つて事の行届くといふ仕組は、我と彼とても大に彼が進んで居る。我は之を學ぶと申さねばならぬのですから、別に私の優れることもありませんけれども、右等の善い事は成るべくだけ小孩の中から追々修養せしむるやうにありたい。即ち公德を修める様に、共同一致の觀念に素養を作るやうに、偏に教育家の御注意が欲しいものであると斯う思ひ

萬能主義  
の教育を  
排す

ます。

又今一つの望みます事は、成るべくたけ此の一に専らにして多岐に涉らぬ様にあ  
りたい。但しさう言うても、色々な事を知らなければ學問とは言へぬものですか  
ら、或は理學も教へよう、化學も教へよう、文學も一通り、詩文も作らせるといふやう  
にすることは必要かも知れませぬけれども、成るべくたけ豪傑肌の萬能主義にな  
らぬ様に、一事に専らに掛る様にと心掛けさせる様にありたいと、斯う云ふ趣味で  
ございます。是も口では雑作なく言ひますが、なか／＼さう云ふ觀念を深く強く  
進めて行くといふには、教育家たる御方も亦御骨が折れるであらうと思ふ。左様  
申す私なども随分萬能主義と人に誇られる方であるが、人間は其の方にどうも走  
り易い。斯んな人を作らぬといふには、どうしても成るべくたけ此の世が進む程  
分科が強くなるから、其の分科事業が充分著しく行けるやうにと考へる日には、成  
るべく萬能主義の人間は作らぬ様にありたいと斯う言ふのであります。

至誠の觀  
念を鼓吹  
せよ

更に今一つの希望を申し上げますと、今湯本君が誠心誠意の御講義が充分ござい  
まして、斯かる事柄を此の教育に御主張になることは私は甚だ感謝に堪へませぬ

様に思ひまするがどうか此の人間に至誠といふ志が甚だ薄いといふ事を常に憂  
ひて居りますのでございます。殊に此の實業に従事する者が眞摯正直といふ事  
が常になければ、決して實業は發達を爲し得ずと迄、私は深く信じて居りますので  
ございます。少し御話が枝道になりますけれども、維新の總ての文物が變化して  
行きます其の中の、最も強く變化を受けましたのが、私は軍人と商工業だと思ふ  
のでございます。其の他にも總て革命の力は及ぼしましたけれども、殊に其の革  
命の緊しいのは今申述べたる二つである。一例を言ふならば、封建時代の軍事に  
係はる人は所謂武門武士、皆侍士さむらいといふ名を以て、總て相當なる教育を受け世祿も  
あり、普通此の社會で上位を占める人が多かつたのです。尤も兵卒には足輕とい  
ふやうな者もあつた。是等はそれ程に好い教育を受ける種類ではなかつたと言  
うて宜いのです。是等の者が總て國家扞衛の任に當つて居つて其の中でも薩摩  
が強いとか長州が強いとかいふことがありますけれども、維新の改革から兵制と  
いふものが全く變つて來て、武門武士といふ者は悉く止んで、全國皆兵といふ主義  
からして、百姓も出ますし町人も出ますし、種々の種類の者が兵員に加はつたので、

此の兵員を比較して見ますると、昔日の類よりは下級から這入つて来て、大に其の種類が下落したと言つても宜しいと思ふのでございます。また之に反して商工業は如何あるかといふと、昔日の制度は、重なる商賣品の取扱は寧ろ政府が管理して居つたのですから、事實商賣人といふものは殆ど小賣商人に過ぎなかつた。故に前にも申上げる通り、教育の度合も甚だ低くして、殆ど無教育同様なる有様に極く輕蔑されて居つたことである。殊に其の區域は日本の中に限られ、其の日本の中でも重なる商品は政府の力に依つて運搬されて居つたのですから、運送も倉庫も總て政府がやつて居つた。其の僅かな小賣だけを商賣人が取扱ふ故に、商工業といふ位地は誠に狭く且つ低いものであつた。宜なり、今申したやうに教育も誠に簡單であつたのです。然るにこれが海外と通商をする歐羅巴の端でも、印度の向ふでも、支那朝鮮でも、何れの場所へも通商貿易が出来得るやうになつて、其の範圍が廣くなつたのと任務の重くなつたのとは、實は昔日とは雲泥と言はうか霄壤と言はうか、比較にならぬ進み方である。而して商賣人といふ者も左様に事業が多くなつたからして、昔日の商人（ちやうど）といふばかりでは足りぬ。て斯く申す私なども

其の時分には一時役人を致した身體が、所謂役人上りて商賣人になつたといふ人も決して少くございませぬ。色々な者が打交つて此の商工業を進めるといふことになつて来たのです。故に丁度前に申す軍隊の有様から言ふと、寧ろ上流から御仲間入りをしたと言つても宜いやうなことで、幾らか比較的教育もあり道理を知つた連中が雜つて来た。果して然らば此の兵員武人の方は實務に當つて大に退歩して、商賣人の方は昔日よりは大に進歩して宜い筈である。然るに事實に於ては反對な有様を現した。試みに明治二十七八年若くは三十七八年の軍人の實務に就いた働きを見ると、實に我々は唯々一方には感謝し、一方には驚嘆し、斯く迄に日本が強いか。斯く迄に逞しい働きが出来るか、聞く度毎に感謝を表する。成る程軍人は規律に於て平日は充分に制裁するであらうが、すはといふ場合になつたならば、今日の兵は昔日と訓練が違ふからして、或は生命を惜しむといふやうな事でも生じやしないかなどと私共は眞に思つた。所がそれは全くの誤解であつて、事實には著々吾々想像に能はぬ程の所謂勇敢義烈、勇武絶倫と稱しても宜いやうな働きを見る。是は何に原因するかと云ふことを講究して見たいと思ふ。

之に反して、商工業に於ては多少の進歩はございますけれども、どうも商業道德が進まぬ。或は斯ういふ不徳義な取扱がある。斯う云ふ不都合があると云ふことを時々耳にする。彼の盛んな有様驚くべく感ずべき事柄に比較しますると、商工業者は實に赤面慚愧に堪へぬと申さねばならぬやうに考へますのでございませう。蓋し一方は至誠以て國に報い君に奉ずると云ふ觀念の強いのと、商工業に付いては自分から營利仕事、又は技術に屬する事なので、多少智識を持たねばならぬ。殊に其の仕事が複雑だから軍事上の至誠を以て貫く、一死以て國に報ずると云ふ如く單純にいかぬ。此の點が一方は左様に發達し一方は後に墮落すると云ふことではないかと思ふのである。左様な事情であつたならば、前に申し述べた種々なる教育上の注意の上にも、もう一つ此の人格を大に進めると云ふことが、教育家の最も注意せねばならぬ所ではなからうかと思ふ。其の人格を進めるには何に依つて進めるか。即ち今の湯本君が懇切に御述べになつた誠心誠意が眞實に行はれて往つたならば、人格はこれに依つて高くなると申上げて宜からうと思ふ。教育上に付いては殆ど總てのものが備つて、立派な龍が出来たと云ふのである。此

の人格を善くすると云ふことが、假に其の龍に眼睛を點ずるものとするならば、未だ其の點は充分に完いとは申されぬ。若し左様であつたならば、此の龍は充分に雄飛することが出来ぬと言はねばならぬから、私は未來の此の學生をしてどうぞ其の人格を進めるやうに、教育家は前に述べた數箇條に加へて、最も強き力を以て人格を高尙にせしむると云ふことに御盡力を乞ひたいと思ひますのでございませう。茲に聊か卑見を述べて諸君の御參考に供します。

(明治三十八年七月二十五日、東京市教育會及び本郷區教育會聯合會の席上に於て)

## 五五 タフト卿及びブルーズヴェルト嬢の來遊 を迎ふ

閣下及び淑女紳士諸君、今夕は當市の銀行會社に従事する吾々有志者相寄り、今般北米合衆國陸軍長官タフト閣下及びブルーズヴェルト嬢、其の他の御一行の諸君が我が日本に御渡來相成りましたのを機として、茲に歡迎の小宴を張りました所が、幸に淑女紳士諸君の御尊臨を賜はり、且つ我が内閣諸公及び元老諸公の尊臨を辱

北米合衆  
國に感謝  
す

う致しましたのは、實に吾々一同に取り無上の光榮と存じ、深く感謝の至りに堪へませぬ。依つて私は茲に吾々一同を代表致し、式辭を一言陳述致さうと存じます。北米合衆國と我が日本との國交の始まりました年月を計算致しますると、僅に五十有餘年に過ぎませぬので、世の歴史の上から考へますると、決して長いものは申されぬのであります。併しながら、兩國國交以來の事跡に付いて熟考へ見ますれば、其の親交の次第に厚くして、其の關係の頗る深く相成つたと云ふことは、實に私如き不辯なる者の言語を以ては到底言ひ現はす事が出来ぬのでございます。蓋し吾々は今日に至る迄各種の賓客を迎へましたこと一にして止まんのので、特に今回の如き斯くも多數なる佳賓を迎へると云ふことも、亦其の親交が如何に深いかと云ふことの、之が一證であると云ふことは、茲に申上げることが出来ると考へるのであります。而して諸君が今回我が日本に御渡來相成りましたに付いては、此の佳賓諸君を歓迎致しますことが決して一方面のみではございませぬ。或は政治上に於て、或は社交上に於て、其の他各般の關係に於て、實に歓迎措く能はざる所て、之は私の申す迄もございませぬ。何となれば、抑、北米合衆國は我が日本國を

開いて下すつた國であるのみならず、五十年來の關係は政治上に於てはた貿易上に於てはた又各種の關係に於て、非常なる扶掖誘導を與へられたと云ふことは片時も忘れんとして忘るゝこと能はざるからでございます。而して斯かる非常なる關係ある中に、最も吾々實業家が肝銘致して居りますは、吾々の從事致します商業に對して北米合衆國の與へられた扶掖誘導と云ふものが一通りてなく、其の感化の實に廣且つ大なるものあるの點でございます。それ故居常吾々は深く之を感激して止まんのでございます。今回諸君が我が日本に御渡來相成りましたに付いて、特に吾々實業家が相寄り、實業家として諸君を歓迎する所以も、亦如上の次第に外ならぬのでございます。依つて佳賓諸君に於ても、どうか吾々實業家微志の存する所を御諒察あつて、吾々の誠意を御受け下されんことを懇望の至りに堪へぬのでございます。

是に付いて尙ほ申述べたい事は甚だ數多いこととありますが、所謂下手の長談儀は佳賓諸君に對し却て御迷惑と恐察致しますに依つて、最早此の邊に止め置きますが、茲に唯一言の言葉を添ゆることの御許を請ひたいのでございます。私は

此の一  
事  
を大統  
領  
に傳へ  
ら

三年以前佳賓諸君の御本國なる北米合衆國に遊びまして、當時幸に華盛頓のホワイトハウスに於て大統領閣下に拜謁するの光榮を得、其の時大統領閣下と種々の物語致し、大統領閣下が色々御話致されました中に、特に我が日本の軍事及び美術に付いて非常なる稱讚の辭を賜はつたのでございます。私は其の時大統領閣下に御答へ申すに、私は日本の商工業に付いて閣下より今日は御褒めを頂戴致すの資格を持ちませぬが、吾々日本の商工業者も借すに數年の歳月を以てしたならば、漸次これが進歩を來し發達を見るに至りますから、他日は必ず軍事並に美術と同様に閣下より御褒めを戴くやうになりますと申したところが、大統領閣下には笑を浮べて、さうかと云はれた一談がございます。今日に至りて之を想ひ起しますれば、其の時より丁度三年を経過致しますが、其の以來歲月も未だ短いこととございませぬから、尙ほ今日と雖も決して此の商工業に付いて御褒めの言葉を頂戴する迄の状態には立至りませぬが、爾來私自身は勿論私共同志者相寄ると、互に相計つて商工業の發達を致々汲々と努めて止まぬのでございます。而して唯之が効驗の多少あつたかと考へまするは、例へば昨年以來種々なる出來事に際しまして、

幸にも我が經濟社會は別に斯様な困難があつたとか、斯様な不都合があつたとか云ふやうなことは未だ無いと、私に於ては信じて疑ひませぬので、是だけは聊か申上げて宜からうかと考へるのであります。特に海外に對する信用に至りても日に益、加はり來りましたこと、杯を考へますれば、今日に於て未だ決して御褒めの言葉を頂戴致す迄の域には達しませぬけれども、段々に進みつゝあると云ふことは、申上げて宜からうかと考へるのでございます。仰ぎ願くはタフト閣下に於かれましては、御歸國の上大統領閣下に御會ひの節、どうか此の事を御傳へ下さるやう懇願して止まぬのでございます。

終に臨んで、私は來賓の淑女紳士に向ひ、重ねて當夜の尊臨を賜りたる厚意を深く感謝致します。尙ほ甚だ不束なる催してはありますが、ゆる／＼御遊びあらんことを希望致します。(明治三十八年七月二十七日芝紅葉館に催されたる京濱同實業家(の米國貴賓タフト卿並びにルーズベルト嬢歡迎會席上に於て)

## 五六 日露戦後の經營

一年有半に亘り我國の全力を擧げて今回の戦争に盡し、巨額の軍費を投じ幾多



の生命を賭したるが、幸に満足なる捷利を得、今や平和克復せられんとす。しかも平和條約の條項に就いては世上往々不平の聲高きが如し。予も亦同感を禁ずる能はざるの箇條なきにしもあらず。尤も未だ批准も了らざる今日の場合に於て、彼是喋々すべき限りにあらずと雖も、事既に今日に至りしことなれば、更に力戦を後の經營に盡すの外なきの時機となれり。されど夫の日清戦争後に於ける既往の情況を回顧すれば、思ひ半に過ぐる者あらむ。此の際實業家は兵事の爲に實業界の健康を害せざることを希望せざる可らず。

今回は日清戦争の比に非ずして、軍費の如きも頗る巨額に達せり。而も平和條件は不満足なりとせば、將來の經營は一層困難なるべきを疑はず。右に就いては或は悲觀し或は樂觀することを得べし。先づ樂觀說より述べんに、我が内地に於て募集せる國庫債券の、戦時中好結果を告げたるは洵に豫想の外に出でたり。之を二十七八年戦役の當時に比すれば、我が國は大に其の實力を増大ならしめたるを知るべし。今其の正確を期し難きも、二十七八年頃の我が國の富は百三十乃至百五十億なりと計上せられたり。當時國費は二億以内に止められたしと論述せ

戦後經營  
に對する  
悲觀說と  
樂觀說

るやに覺ゆ。然るに近時大に其の富を増加したるもの、如く、現に二百三十億と計上し、國費は六億迄は堪へ得べしとの説を爲すものあり。若し以上の如くなりとせば、將來益、實業を發展せしむることを得べく、また兵備其の他をも擴張若くは維持することを得べし。されば我が國前途の事亦何をか苦まんやといふは一理なきにあらずと雖も、是亦危険の感なしと謂ふこと能はざるが如し。

翻つて悲觀說をいへば、今回の戦争に於て要せる内外國債は結局十五六億に上るなるべし。随つて其の利息のみにも猶ほ約一億圓を支拂はざる可からず。然るに今日迄の増税は何れも始ど惡税ならざるはなく、随つてこれが爲に商工業界は打撃を蒙り、しかも本年一箇年のみとはいへ米作は甚だ面白からざるものあるが如し。斯く悲觀し來れば、結局我が兌換制度の前途をさへ其の危急を感ぜざるを得ずとも立論する事を得べし。要するに右樂觀及び悲觀說には雙方共何れも論根なしとせず。併し予の所見を以てすれば、悲觀に過ぐるは間違なり。さりとて樂觀に陥るも亦不可なれば、之を折衷して將來を處理するの外なかるべしと信ず。

内外公債の整理

次いで戦費に對する内外公債の整理は如何に處理すべきか。固より其の整理の必要なるは論を俟たずと雖も、兎に角之を整理するに就いては、今茲に其の年限を明言し難きも、左程急激に執行せざるも亦可なるべし。多少長引くも之が整理を行ふ能はざるにあらざるべし。而して公債整理の必要上、必ずしも歳入を増加せしめずとも出來得るの手段なきか。

軍備に對する意見

此の際軍備の擴張又は整理は、實業界に取りて最も重大なる問題なり。予固より軍事の門外漢なるも、兎に角我が國は戦争のみが精神にはあらざるなり。而して此の擴張及び整理は大に考案を要するの問題なれば、成る可く其の經費は節減を加へざる可らず。要するに一時に其の經費を膨大せしめず、軍備の擴張を爲し得るの策なきにあらず。夫の世上に傳はる所の二年兵役論の如きは即ち是なり。

政費の節減

戦後特に希望して已まざる所は政費の節減なり。由來政費節減の事たる年來の問題なれども、今日に至るも猶ほ未だ其の實行を見る能はず。されば今日の場合に於ては、特に廟堂の人々に向つて政費の節減を促さざる可らざる者あり。若しそれ政費の膨脹すべきものに向つて節約を加へ、節約し得べきものに對して減

國富増進策

少せしめなば、今日の大勢上到底同一の金額を以てしては、將來各般の事務を維持すること能はざるべしと雖も、日清戦争の際に於けるが如くに、八千萬圓内外の政費を一躍一億七千萬圓に激増せしむるの要なかるべし。兎に角其の施設の方法如何に依りては、斯くの如く多大に、しかも急激に政費を増加せしむるには及ばざるべく、而して其の財源は之を調査し之を熟考するの必要あるは固より論なきも、一を二にするが如く急激なる増加を爲すには及ばざるべし。

更に國家の富を増進せしむるの方法如何。近年輸入超過の趨勢滔々として殆ど其の底止する所を知らざるの有様なり。尤も戦時中に於て特に輸入超過の趨勢盛んなるものあるは、蓋し勢の已むを得ざる所なるべきも、其の原因の依つて來る所を考察せざれば、終に或は外國品に逐ひ倒さるゝに至るなきを保し難し。併し溢れても猶貯ふるが如きの主義は不可なるも、兎に角如何にしてか輸入超過の趨勢を防遏する方法なきか。夫の鐵類、砂糖及び油等の如きに就き、其の消費の状況を調査探究するの要あり。

尙ほ海外貿易品の輸出に對する政府當局の獎勵は、今日迄之を努めざるには非

ざるも、猶ほ其の足らざる所あるを覺ゆ。今其の一例を擧ぐれば、夫の生絲の如き、今や約二十萬梱の多數に上り、之を十年前に比すれば殆と十倍せるの盛況に向ひしも、其の生産上に就いては當業者何れも充分の便宜を享け居れるや否や。夫の繭運賃の如きは更に之を引下げて、充分の保護を與へ獎勵を加へ、以て國産の發達を圖らんには、尙ほ其の産額を増進せしむる事を得べし。其の他綿絲の如きも清韓輸出の道は開かれたりと雖も、綿製品の如きは主に米國品に壓倒せられ居れるの状況にあらずや。

鐵道運輸上の改良

更に戦後經營の一として鐵道運輸上の便宜を開かざるべからず。若し現在の鐵道をして單に軍事上の目的にのみ副はしむるの運輸機關たるに止めしむれば則ち已む。苟も然らざる以上は、現今の設備にては到底其の效果の甚だ少かるべきを疑ふものなり。況や商業貿易の上より審にこれを觀察するときは、現在の設備にては殆ど其の用を爲さざるべし。滿韓の鐵道の如き、亦滿韓經營の一として、も大に研究を要すべきの問題にはあらずや。港灣の設備、海陸の連絡の如き亦然り、而して獨り滿韓地方のみならず、内地の鐵道に對しても亦大に改良を加へ、運

滿韓經營

輸交通機關の發達伸張を圖らざる可らず。現に或る種の運賃の如きは之を引下げ得べきに拘らず、今も尙ほ引下げを實行せざるものあり。蓋し商品其の物の運賃のみならず、之が原料たり若くは之に關係を有せるものも之に伴はしめ、以て大に輸出を獎勵するにあらずや。國の富を増進せしむること能はず。

終りに滿韓經營に就いて一言せんに、滿洲地方に向け盛んに綿製品を輸入せしむるの道を講ぜざる可らざるは勿論、韓國補助貨整理の如き、今や著々其の歩武を進めたるも、猶ほ政治上其他に改善を加へざる可らざるは言はずも、がな、財産所有の安全を期するが如きは、韓國經營の第一要義なるべし。現今の如く、財産所有の不安此の上なきに於ては、到底富の觀念起るべくもあらず。既に富の觀念なしとせば、何んぞ克く家を富まし、國を強くする事を得べけんや。尙ほ鑛業、農業、其他各般の改良進歩を促すべきもの頗る多きを見る。

今や資本共通の道漸く啓けたるは、戦後の經營に力を盡すに於て頗る意を強くするに足るものあり。政府當局其の施設に怠るなく、本聯合會の如きまた益々努むる所あらば、先の十年より後の十年は却て戦後の經營上容易なるものあらむか。

要するに悲觀に過ぎず、樂觀に陥らず之を折衷して戦後を處理せしむることを望む。(明治三十八年十月四日、全國商業會議所聯合會に於て)

## 五七 戦後經營及び成功談

昨日來の雨天が如何かと思ひましたら、幸に好天氣を得て、此の秋期の總會を賑かに開かれましたのは、御一同と共に喜ばしき次第でございます。唯今森山君からして旅順及び日本海の海戦を詳密に御話を戴きまして、御同様平日至つて内輪の働を致して居ります者が、今日は俄に勇壯な活潑な觀念を惹起す様になりました。同君の御話は而も實地に身其の事を踏みましたのでございませうから、吾々新聞の號外に見ましたとは違ひ、殊に感情を強う致しまして誠に感謝に堪へぬのでございます。實に殆ど二年に近い此の大戦争、日露が、海陸の諸將校及び下士卒に至るまで勇武絶倫なる力を以て著々勝を占めました爲に、満足なる平和の克復を見ましたのは、國家の幸慶此の上もございませぬ。畢竟斯かる結果を得ましたのも、即ち海に陸に強い力を以て、謂ゆる世界の舞臺に古今未曾有の大勝利を博した

故であると考へますると、吾々國民は此の諸將校及び總ての軍人に對して、厚く感謝を致さねばならぬことと思ひます。宜なり、頃日來の滿都擧つて海軍の凱旋に對する歡迎、さもあるべきこと、存じます次第でございます。斯の如く御目出度い平和を見ました曉に、此處に御集りの龍門社の諸君は、是から謂ゆる平和の戦争に従事すべき職分であるから、斯様に平和は克復したが、此の後の實業界の進歩は左までしないと申されたならば、殆ど始あつて終ないやうなことになるはせぬかと考へますると、海陸の武勳の大なるに對して、吾々の責任が更に重くなつたやうな觀念が起ります。

戦後經營  
とは何ぞ

諸戦後の經營が肝要だといふことは誰も申しませんが、之を如何にして宜しいかといふことは、甚だ論斷はし難いと思ひます。元來此の戦後の經營といふ言葉に就いて論じて見ると、何も戦後だから特に此の經營を如何にしたら宜からうといふ疑はない筈で、平時でも戦争中でも、いつても世の中の進歩、實業の發達には同じ道行を以て努めなければならぬが、殊に戦後の經營を如何にしたら宜からうかと云ふ問題の生ずるは、宜しく是は謂れあることと考へねばならぬのであります。

なぜ戦後經營に左様な考をせねばならぬのであるか。もし戦後の經營は如何にしたら宜からうかといふならば、同じく平時の經營は如何にしたら宜からうか。又戦争中の經營は如何にしたら宜からうか。皆齊しく研究を要すべきであるのに、特に戦後の經營のみ如何にしたら宜からうかといふ考の生ずることは如何なる理由であるか。是は一つ考究する必要があるはしまいかと思ふのです。勿論世の進歩を謀り、實業の發達を努むるといふことは、いつても同じことである。平日でも戦争中でも、決して其の間に晝寢をして居つてはいかぬ。ぼんやりして居つてはならぬといふことは論を待たぬのであるが、兎に角に戦後の經營を如何にしたら宜からうといふは、是は特に考究する必要があると私は思ふのです。私の按ずる所によると、取も直さず人の身體に二十五歳が厄年であるとか、四十二歳が厄年であるとか云ふことがあるが、丁度さういふ場合に適當したものと考へて宜しい。假に明治二十七八年の戦争の有様を考へて見ましても、日本といふ一の健全なる體格が、而も順當に發達して大に面目を改むべき場合であつた。即ち人の二十四五歳の成人になりかゝつて來た時というて宜しい。斯かる場合には必ず

身體に變更を來して、是までよりは大に食量も進んで來るとか、或は氣力も壯んになるとか、さういふやうな次第で種々の變化を生ずる故に、是から先の身體は如何に經營したら宜からうか。養生なり攝生なり種々なる點に一層の注意をせねばならぬ。戦後經營といふのは即ちさういふ時代である。平日は先づ同じ有様に經過して行くものですから、特に其の經營を別段に工夫せねばならぬといふことはなく、唯相當に勉強さへして行けば宜いけれども、前に申すやうな變化の時に際しては、公私の位置共に相違を生じて來る。世の中に對する面目も變つて來る。即ち吾々の氣位も異なつて來るやうになる。是に於て戦後經營が甚だ必要であるといふことが生ずるのである。

殊に吾々商工業者は政治界のことには關係せんで宜しいと、自分は平素主張して居る者であるが、戦後經營に對しては、どうしても財政と經濟を共に考究して、其の宜しきを得るといふやうにならなければ、將來の國家に甚だ恐るべきことがありはせぬかと自分は思ふのであります。平時其の權衡を保つて居る間に於ては、唯その事に勤めて居れば宜しいけれども、變化を來す場合は特に注意を要するの

國家の財  
政に偏重  
する可ら  
ざる事

である。即ち取も直さず二十七年の日清戦役以後は國家の財政はどうなつたか。九千萬の歳出入が俄に二億萬以上に相成つたといふ程の大變革を來した。然らば三十七八年戦役後も矢張これに類する程の歳出入を進める場合になるのであらう。是に於て政府の財政と一般の經濟が能く權衡を得ませぬと、即ち戦後の養生に大層良い食料は得たが、爲に食傷をしたとか、又は攝生を誤つて大に身體に缺點を惹起したといふやうなことが無いとは申されぬと、深く恐れますのでございます。強大なる武力を以て、國家をして斯の如き優勢の位置に進めた海陸軍の威力は誠に喜ばしい次第ではあるが、丁度今森山君の最後に述べられた如くに、畢竟左様に軍人が外へ出て働き得られたのも、軍人ばかりが戦争に勝つたのではないぞよ。内に居つて鋸柄を握つて居つた者も、能く戦争の性質を辨へて後援を與へたから、戦争に勝つたのであるぞよと言はれましたが、誠に至當の御言葉にて、自分等も常に其の事を企望して居ります。吾々縦ひ内に居つて算盤を弾いて居つても、矢張砲彈の中に居つて働く者と考へ、鋸柄を握つても共に戦争をする者と思つて下さるといふやうに、謂ゆる相待つて國が進んで行きたいものと思ふのでござ

います。故に此の平和克復後の經營に對して吾々共の希望する所は、國家の財政に偏重偏輕のないやうに致したいと思ふ。

補助の如  
き體格は  
取らず

即ち此の軍事又は總ての政治に對して力を張ると同様に、國家の血液を増す所の實力の發達に對して、大に闕如して居るものを補ふといふことがございませぬと、或は恐る、此の戦後の經營に就いて車を片廻りさせるやうになつて、表は大層立派になつたが、内の力は大に衰へたといふやうなことが出來はせぬかと、これは尤も懸念するところでございます。自己の力の足らぬ故に、唯商工業へ餘分の力を與へて欲しいといふ嘆聲を發することばかりと御聽なしなされぬやうに望みます。如何にも軍人の働きは顯はれたが、實業家の力は伸びぬ。若し一步進めて言つたならば、政治界と雖も軍人に對しては後へに墮若たらざるを得ぬかも知れませぬ。實に我が國の陸に海に、軍事の發達といふもの、甚だ盛大なるのは、此の上もない喜ばしいことであるが、さて其の喜が唯軍事の發達する爲に、軍事の力を集め、軍人の勢が強い爲に、軍備にのみ全きを見るといふやうになつたならば、これを人體に譬ふれば、益、頭部が強壯になつて手足は愈々衰頹し、甚しきは此の日本をして

福助のやうな體格にせしむるといふ虞がありはせぬかと、私は杞憂に堪へぬのでございませぬ。故に此の戦後の經營に對しては前にも申す通り、人ならば其の身體の變更を來す時即ち日本といふ國體に大に變更を來す時である。其の昔開港の頃には半開國とも言はれたらう。數年前までも未だ決して一等國といふ位置を許されなかつたのが、殆ど其の場合に至るといふ今日でございませぬ、切に、此の將來の財政經濟に就いて十分の注意を以て、國力の配合が彼に厚くして此に薄いと云ふことのないやうに、只管希望して止まぬのでございませぬ。果して其の正鵠を得ましたならば、實に此の軍事の大成功が引續いて吾々實業界にも將來に成功を見るやうに至らしむることであらうと思ふのでございませぬ。

續いて此の成功といふことに就いて一言を試みます。近頃能く新聞雜誌其の他に成功した、成功せぬといふ事が見えますが、此の成功といふ文字は如何なる意味を寓するか。又此の成功といふものは如何なる事柄を指すか。即ち何を成功といひ何を不成功といふか。一の斷察を下して見たいと思ふのでございませぬ。詰り如何なる是これを成功といふべきかと云ふ問題です。成功といふ文字は吾

何をか成功と云ふ

吾が日々に用ふる。解釋に依ると殆ど事が成就して利益が多ければ成功だといふやうに聞える。而して其の文字は色々の事に使用される。例へば今日の龍門社の會でも、天氣が好くて幸に森山君も御出になり風も吹かない。皆さんも大勢來た。あゝ成功だと、斯う言へば成功といふ字が極く易くなる。併し又或る場合には成功に恐しい難儀のことがある。例へば赤穂義士の四十七人が讐を取つて腹を切つてしまつた。あれは決して失敗とは言へぬでせう。成功と言はなければなりません。如何となれば、二百年後まで人口に膾炙して、實に忠臣であつた孝子であつたと言はれるのである。故に大石内藏之助は成功者である。併し其の人は如何であるか、此の位難儀の事はない。誰もちよつと指を傷めてさへ痛苦に思ふのを腹を切るのですから。而も父子兄弟屍を並べて死んでしまつた。けれども是は成功だ。得た事のない成功である。失敗の成功……失敗の成功といふ言葉は可笑しいが……。もう一つ近い例をいふと、楠正成が湊川で討死したのは失敗であるか。足利尊氏が十三代の羈權を握つたのが成功であるか。是も一の問題であらうと思ふ。蓋し成功といふ文字の解釋に依つては、足利尊氏も成功

と言へるだらうが、或る點から言うたら楠正成が寧ろ成功だと言へるだらう。如何となれば、爾來四五百年の間の天下の人心舉つて楠正成に向つて、尊氏に背くといふことから論じたならば、楠は成功して尊氏は失敗したというても宜いやうになる。

成功の眞意義

吾々の此の實業界に於ても、さういふ場合が大にあると考へねばならぬのです。例へば道理に依つて破れることは、破れても失敗ではないのだ。道理に依らずに富んだのは、富んでも成功ではないのだと、私は先づ考へねばなるまいと思ふ。若し之をして、唯成功といふものが富を成したに就いてのみあるものだとなつたならば、遂には盜賊熊坂長範も尙ほ成功と之を強辯せねばならぬ様になる。斯く申すと、或は不幸に終つた人の申譯の言葉に都合がよくなるやうになるが、平常怠つたり又は舉措を誤つて不幸の境遇に陥つて、己は成功したと皆さんに自慢せいと云ふ譯ではないから、其の誤解は皆さんに御注意を願ひたい。故に此の成功といふ文字は甚だ解釋に苦しむ。詰り之を斷案して申すならば、道理に依つて行へば、即ち其の行つたことが假令破れても成功だ。もし戦争ならば敗れても亦成功だ。

眞の成功の實例

楠正成が淡川に於て、今日の場合己が死なねば南朝の天子を保護することは出来ぬ。尊王の氣風を維持することは出来ぬと覺悟して、謂ゆる見切つて其の節に死んだのであらうと思ふのです。若し兵力が強かつたなら必ず勝つたてでありませうけれども、如何せん兵力が少い。併し其の場合に節に死なねば、益、後醍醐帝をして安んじ奉らしむる事が出来ないと思つたから、遂に一身を犠牲にしたのである。其の事の成る成らぬをば第二に置いて、臣たるの職を盡したのである。其の至誠を盡して、謂ゆる仁を求めて仁を得たのである。恰も孔子が伯夷叔齊の間に對して曰く「古之賢人也、曰怨乎、孔子曰、求仁得仁、又何怨」といふやうな境遇に終つたてであらうと思ふ。果して然らば、其も成功というて宜しいと思ひます。故に此の成功といふ文字に對しては、餘程解釋を詳しく致さぬといふと大なる誤解を生ずる様になる。甚しきは唯一時の利益を得たばかりを成功とするのは、即ち成功を解釋することの不成功になりはせぬかと私は恐るゝのでございます。而して此の成功に於て、何處から見ても議論のない、誰が論じても非難のなかつた成功といふ者が今日一つある。それは何かといふと、今般の海軍の戦争の結果



です。實に戦へば必ず勝ち、攻むれば必ず取り、而して其の精神が如何にも誠實で、其の注意が如何にも周到で、其の行爲が如何にも巧妙で、楠正成の成功は不幸なる成功であるが、大幸福なる成功は今度の海軍海戦と申して宜からうと私は思ふのでございます。成功の字義の考究は、向後尙ほ諸君と共に致して置きたいと思ひますから、諸君も此の字義に就いての考究をなすつて、私の此の企望を成功せしむるやうにありたいと思ふのでございます。(明治三十八年十一月五日、龍門社秋季總會に於て)

## 五八 帝國聯合艦隊の凱旋を歓迎す

聯合艦隊司令長官及び各將校閣下諸君。今夕は當銀行集會所、手形交換所及び銀行俱樂部の三團體が申合せまして、今般無上の大成功大名譽を荷はれて凱旋せられたる東郷長官閣下及び諸將校閣下を歓迎致しますため御尊臨を請ひました所が、幸にも御來臨を得ましたのは私共の光榮此の上もございませぬ。先づ第一に此の尊臨を辱うしました感謝の意を此に申述べます。

如何なる  
歡喜の情

次で私は此の會員を代表致し聊か歡迎の辭を述べようと存じます。凡そ世の

を以て迎  
ふべきか

中に最も愉快に感ぜられますことは、人の大任を負はれて遠方に赴かれ其の任務を果されて茲に首尾能く歸られた時に、之を迎へる程喜ばしい事はございませぬ。假に之が比喩を小さく致しまして、一身一家のことに例へて申しませうならば、一家庭で家に係はる或る重要事件で、其の戸主若くは家人が遠方に赴いたと致しませう。其の時に残つて居る家人が如何なる感情を以て此の赴いた人の前途を想像して居りませうか。或は其の旅行に何ぞ障害がありはせぬか。其の負ふ所の任務を完全に果されたであらうかと、日夜心配致すは家人たるもの、情免れぬことであらうと思ひます。而して此の任務が實に望外の結果を得て、其の人が歸られたと云ふ場合に、其の家人の喜び迎へる感情と云ふものは如何ばかりでありませう。一身一家の事にして尙ほ然り。然るに之は如何であります。我が帝國の大國難に當つて、國家の安危存亡を荷はれて、しかも其の歲月殆ど二年に近うして、其の間幾多の困苦艱難を嘗められ、著々成功をせられ、特に其の最終に於て日本海の大勝利大成功杯と申すものは、殆ど有史以來未だ曾て見ざる大名譽をせられ、御歸りになつたる此の事柄に對しては、凡そ生ある者は衷心より之を歓迎せざるも

のではないと申して宜からうと思ひます。宜なり、全國の人が殆ど狂する如く東郷大將其の他諸將校閣下を歓迎するに日も亦足らざるは、さもあるべきこと、吾々實に喜ばしきに堪へませぬのでございます。是に於て平素冷靜を旨とし沈著を尊ぶ銀行業者ではございますけれども、何分にも歡喜雀躍の情之を禁ずるに堪へませんで、茲に小宴を設けて尊臨を請ひ上げた次第であります。

歡迎の辭  
として愚  
見を陳じ  
たい

閣下諸君、私は更に一步を進めて此の歡迎に對する愚見を陳じたいと思ひますが、斯の如き赫々たる大成功を齎して御歸りになつたのは、これは即ち今咲く花であります。之に付いては此の花を前に培養する所のものがあつたであらう。即ち此の結果に對する原因があつたであらうと存じます。吾々門外漢が差出て申すは如何か存じませぬが、大將其の他諸將校閣下が是迄の御注意御苦心と云ふものは蓋し尋常一様のことではなく、實に容易ならぬことであつたと推測致すのであります。二年に近い長き歳月を海の上に經過されたと云ふことすら容易ならぬと思ひますに、更に一步進んで考へますと、平素の訓練指揮其の宜しきを得て、而して事に臨んでは畫策其の機に當つて、稀寒極熱總てのものに打勝ち、而して後此

の大成功を遂げられたのであらうと考へますと、吾々は今茲に光彩燦然たる現在の東郷大將閣下及び諸將校閣下を獨り歓迎するのみならず、更に一步進んで、現に困苦の間にある所の東郷大將閣下及び諸將校閣下を歓迎致さなければならぬと存じます。勿論此の戰機戰術に付いて吾々が一言たりとも、ものを申入れる譯ではございませぬが、此の原因があればこそ斯かる結果を爲したものであると思ひますと、實に吾々如何に感謝致して宜いか、殆ど言語に盡せないのでございませぬ。思つて茲に至りますと、今將に欣喜雀躍歡呼萬歳湧くが如き其の間に、亦自ら悲愴悽然たるの感情も起らざるを得ぬと存じますのであります。

今夕は折角尊臨を辱うしましたに拘らず、設備の不充分、食膳の不行届多く此の大名譽ある東郷大將閣下及び諸將校を迎ふるの禮を失して居るかは存じませぬが、蓋し大將閣下其の他の諸君にも、百珍を列ね華美を飾りて御迎へすることを喜ばるゝ方々ではなからう。必ずや吾々の溢るゝばかりの熱誠其の者を御受け下さることであらうと存じて、茲に最も清淨純白なる設を以て諸將校閣下を迎へた次第であります。又此の宴を設くるに大に遅々致したことも、前申す如く沈著を

旨とし冷静を尊ぶ銀行業者としては、成る可く天下の樂みには後れかし、天下の憂には先だてかきと考へまするに出でたこととでございます。臨場の諸閣下も蓋し此の意を御諒承下さるゝてあらうと考へます。茲に會員一同を代表し、東郷大將閣下の萬歳を祝したいと存じます。(明治三十八年十一月十七日、東郷大將以下諸將校凱旋歡迎會の席上に於て)

### 五九 我が國に於ける瓦斯事業の發達

臨場を辱う致しましたる閣下諸君に對して一言の謝辭を申上げたくござい

東京瓦斯  
會社の三  
十五年間

す。今夕は東京瓦斯會社が丁度創立後本年で二十年に相成りまするので、紀念の爲め心祝の小宴を設けましたる所、御多忙の所、斯く御尊來を辱うしましたるは、會社の光榮此の上もございませぬ。役員一同を代表致しまして謝辭を申上げます。瓦斯會社創立後今日までに二十年を經過致しましたが、東京に瓦斯の起りました時日から勘定致しますると殆ど三十五年目に相成ります。明治四年に由利公正君が試験的に器械を買入れられたのが、抑此の瓦斯事業の起る濫觴を成して居り

まする。併し初めの十四五年は東京府の管轄でありまして、即ち地方政府に依つて經營されて居りました。然るに十八年に至つて東京府下の商工業家が數十人相集りまして其の拂下を受け、茲に始めて民業に移りました次第でございます。此の二十年の歲月は、日本の諸事物の非常に進歩しました時期でございます。此の二十年の歲月は、日本が斯く生長致したと自ら誇る譯には参りませぬが、併し瓦斯の事業も亦世の進運と共に二十年の歲月を経て、稍人間で申しますならば、壯年時代と相成つたと言ひ得るであらうと思ひます。假に一二の數字比例を擧げて申上げ試みたいと存じます。最初十八年に會社を組織致しました當時の瓦斯の引用家は何戸あつたかと申しますと、三百四十戸ございまして、今日明治三十八年十一月は幾らあるかと申すと二萬八千戸であります。故に之を比例致しますると殆ど八十三倍に當ります。又瓦斯管の延長が其の初めは約十二哩であつたのが今日では三百六十五哩でございます。是も三十倍許りの増加を致して居ります。又一日平均の供給高が七萬千立方尺であつたのが、百六十七萬立方尺に進んで参りました。故に半期間の産出高も千二百三十萬立方尺であつたのが、三

億五百萬立方尺と相成りましてございます。又資本金も會社創立の時には貳拾七萬圓でありましたが、現在では八百四十萬圓になりました。是も三十一倍に相成つて居ります。

瓦斯會社は此の如き進歩を致して參りましたが、他の物は如何であるか。假に二三の物質的進歩を調べて見ますと、銀行會社の資本なども、明治十八年と今日とを比較致して見ますと、殆ど十倍近くにも相成つて居ります。又鐵道なども十七倍に進んで居る。或は汽船も十一倍、貿易の輸出入總計も十一倍と云ふやうに相成つて居ります。此の如く世の進運に伴つて、二十年の星霜に瓦斯會社が生長致したと云ふものは、偏に此の世の中が助けて呉れました事で、此の事業の進歩に付きましては、中央政府、地方政府、又社會が此の事業に同情を寄せられました。種なる點から御補助御誘導下すつて、此の如く進歩致したものと、我々共は實に感謝して居ります。が斯かる紀念に際しますと、別して其の感謝の意を強う致します。故に茲に甚だ粗末なる小宴を開いて謝意を表明致す譯てございます。さて左様に世の進運は盛んである。また瓦斯事業も、既に資本に致しても三十

倫敦の瓦斯事業との比較

倍にも進歩したから、最うこれて事業の進歩は満足であらうかと申しますと、甚だ我々は不満足千萬と云はなければならぬのであります。御祝の席に於て歎聲を發するは、又例の繰言泣言と或は御譏りもありませうが、翻つて他の國々の有様を見ますと、實にまだ瓦斯の事業が甚だ情ないと思ひます。細かに各國の例は調べませぬが、茲に唯倫敦と比較して見ますと、東京の製造高が一箇年に四億六千萬立方尺であつて、倫敦は四百二十億立方尺でありますから、殆ど九十一倍に當ります。また引用家は東京は二萬八千戸を以て前には大に誇つて申上げましたが、倫敦の引用家は幾らかと申すと七十五萬戸ございます。東京に比較すると二十六倍であります。引用戸數二十六倍にして九十一倍の瓦斯を供給して居ると云ふことは、如何に瓦斯事業が倫敦に於ては、一戸當りが多き割合になると云ふことが御想像になられるであらうと思ふ。即ち一方の需要家が殆ど四倍程多いからして、斯様に戸數の割合に供給高が餘計になる有様であります。又瓦斯管の延長を調べて見ますと、東京は三百六十五哩にございますが、倫敦は四千八百哩、是も十三倍に當ります。十三倍の瓦斯管で九十一倍の瓦斯を供給すると云ふの

も、瓦斯管に通ずる瓦斯の量が大變餘計であります。是は鐵道なれば行走哩が多いと云ふのと同じ道理になります。熱用の口數も東京は一萬四千口であります。倫敦は四十萬口で、是も二十八倍に相成つて居ります。各國の有様を充分調査する邊はございませんで、僅かに英國と日本とを比較して見ましても、前申す如く二十年の星霜を経て二十歳になつたから大變大きくなつた力も強く智恵も進んだと多少自惚れて見ましたが、英國の有様と比較して見ますると、實に慨歎の聲を發せざるを得ぬ次第でございます。

併しながら、此の東京の瓦斯の需要は是に止るか。二十年以前と比較しまして此の如く進みたるを以て未來を考へますと、此の東京市街に瓦斯を引用する家がどれ位になるであらうかと申したならば、今日の十數倍になり得らるゝと云ふことは申上ぐるに憚りませぬ。果して然らば、進むだけの力は充分持つて居るが、まだ瓦斯の供給が行渡らぬ。蓋し其の行渡らぬのは局に當る我々共の勉強の足らぬと、智識の及ばぬと云ふこともございませうが、既に中央政府、地方政府、若くは社會の誘導に依りて今日までに進歩したと云ふことならば、これを倫敦に比べて

自他共に  
一層努力  
せざる可  
らず

左様に懸隔して居るのは、局に當らぬ諸君も多少責任を負うて下すつてもよからうと思ひます。斯く申上げると喜の中に苦情、御禮の中に御怨を申すやうであります。蓋し不足と云ふ考は何時もあるのが人間の常で、却てそれが國の進歩にならうと考へます以上は、私が茲に此の紀念の席に於ける不足の意味を持ちたる一場の謝辭は、或は大に將來の進歩に助を與へまいものでもなからうと考へます。茲に閣下諸君の尊臨を辱う致しました感謝の意を表すると共に、小宴を開きまして開會の言葉を述べます。(明治三十八年十一月十一日、芝紅葉館に於て)

## 六〇 使命を全うして歸朝せる伊藤侯爵を 迎ふ

伊藤侯爵閣下及び隨行の各位、其の他來賓諸君。今日は侯爵が韓國大使の大任を御遂げになりました。滞無く御歸朝なされましたに就いて、侯爵及び御隨行の各位を吾々銀行諸會社の同人等が相計りまして御招待を致し、茲に宴を開きし次第

でございます。幸に侯爵は勿論、内閣諸公其の他の諸君の尊臨を辱うしましたのは、吾々主人に立ちました一同が此の上もない光榮とする所有難く感謝の意を表します。茲に私は一同を代表致しまして、侯爵閣下に對し一言歡迎の辭を申し上げます。

千年の問  
題解決す

韓國の我が帝國に於ける關係は、殆ど歴史開けて以來長き歲月を経て居ります。最早私風情が絮説するの要はございませぬ。併し此の明治の聖代になりまして、今日から殆ど三十年以前、即ち明治八年頃に征韓といふ議論の發しまして以來、韓國に對する問題は頗る世間に喧傳致したのでございます。既に此の席に御列坐の方々の中にも、其の頃の韓國問題に對して主唱の位地に立たれた御方もある様に存じます。左様に緊切なる問題が段々に纏れ、來つて遂に二十七年の日清戦役となり、又三十七年の日露の大戦争と相成つて、茲に漸く平和克復と共に、彼の國に對する將來の企畫は一日の猶豫を許しませぬ所から、遂に畏れ多くも聖明なる皇諫を運らされ伊藤大使を派遣されることに相成つたと存じます。其の任や甚だ大其の事や甚だ重しと申して宜からうと考へます。然るに其の重且つ

大なる任務を、僅々一箇月の間に滞りなく、而も從容事に處せられて、誠に吾々の聽くも喜ばしき満足なる結果を收められて御歸りになつた侯爵である。吾々國民として又一方には東洋の經濟の發達を希望する實業家として、實に歡喜雀躍せず居られませぬ譯でございます。是吾々相謀りて此の小宴を開て歡迎の意を表する所以でございます。

誠と徳と  
を以て事  
を處せり

世間或は今度の侯爵の御大任に對して、餘り品物が過ぎた。雞を割くに牛刀である。大局は既に定まつて居るといふやうな批評を下す人が、或はあつたかも知れませぬ。又左様な意味を新聞紙上で散見したこともございますが、吾々の考へる所は大に之に異なるのであります。今般の韓國に對する協約の決定といふものは、實に千年以來の問題が始めて解決致したと云うて宜しいのである。此の時に際して、若し我が國が力を以て之を壓するといふやうな事ならば、決して左様な大事でないかも知れぬ。露國の大と雖も打破つた日本である。併し今日の場合には左様な比較を以て論ずべきものではない。勿論、聖上の思召は他國へ對しては何處までも博愛を以て主とせられ決して威迫を以て斯かる事柄を處斷さる

るものでない。又廟議も左様であらう。而して又侯爵の御取りなされた所の主義が、其の豫約の通りに届いたと申して宜からうと思ふ。事の易く済んだのを見て、難を割くに牛刀を用ふると評するのは、寧ろ侯爵の力の大きなことに氣付かぬのである。其の事柄が甚だ重大であつたといふことを忘れざる人が、即ち侯爵の功勞を知悉する人と言はなければなりません。侯爵の今度の御旅行は僅かに三十日、殊に其の樽俎間の折衝は數日の間といふ。想ひ起せば先月の十七日の夜、侯爵が韓廷に於て諄々と其の閣臣を説諭されて、徳を以て人を懐け、誠を以て事を處し、遂に此の曠古未曾有の大事業を遂げられたといふことは、實に吾々感謝する辭がないと申して宜しい。蓋し侯爵の今度の處置は決して術でもなく、手段でもなく、唯誠と徳とを以て事を處されたのである。宜なり、人が其の事柄を以て甚だ容易と認められたのは、蓋し侯爵の侯爵たる所以、茲に存すると私は確信するのであります。

希くは將來の指導を得ん

更に一言此の際に侯爵に申上げて置きたいのは、今日まで韓國に對する吾々工業者の經營は決して怠つて居る所存ではございませぬが、併し未來に於ては今

日よりも大なるものがあると吾々は考へるのでございます。侯爵は政治上に於て大なる御意見を蓄へてござるのみならず、財政經濟共に備つた御方と、吾々は始終欽慕致し居るのでございますれば、此の韓國に對する吾々實業上に於ける御指導も、斯かる場合に充分なる御訓誨を得たいと考へます。茲に尊臨を辱う致しましたる陳謝の意を表すると共に、侯爵及び御隨行諸君の健康を祝します。

(明治三十八年十二月十八日、帝國ホテルに開かれたる遺韓大使伊藤侯爵歡迎會の席上に於て)

## 六一 本邦工業界の前途

私は工業には甚だ不熟練、寧ろ頗る關係の遠いと申す身分でございます。學問と申し決して好知識を蓄へて居りませぬ。故に斯かる御席へ出て、工業に關する意見を申上げると云ふことは、餘程困難でございます。さりながら、縦令私が學者でなし、技術者でなし、且つ其の事業に直接なる經驗がないにも致せ、日本工業は大に擴張せねばならぬ。瑞穂國と云うて、只米さへ作れば満足と安んじて居ることは出来ぬと云ふ主義は、三十年以前から頻りに唱へ來つたのでございますから、本

會の御要求に對して、説がございませぬと云うて黙止するは如何にも残念と考へまして厚顔にて此處に參上致して、最も御經驗の多い諸君の御面前で工業談を申上げる次第でございます。蓋し他山の石が、諸君の如き充分磨き上げたる球に尙ほ光を加ふるやら、或は又曇りを與へるやら分りませんですから、其の邊はどうぞ宜しく御諒恕の程を御願ひします。

工業の意  
義及び推  
移

實業と一口に申しましても、種々なるものを網羅して通稱されて居る様に考へます。私共の營んで居る銀行業者も決して虚業ではない。矢張實業家の一人と申し得らるゝかと思ひます。さりながら、私の思ふには、實業と云ふ言葉を狹義に解釋して往つたならば、即ち此の工業などこそ最も適した名であらうかと思ふのでございます。農業も實業でないとはいはぬ。商賣も實業でないとは言はぬが、寧ろ此の工業と云ふものが第一に國の富との關係が強いと申上げねばならぬ。如何となれば、他の國々の適切なる例を以て考へて見ても、矢張産物を賣つて工藝品を買ふ國が、富み且つ強いと云ふことは殆どないと申して宜しい。之に反して、天産物を大に輸入して、是が工藝品になりて出る國が最も富み且つ強いと云ふこ

とが事實に現はれて居りますれば、即ち是等を以て實業と云ふことは證據立て得らるゝかと私は思ふのであります。我が國の舊時の有様を見渡しますと、決して工業無しとは申さぬけれども、總ての仕事が一口に悪い言葉で申すと云ふと手職業殆ど自活的の經營のみで、營業的の器械に依り學理を以て従事して往くと云ふ有様は殆ど無かつた。故に海外との貿易に於ても、總て天産物を賣つて工藝品を買ふと云ふ事は、今日も其の位置を脱したとは申されぬが、三十年の昔即ち維新勿の頃は、其の有様は更に甚しいものであつた。故に私杯銀行者として考へて見ても、是では甚だ此の金融の範圍も狭し、又國家の利益の原因は殆ど皆無であると言はねばならぬから、決して之を以て安心し得らるゝものでなからう。是非此の工業が大に發達すると云ふ國柄に進め得たいものだと思ふことは、前に申す通り學問の無いにも實驗の無いにも拘らず、熱心に希望を持ちましたために、己自身に於ては其の局に當りはしませなんだが、種々なる工業會社の設立に付いては、或は其の間に參與し、又は自ら發起して成立を謀りましたことは、指を屈するに暇ないと申上げて宜しい位でございます。但し其の事業中には、失敗して人の嗤を買



ひ、自身の資産を損じたこともございました。また之に反して、一時は困難であつたが大に回復して、今日は相當なる成績を見、利益を得ると云ふ事柄も無きにしてもあらず。否、大にさういふことがあつて、私の關係の事業にしても、三十年の間に相應に發達したと申し得らるゝやうになりましたのは、當初自分の希望が決して空しくなかつたと云ふことを喜ぶと同時に、世間の注目することも廣くなり、學理も次第に進んで來る。實際家も大に輩出して、今日の場合に立至つたと思ひます。是程喜ばしいことはございませぬ。此等のことは、縱令己に良い智恵が無くても、諸君を益する名案が生ぜんでも、既往の経過なりとも一言申上げるのが、私の喜と同時に義務であらうと思つて、此處に參席した次第でございます。

工業界も諸君の御力で大に進んでは參りましたが、さらば今日は満足な場合であるか。最上點に迄達したかと云ふことを論究して見ましたならば、大に不足と申上げざるを得んであらうと思ひます。私が門外漢で申すばかりではございませぬ。御列席の諸君は學理若くは事業に付いて、殆ど皆局に當つて居る人々であるが、此の諸君自身の御心中に伺ひましても、決して満足と思召さぬであらうと、私は

工業分立の弊

推察致すのでございます。而して未來に於ける希望は何等であるかと云ふこと、其の不足は如何なる點に原因するかと云ふことも、其の人々によりて多少の差はございませうが、私の斯う思うて居ると云ふ事柄の二三を此處に申述べまして諸君の御參考に供し、併せて御批評御叱正を乞ひたいと思ふのでございます。

一口に工業と申しますが、前に申述べました通り、從來の手職業に追々工業學理の意味を加へて往くと云ふ姿があり、又大に多數の職工を使用して、所謂營業的の大工業として經營すべき工業もあり、是等に付いて現在の有様及び未來の進歩を考へて見ますと、どうしても日本の工業の今日迄の行掛りは彼處でも氣付き、此處でも考へ付いて成立つたと云ふ姿でございすから、所謂分立區々の弊は免れぬ様に考へます。此の分立區々の弊と云ふものは、事業に於て經濟的に出來ない。又品物が揃はぬ。甚しきは販路の競争をする。種々なる弊害よりして工業の全體に妨害を與へると云ふことは、喋々するまでもなく諸君の御熟知の事である。併し各其の成立の歴史があるものでありますから、成るべく合同して力を一にして往くと云ふ趣向が、随分むづかしいでございます。むづかしいことであるが向後

精々心掛けて往つたならば、私は出来ることであらうと思ふ。各工場の成立つた歴史に付いても、各、我が佛のみ尊いと云ふ議論をして居れば、到底譲ると云ふことは出来ぬ。譲ると云ふことが出来ねば、何時迄も纏めると云ふことは出来ぬ。若しこれを自ら公平な考を以て、我と彼との間の長所を成るべく先へ見ると云ふ風に考へて往きましたならば、終に合併とか共同とか云ふことが事實に於て行はれぬことは無からうと思ひます。現在の日本の營業的工場の有様を見ますと、まだ分立の弊が最も強いと申さねばならぬから、是は工業界に居る諸君に於て、今申す通り我が佛尊しの觀念ばかりを主張せずに、成るべくだけ大體から國を富ますと云ふ方を主義として、共同合併を圖つて往くと云ふことは頗る望ましいやうに考へます。幸に私が關係して居る一二の會社に於ても、あれこれとさう云ふ事實が行はれ掛つて居りますことは、御列席の諸君にも或は新聞に若くは事實に御聞及びにもございます。私はどうしても將來に必要と思つて、多少其の間に力を注ぎましたこととでございます。決して斯く申すは論理ばかりではない。事實に行ひ得たいと斯う考へて、希望を述べます次第でございます。蓋し是等の事

は申上げるまでもなく分り切つたことであるが、皆がさうであると言へば一言で済む。併し前に申述べた一二の會社の合併共同も、餘程其の間に或は譲り或は耐忍してこれを纏むると云ふことを努めぬと、些細なことから妨害されて、其の場合に達することが出来ぬものでございますから、縦令分り切つた道理でも此處に申上げれば、成る程彼もさう言うたが、此の事は斯う纏めたい。此處は譲るが宜からうと、諸君が他日思ひ當ることがあつたならば、此の希望が追々と普く行はれるであらうと考へて、第一に其の事を申上げました。要するに是から先の營業的工場は、もう少し規模を大きくして内を完くせしむるのみならず、外へ發展をすることが、今日工業家を大急務ではないかと云ふことに歸着しますのでございます。

第二申上げて見たいと思ふのは、此の工業が如何なる方面に發展することを努めねばならぬか。斯く申上げると、何だか政治家的の申分になつて、大言壯語らしい聞える嫌ひがございますけれども、私の信ずることを申上げると、此の工業は日本に於て満足である。最早伸びる餘地がないとは申しませぬ。否甚だ不満足と

言はねばならぬが、併し今日の吾々は、日本だけに満足すれば宜しいと云ふ位置でない。と云ふことは、諸君も始終御胸に存して居るに相違ない。獨り滿堂の諸君がさう云ふことを胸に蓄へて居るのみではなうて、所謂大和民族は皆左様な考を持つて居ると云うても決して過言ではなからうと思ひます。それはどう云ふことに意味されるかと云ふと、即ち吾々の企望は、日本の商賣や工場は、成るべくたけ東洋の中心位置に達したいと致して居ると申す譯になる。而して其の方面は何處であるか。即ち支那である。朝鮮である。其の外にもございませうが、之を概括してさうである。而して此の二つの國柄は將來如何なるかと云ふことは、私には豫期出来ませぬけれども、現在のあの人種は此の營業的工場を支配し、器械を取扱ひ、工業の事務に當ると云ふことは、少し不適任な人種であると云ふことを、私は言ひ得るだらうと思ひます。朝鮮は論外として、支那の國民は決して智能が少いとは言はぬ。また聯合の性質がないとも言はぬ。利に鋭いことは吾々に優つて居ると云ふことも言ひ得る。併しどうも個人の利益を専ら主張する人民で、共同の仕事に適應せぬと云ふことは、蓋し誤つた考でなからうと思ひます。果して然ら

ば營業的殊に會社組織の工業などに於ては、吾々が充分適し得らるゝ否與し易い人民であると云ふことを明言し得らるゝであらうと思ふ。依つて吾々は自國のみの擴張に満足せず、是非共に支那朝鮮に向つて我が工業が進んで行き、或は彼地にまでも工業を興さねばならぬ。假に吾々内地に於て製した紡績絲若くは織布に付いて論ずるならば、印度にも亞米利加にも負けぬやうに支那朝鮮を得意とする。と云ふことは、吾々の最も深く注意し最も深く勉勵せねばならぬことであらうと考へるのでございます。吾々の面前にある隣邦の人民は、幸に吾々とは決して競争し得られぬと云ふ私の鑑定が若し誤りでないなれば、吾々は大に意を強うして、我が工業の領分は廣いと云ふことを申し上げ得るではなからうかと考へるのであります。

内地工業の改善

第三に申上げて見たいのは、左様に此の器械的工業のみが進むだけで足りるか。器械と云ふことは勿論申す迄もない事でございますけれども、前にも述べたる如く、例へば紡績工場であるとか若くは製麻工場であるとか云ふが如き大工場と云ふものゝみに限るか、斯う考へて見ますと、私はさうではなからうと思ふ。是は

海外に向つて發展する考ではない。内地に關する意味になりませうが、我が國古來仕來りの小事業に付いて、これに工業の智恵を加へぬと云ふことにまで、現在大變缺點がありはしないかと思ひます。一二の例を申して見ると、曾て野田へ往つて醬油醸造家の倉庫を見たことがあります。其の倉庫の組立もしくは其の醸造の方法は總て古風な有様で、例へば、醪を搔廻すのでも、人手を以て妙な杓子見たやうなもの搔廻して居る。またそれを締めると云ふにも、締木は丁度昔の油の締木見たやうな鹽梅で、井戸釣瓶のやうなものを掛けて其處へ石を釣り下げ、輕いと段々に石を數多く結付けて、其の石の數の多い程締木の力が強くなると云ふ殆ど野蠻なる器械を持つてやつて居る。而して此の野田の醬油屋の有様を見ると、一人て數萬圓の醸造税を納めると云ふやうな宏大なる仕事を致して居る。中々體裁と云ひ、其の事業の性質と云ひ、其の醸造家の人物と云ひ相當に見るべきものもありながら、其の經營する所は頗る古風である。私は技術の事は知らぬから、唯怪訝な感じを爲して、これぢやいかぬではないか。もう少し工業の學理を加味して此の醸造をやる工風は無いかと、其の地の或る醸造家に言ひましたが、有るかも知

らぬが、どうも此の邊の人はさう云ふ考を出しませぬと答へて居りました。それは十數年以前のことであるが、近頃野田の茂木啓三郎と云ふ人が時々私の家へ参りまして段々話すには、幸に器械を應用することにして、其の人の醸造は總て醪を搔き廻すも器械で廻轉をする。また締木も蒸氣器械でやるやうに致して、大いに工手間を省いて醸造し得らるゝと云ふことを、頻りに談じて居りました。それならば野田は大抵それに改良したかと問ふと、いや、さうはいかない。さうするといふ醬油が出来ないと云うて、古風に考へて石を提げて居るものも決して少くないと、斯う申して居りましたが、兎に角一步進んで來たに相違ないと見るのです。さう云ふやうな改良方法が、私はまだ澤山あらうと思ふ。また此の間越前の人、羽二重の織方に付いて、どうしても品質を同一ならしむるために機械器に改良するが宜いと思ひ、それで熱心に苦しんで居ると申されました。果して越前若くは金澤邊の羽二重産出地の事業をして、皆機械器に改良し得るや否やは、一の問題として考究せねばなりませぬが、若し爲し得るならば、今迄の手織組織よりは此の器械應用のために、其の品質を良くし其の製造を速かにする。獨り其の品物の製作上

の手間を省く利益のみならず、其の品物の出来榮えを良くすると云ふ利益は少からぬものではなからうか。此等の一二の例に依つて考へて見ますと、従来手職業的小工業に相當なる學理を應用して、これに進歩を與へるも云ふことは、ちよつと見たところでは、何やら古風な改良で目に立ちませぬが、利益は其の方に或は多いと云ふことはありませぬかと考へます。故に工業と云ふものを、唯單に立派な煉瓦の工場大きな煙突を以てのみ事業の改良が出来ると考へずに、従來の手職業に學理を加味して、之を經濟的に進めると云ふことは、工業家の最も注目し且つ勉強せねばならぬことではあるまいかと思ふのでございます。

第四に申上げて見たいことは動力でございます。力と云ふものが工業の原素であること云ふことは、私が工業に對して無學でさへも申上げ得らるゝことで、論ずるを俟たぬのであります。此の力が例へば石炭に依つても出せませう。又空氣に依つても出せませう。水も電氣も種々なる力の取り方があるが、然らば如何なる力の出し方が一番都合が宜しいかと云ふことは、此の工業の發達を求めると同時に大に考究して、其の方に力を盡さねばならぬことではなからうかと考へるの

動力の將來

でございます。殊に一昨年頃からして其の根本たる動力の主要の供給者たる石炭が甚だ産出を減じたのか、若くは産出の工手間が餘計掛るやうになつたのか、或は需用者が餘計あるためか、何れにせよ價が途方もなく騰貴したと云ふことは、此の工業界には或る一方から考へれば仕合とも申しませうが、或る一方から申せば大打撃と云はねばならぬのみならず、我が國の石炭は随分豊富であると云ふことも申しますけれども、石炭に熟練な人から論ずると、將來石炭の需用が斯の如く多くなつて往くと、終には或る年度に石炭が絶えるに至りはせぬかと云ふ統計などを以て、大に杞憂して居る向もあるやうに承つて居ります。併し是は、まださう目前に石炭が無くなるだらうと云ふのは、蓋し杞人の憂に相違ないが、追々に減ずると云ふことは免れぬ。所謂數の免れざるものであります。故に此の石炭の價を以て成るべく廉ならしむると云ふ經營と、同時に將來の動力は如何なるものが一番利益であるかと云ふことは、工業家として大に注意し大に考究せねばならぬことではございませぬか。申す迄もなく、石炭に續いては水力と云ふものであるだらうと、如何に私が素人でも考が附きますが、此の水力に付いては日本はどう云ふ

地勢であるか。どう云ふ有様であるか。此の事に就いても私は一二の實驗を致して見たがなか／＼まだ斯う云ふものである。斯様な計算が生ずると云ふことは、獨り自ら安んぜぬのみならず、他人に對して明言する程には智慧も無し經驗もございませぬ。さりながら是非此の事は充分なる考究を要し、充分なる力を入れねばならぬこと、深く考へます。既に御列席の諸君中にも、此の水力の經營に付いて種々なる御力入はあること、信じて居りますけれども、尙ほ此の上に此の工業の未來に考を及ぼして見ますと、其の方法を如何にしたら宜からうかと云ふ事に付いて、飽くまで研究して見たいと云ふことを希望して止まぬのでございませぬ。それと同時に、現在の石炭の價格では、實に工業界をして殆ど總てのものを犠牲にせしむると云ふ位に私共は恐れます。故に水力の考究は第二にして、目前石炭の供給をもう少し廉くもう少し多くして、工業界に満足をしむると云ふことも、務めねばならぬ事柄ではないかと思ふのであります。

工業家と  
下級技術  
者

最後に今一つ申上げて見たいと思ふのは、此の工業に従事する人でございませぬ。人と云ふ總稱は甚だ漠然と致して居りますが、私が茲に申上げる人は即ち工業界

を主宰する人、又は使はれる人、これをおしなべて茲に一つの見込を申上げて見たいと思ふのでございませぬ。總ての事業が人に因つて成立し人に因つて失敗すると云ふ事は、獨り工業ばかりではございませぬ。凡そ世の事物の興亡成敗は、總て人に因ると申して宜からうと思ふのでございませぬ。故に、何ぞ工業ばかりを論ずるには及ばぬと、或は論斷されるかも知れませぬけれども、殊に工業に付いては先づ主宰と云ふ側を第二にして、其の使用する人に付いて餘程注意が必要であると思ひます。蓋し斯様な理想は、私が今此の席で申上げて、それならば縱令貴所が直接従事せんども、或は相談相手になるか、又は重なる株主であると云ふが如き工業會社の人の扱ひ振りは如何であるか。多くは其の理想以外の姑息な手段でやつて居るのではないかと云ふ反對の御攻撃を受けると甚だ赤面せざるを得ませぬが、併しどうしても將來を考へて見ましたならば、斯様な姿で工業界が満足であるとは言へぬと斷言せざるを得ぬと思ふ。それは即ち此の職工若くは職工以上の従事する人の養生、及び之に對する情愛が、彼等をして其の場所を以て、真に我が工場だと思はしむると云ふ組織には至らぬと云はねばならぬではありませぬまいか。

偶、或る紡績工場杯で、私も關係し居る場所の一二は、職工寄宿舍制度なども稍整うて、其の寄宿なるものに付いては随分種々なる設備を設け置きまして、殆ど其處へ來て居ると、其の職工の子供が追々に學校の教育までも受け得らるゝ、また病めば必ず相當なる治療も出来る。各自安心しつゝ、其の事業に従事すると云ふ設を爲して居る向もないではないが、おしなべて東京近傍の工場を見ると、殆ど今日あつて明日ないと云ふ渡り職工が重に使用されて居る。是は決して工業をして完全なる發達をせしむる組織ではないと言はねばならぬ。故に將來に工業をして大に進歩せしめようと考へれば費用も掛りませう。世話も要りませうけれども、それに従事する職工等が例へば善良なる農家の小作人は地主と離るべからざるもの、地主も亦小作人と決して疎遠にせられぬと云ふが如く、親子兄弟のやうなる關係を有せしむると云ふ仕組を以て、工場を維持して往くのが將來永續せしむる最も重要な務ではないか。又それと同時に、此の職工を使用すべき側の下級技術に従事する人も、矢張今申す様な考を以て、相當なる素養のある者を追々に實務に訓練せしめてやると云ふやうな仕組が、是非無ければいけないと考へまするので

す。既に總體の事務に従事する人が左様であるとすれば、之を統御する人はまた申す迄もないことであらうと考へるのでございます。斯様に追々に學理も進んで技術も巧になれば、強く言ふならば學術が器械を産出して器械が仕事を仕出すから、人力は殆ど加ふるに及ばぬと云ふが如き議論をする者もありませう。先年私が亞米利加へ參つた時に、紐育市の大銀行でシチー、ナシ、ナル、バンクの副總裁をして居りましたワンデリップと云ふ人が、亞米利加の商業が歐羅巴を侵害すると云ふ表題で文章を書いた。其の書中に亞米利加の器械を主張する趣意を詳かに調査して、追々に器械の進歩に依つて職工は段々使はずと濟むと結論してあつた。是は蓋し亞米利加の職工賃銀の大に高いと云ふことを深く意味して、是に打勝つ手段として頻に器械應用の事を説いた意見書の様に見えました。極く議論の極論を云ふと、前に申す通り、學理が充分に適當して、其の學理に従うてやつて往けば、僅の人で仕事が出来ると云ふ、殆ど器械が人を制する如き議論も實に勇氣ある見識であつて、亞米利加あたりで論ずる時は、即ち亞米利加人の規模の大い所を見るに足りませんけれども、併し私の茲に申上げる反對の意味は、如何に左様に學理

が進み器械が精密になつたからと云うて、之を使用する人の智慧は尙ほ學理の進み、器械の進む程それ程巧妙な人でなければ之を支配することは出来ませぬ。故に如何に國が黄金世界になつても、其の國人の智慧がそれと共に進まねばならぬ。然らざれば其の黄金世界を保持して往くことが出来ない。斯う論斷せねばならぬから、今の下級技術家を訓練して往くにしても頭に立つて居る人が、更にそれより優れたと云ふ人物が揃つて出るやうでなければ、其の工場をして終に有終の美を成すことは出来ぬてはございませぬか。故に人と云ふものに付いては、我が工業界の將來には、之を大にしては統御する人、之を中にしては其の間に立つて働く人、下つては其の使用者の處置を充分なる理想に届くやうな工場を追々に造り成すと云ふことを、御同様に努めねばならぬてはなからうかと思ひます。

大體に於て先づ此の五條が私の工業界に對する希望でございます。蓋し是等のことは遼東の豚諸君には夙に言うて居ることであるから、今貴所の言うたことが縦合道理に合つたることであるにせよ、既に陳腐に屬すると云ふ思召がございませうけれども、併し自身の目の遅いところから常にさう云ふことを考へ居りま

した。て此處へ參上するに付いて、聊か御參考にならうかと、宿昔の希望を述べた次第でございます。甚だ御聞苦しい愚見を以て諸君の清聴を煩はしました段は深く陳謝します。(明治三十九年一月三十一日、帝國ホテルに開か  
れたる日本工業協會の新年宴會席上に於て)

## 六二 銀行集會所及び手形交換に就いて

閣下諸君、今夕の當銀行俱樂部の晚餐會に司法大臣、次官、大審院長、控訴院長、其の他諸閣下の尊臨を得ましたのは、吾々共の豫て司法部諸君の御高話を拜聴致したいといふ希望が達しました次第で、會員一同誠に大慶に存じます。過日私共は大臣官舎へ參上致して種々御談話を願ひたる際、今日尊臨のことを申し上げました所が、幸ひ御都合下されるといふ御答を拜承致し、即ち今日をトしました次第でございます。然るに此の會は大臣閣下へ其の際申し上げました通り、當銀行俱樂部に於て毎月開きまする例會故に、折角珍客を御案内申上げたるに副はぬ所の設備で、尊來を辱うしましても御饗應として何たる設もございませんで、甚だ失禮の至りに堪へませぬのでございますが、併し尊臨せられた御趣意も、決して酒盃の間にあ



らつしやらぬと考へますから、暫くこれは御有恕を乞ひたいと思ふのでございませう。

司法機關  
と金融機關  
の關係は密  
接あり

思ふに國家の進運に伴うて、司法機關と金融上の關係は日に増し密著して行かねばならぬことは、誰も共に希望し共に想像する所である。然るに從來の習慣は兎角裁判所に關係することは多くは實業界の厭ふ所と相成つて居りまして、甚しきは其の門を跨ぐさへも何やら心苦しく感ずるといふのは、蓋し因襲の久しき、古來の風習が未だ全く脱却せぬ爲と申さねばならぬのでございませう。但し斯かる風習を生じましたる所以に就いても、亦考へねばならぬ點もあらうと思ひます。併し斯く法治國と相成つた以上は、吾々法律に疎い人間も、唯法律は面倒なるものとのみ思うて居て相濟むものではないと云ふことは、不斷心掛けて居りますけれども、今日の法律の制定といふことは、或は事情必要として成立つた以外に外交上の必要から先づ備へねばならぬといふことから成立したものも、多少無きにしも非ず。例へば病有つて始めて醫者も必要なり、藥品も必要であるべき筈なるに、未だ病の程も判らぬのに先づ藥を服せると云ふから、其の藥が大に嫌ひになつ

て、さう云ふものを服まされては大變だと、之を嫌ふと云ふ有様が無いとは言へぬのであります。けれどもそれは最早過ぎ去つた者であつて今日と考へましては司法機關と金融機關たるものは、其の性質こそ異なれ相離るべからざるものであつて、而も此の程御前任の地方裁判所長の前田君からして、吾々實業界に向つて、恰も今申上げた如き趣味を以て、法律又は現に裁判を行ふ人若くは其の中間に立つ人に、或は缺點若くは不適當の行爲があるならば腹藏なく言うて呉れ。どうして之を密著せしむるが今日の世の中を進めるに於て最も必要である。戦後の經營として第一に數へねばならぬことであると云ふ御照會を得ましたのは、吾々の實に欣喜雀躍に堪へぬ所でございます。是に於て早速東京交換所に組立て、ございませう戦後經濟調査委員と云ふものに附託致しまして、それらの取調をして、其の成案を過日司法大臣閣下及び地方裁判所長閣下に差出して御覽を願ひつゝ、あります。其の事に就いては、吾々過日大臣の官舎に召されて調査した理由も陳述し、又之に對して充分心を入れて御取調べ下し置かれるといふも拜承致しました。從來吾々の取調べた事柄が、或る場合には其の書面を高閣に束ねられると云

ふことも、官府に對しては無いとも申されぬために、時々嘆息の聲も聞いたのであります。今度差出した書類は高閣に束ねられるどころでは無く、塵にも觸れずに保存して居らるゝことゝ吾々は確信して喜んで居るのでございます。斯かる密接の關係を生じまするのも、偏に司法部の諸閣下の吾々を御誘導爲し下された御高配に依ることゝ、實に感謝に堪へない次第でございます。茲に謹んで御禮を申し上げ、并に今夕尊來を辱うしたるを謝し上げます。

終に臨んで私は、臨場の諸閣下に對して、此の銀行集會所及び交換所の今日迄の沿革及び其の扱ひ居りまする業務の有様を、極く簡単に申上げるやうに致したいと考へるのでございます。蓋し此の事たる會員一同は日々に知り切つて居ることではございますが、是まで餘り尊來を請ふべき機會の乏しき司法部の諸閣下へ一言陳述致すのは、強ち無用の辯でもなからうと考へます。

元來銀行の東京に創立致されましたのは明治六年でございます。而して、明治十年頃には銀行の數も追々殖えて來ましたに付きまして、是非各行一所に集つて共同の便利を圖りたいと云ふ所からして、同年擇善會と名づけたる一の會が出来

銀行集會  
所の由來

ました。其の時には銀行の數が僅に十一であつた。それから十三年八月でありましたが、擇善會と云ふのも餘り面白くないから、寧ろ有る名稱を其の儘にしたら宜からうと云ふことで、銀行集會所といふ名に致しまして、爾來今日まで繼續致した次第でございます。併し其の頃は或は割烹店若くは各銀行の二階へ打寄つては相談を致し居りましたが、夫ては甚だ不便であつて困ると云ふ所からして、一同申合せの上先刻御通りを願ひました一室を明治十八年に造りました。其の建築資金は、各銀行が申合せ醸金をして建築致したのであります。其の地所と云ひ家屋と云ひ至つて廉い金額で成立したのでございました。夫から後場所が狭いと云ふので三十二年に此の建物が出來ました。是を以て甚だ狹隘で、決して大なる集會は出來ませんけれども、先づ今日の體裁にまで立至つたのでございます。何等の要用で左様に會合するかと申しますと、是には随分種々なる要務が包含されて居るのでございます。或は銀行者一社交上の便利に供することもございます。又銀行の個々相會する相談會に必要な場合もございます。又相共に打寄つて御互の風習御互の徳義を斯かる振合に進めたいと云ふやうな申合せの出來

ることでもあります。また或る場合には何日は休みにしたい。一同に歩調を揃へて遣らうてはないか。或は手形の取扱向を斯様にしたい。當座小切手は斯ういふやうにしたい。或は計算上厘位を切捨てること云ふ如きも、皆集會所の打合せから出来ましたので、官府は如何か存じませぬが、吾々社會では此の厘位切捨といふ事は至極簡便の事と讃められて居る。蓋し其の源は此の會堂から發したと申しても宜しいのでございます。更に今一段重要な事柄と云うたならば、明治三十七八年の日露戦争の場合に國庫債券に應募すると云ふ事も、う一つ前の日清戦争に於ても同様の事柄があつたが、必ず此の集會所に打寄りまして、さて政府の企望は斯様であるが、如何致したら宜からうかといふことを先づ下相談を致して、さうして其の結果に依つて各銀行が歩調を揃へ、それならば斯う云ふ方法にして大に盡力をしよう。或は茲に政府に斯うして貰はねばならぬと云ふやうな二説三説に分れることが無いとは申されませんが、歸著するところは遂に一となつて、銀行集會所の説は斯様である。斯ういふ希望であるといふことが申出られるやうに相成つて居るのでございます。今日の集會所組合銀行の数は六十一行で

手形交換の方法

ございました。此の六十一行が今申上げるやうに、常に一致して共に歩調を揃へて行くと云ふやうに相成つて居ります。

而して此の六十一行の中の三十三行が特に又申合せまして、手形交換と云ふことを致して居ります。此の手形交換と云ふことは最も銀行營業上便利なものでございまして、御互に小切手、爲替手形、約束手形、總てのものを仲間中の銀行であれ、ばず、い、正金として請取ります。さうして其の請取つたものを其の毎日に取調をして置いて、翌日手形交換の時刻にそれを交換所に持つて参りまして、例へば甲の銀行は乙、丙、丁の銀行に向つて渡すべきものは皆添票といふものを附けて渡す。向ふの銀行も同じ手續をしまして、僅か十時半から十一時の間に、三十三行の銀行同志が正金は持つて行かずに皆交換所で振替へてしまひます。決算は日本銀行に向つてする。日本銀行の當座借になる。又は貸になるので、其の差引勘定が著いてしまふ。其の決算上便利を大に増すのみならず、大に各商人間に制裁を加へますことは、此の交換所の打合せからして、餘り手形を濫發して仕拂方を停滯するものでもございまして、之に對する檢束がございまして。即ち其の人の手形

は向後取らぬと云ふことになりませう。俗にこれを首斬と申しますが首斬といふ言葉は餘り野蠻の言葉で、斯様な御席では申すも憚り多うございませうけれども其の爲に各商人は此の交換所の制裁を受けて首斬處分を受けたと云へば、それこそ司法上の死刑の宣告より餘程強く感じます。吾々の威權もなか／＼強大なものである、と自負しても宜い位でございます。さう云ふことからして業務を便利にするのみならず、御互の信用を厚くすると云ふことも亦達し得られるやうに考へます。

興信所と銀行との關係

更に銀行中の申合せから一の施設がございませう。それは興信所と云ふものでございませう。身元調を致す方法、商人の身代、商賣の仕方を内々で探索するといふと、殆ど惡徳らしうございませうけれども、蓋し是等の事は此の席に御列しの諸君は皆夫を御本業になさるのであるから、之を悪いと云へば、怪しからんことを言ふと思召すかも知れませぬが、吾々銀行者も之を必要としなければならぬので、此の事も亦大に制裁を加へることになると思ふのでございませう。此の興信所の創立は十年ばかり以前でありましたが、幸に大に成功して、今日では其の事業が先づ自立

し得るだけの進みを持つて参りました。右等各種の方法に依つて、此の銀行の創立以來もう殆ど三十年に達して居ります。三十年以前の昔から比較しますると多少進歩致したと言ひ得るやうに相成つたのも、畢竟は聖代の賜物で、且つ一方には今夕御臨みの諸君方の種々なる御援助に依つて、或る場合には吾々を誘導せられ、或る場合には吾々を抑制せらるゝと云ふことが、大に吾々を益したことに感謝致す次第でございます。呉々も斯かる機會でもございませぬと、前に申す病人と醫者と同じき關係のある諸君にも密接して御話することも出来ず、鳥渡御目に掛つても窮窟なる氣がして、打寛ぎて御話が出来ぬやうな嫌がございませうが、追々に斯う云ふ機會を増して、吾々の難儀になるとか不便であるとか云ふことは、遠慮なく申上げることの出来るやうにして、それが道理に適することとて、而して諸君の未だ御氣の付かぬことであつたならば、諫に従ふ流るゝが如き諸君であると存じますから、必ず御採用下さるだらうと思ひます。故に吾々は今日の如き機會を御作り下さつたことを呉々感謝致します。

今夕は大臣閣下始め諸閣下の尊來を得まして一同深く満足致します。茲に一

言の御禮を申し上げ、併せて諸閣下の御健康を祝します。

(明治三十九年五月二十七日銀行俱  
樂部の司法官招待會席上に於て)

### 六三 第三次韓國行

諸君、只今會長から前置の御言葉が大分嚴でございまして、立ちまして御話をすることは大に躊躇せざるを得ぬのであります。併し老人を轎はる情からして、七十に近い身を以て遠方へ旅行をしたと云ふ餘程慰籍の御言葉でございましたか、左様な老人であれば、總て朝に杖つくつと云ふ年であるので、少々の過失も少々の言語の不調も、總て御許し下さるであらうと思つて不遠慮にも立上つて、相も替らず至つて古臭い、至つて汚ない朝鮮談を御聴きに入れるやうに致します。私が朝鮮談を申上げるよりは、寧ろ佃君の支那談を先へ伺ふ方が諸君に大に利益が多からうと思ひますが、併しどうも話と云ふものは、先に面白いのを聽いて後にまづいふのになると云ふことは餘程困る。御覽なさい、總ての事物が先輩を先に立てるに拘らず、此の聽問に關係することは一番上手が後になる。即ち眞打と云ふのが一

最初の旅

番名人のすることである。故に私が先に立つたのは年を取つて居るとか、先輩であるとか云ふ意味でなくて、朝鮮の御話が諸君に興味の少いことであるから前座として勤める。斯う御解釋を願ひます。

私が朝鮮に参りましたのは前後三回でございまして、丁度明治三十一年から九年迄に三度の旅行を試みましてございませう。此の中には大分朝鮮旅行をなすつた方がある。縦し又御出がございませんでも、朝鮮と云ふ國の概況を御知りなさらぬ銀行者は、殆ど御一人もあらう筈がない。故に朝鮮の有様を精しう申上げて見た所が、實は諸君の書物若くは新聞等で散見したより餘計に申上げることが出来ませぬが、唯此の朝鮮に三回旅行したに付いて、其の時々感情が異つたと云ふだけは、新聞でも書物でも御覽になり兼ねる所があらうと思ひますので、それ等の感情の變つた有様だけを申し上げます。未來の朝鮮を如何にするとか云ふことに付いては、斯かる老人が彼是申すよりは、丁度此處に、第一銀行に於て朝鮮支店の主任に任じて、専ら朝鮮經營に當つて居る市原盛宏氏が参つて居りますから、將來の抱負は同君から申上げるでございませう。依つて私は現況を述べて自分の責任を

盡さうと思ふのであります。さて其の三度参つた旅行が如何なる有様であつたかと云ふと、最初に参りましたのが三十一年の四月二十日に出發致しましたので、釜山に参り仁川に参りそれから京城に這入つた。釜山に参りました時には、至つて日本に近い所の都會であつて、九州當りに在る開港場にても参つたやうな心持が致しました。是は三度の旅行に付いて左程大なる感想を變へると云ふ程ではございませぬけれども、矢張其の初めと今度とて比較しますと、草梁より汽車が發すると云ふ事、埋立地が完成したと云ふ事、倉庫が出来たと云ふ事、棧橋が架せられたと云ふ事、其の他種々の有様から見ましても大に變りました。殊に仁川から京城に参りますに付いて、三十一年の旅行は例の朝鮮轎に乗つて参つたのでございまして、朝暗い中に仁川を發して日の没する頃に漸く京城に這入る。或は其の間に轎に振落されて腰を痛めたと云ふ滑稽談もある位でありまして、以て旅行の困難を察するに足りず。殊に其の時は京仁鐵道の線路が工事中に係つて居りましたから、旅行旁、其の線路の工事を視察すると云ふので、通常の道を參らず線路を旅行致しましたゆゑ、別して其の道が嶮惡であつて、其の爲に大に時を費して、日が

暮れてから京城に達することを得ましたが、而も其の日は雨後であつて、泥濘中を夜中旅行して大に困難を致しましたのを記憶して居ります。殊に途中も汚し、京城に這入つても眞暗である。朝鮮旅行と云ふものは暗黒世界であると云ふ程の感を以て旅行を致しました。唯仁川と京城との間には鐵道を通ずると云ふ吾々の計畫がありましたから、今に見る此の道をして、つと汽笛一聲で旅行が爲し得らるゝであらうと、朝鮮の轎に乗りながらも聊か將來の企望を蓄へて居たと云ふやうな旅行に過ぎませぬ。其の時には京城だけで北部には参りませぬから、朝鮮の都會は二三經過致しましたけれども、僅に或る部分の朝鮮人に接し、或る部分の朝鮮の土地を見たに過ぎませぬからして、決して朝鮮の其の當時の眞想を知る杯と云ふことは出来ませぬ。殊に丁度二十八年の事變の以後、まだ充分に日本の勢力の回復せぬ際でありましたから、政治上の据りも甚だ悪く、又朝鮮人の我が國に對する觀念も最も疑懼の多い時代でありましたから、此の初度の朝鮮旅行と云ふものは、往古より長い關係の朝鮮でありながら、殊に二十七八年の大戦争をした後でありながら、如何なれば吾々の力は斯の如く微々として伸びぬものであるかと、

暗黒世界の旅行者も亦暗涙を呑んだと申しても宜い位でありました。是は初度の旅行で、其の間に種々な御話がありますが、古めかしいことは申上げませぬ。

第二次の旅行

夫から三十三年に参りましたのは、第一銀行の關係も多少ありましたけれども、前に申上げました京仁鐵道が丁度三十一年から二年の間に工を竣つて三十三年の八月開通しました。引續いて開業式を致さねばならぬと云ふので、十一月出立致して罷越しました。先づ釜山の有様は其の前々年に参つた時と大なる相違はございませなんだが、併し三十一年に比べると大に日本の勢力が回復して参りましたからして、釜山の土地が吾々を快く迎へるかの如き感を致しました。故に縱令事物の觀は大に改まることとがございませんでも、多少愉快を以て釜山を通過致しました。續いて仁川に参りますと、京仁鐵道が開業致して居りますから、所謂汽笛一聲一時間位で京城に達することが出来ました。此の時の愉快さは、先年の困難は殆ど取返して尙ほ差引大に利益を得た如くの感念を持ちましてございませぬ。殊に此の鐵道は、微力ながらも自分が大に骨を折つて、第一に亞米利加人との契約と云ひ其の後の事業の經營と云ひ種々なる困難の際に竣工を致した鐵道でござ

いますから、僅に廿六哩餘の鐵道でございませぬけれども、其の通過の間は何とも言ひ得られぬ愉快な觀念を持ちましたのでございませぬ。今日も尙ほ其の時の心地好いと思ふたのは、此の前の旅行に暗黒世界に這入つたと云ふ苦難を、充分に打消したと云ふことを記憶して居ります次第でございませぬ。そこで京城に到着して京仁鐵道の開業式を舉行し、續いて第一銀行の事に付いても多少經營致しましたが、同時に例の京釜鐵道の敷設も其の前年に許可を得ましたに依つて之を落成せしめたいと云ふので、いろ／＼夫に付いての手續を韓國の官憲に引合ひ、又我が公使にも打合せをし、及び日本から参つて居る居留の人々にも、此の事業に付いての賛成を乞ふと云ふやうなことに力を盡しました。此の時には丁度歸路に木浦に廻つて釜山、仁川、京城以外の一港灣を見ましたが、木浦と云ふ所は餘り精しう申上げる程の價値の無いと申しても宜しいのであります。但し近頃農業に付いて、殊に綿花の耕作に付いては木浦も中々輕蔑せられぬと云ふ有様になりさうでありますけれども、是は後段に申上げることに致しませう。

最後の旅行

夫から第三回の旅行が今度でございませぬ。今度参つて見ましては、朝鮮が眞に

面目を改めたと申す程見違へましてございます。先づ第一に釜山に著して見ますと、三十三年に經營し掛けて居つた——是は私共の手ではございませぬ、他の組合に依つて成立つて居つた埋立地が、其の大半は落成して其處には棧橋が出来て居る。此の棧橋には釜山と馬關の聯絡船がびつたり著く。汽船からして直様橋を渡して其の棧橋へ下る。夫から埋立地を通つて釜山の市街へ往く。其の間には立派な煉瓦造の倉庫が出来て、倉庫會社が開かれて居る。著するや直ぐに彼處へ電話を懸ける、此處から電話が来るなどと云ふやうな譯。まさか釜山に電話があつた通りに普く行はれて居るとは思ひませなんだ。所が夜になると電燈煌煌と猶ほ白晝の如く照渡つて居る。而して距離は少しく隔ちますけれども、草梁と云ふ所からして京釜鐵道の汽車が出發すると云ふ都合になります。草梁と云ふ所は其の前に通行しましたが、洵に荒涼たる一村であつたのが、今日では遠くから見ると立派な家が薈を列べて居ると云ふやうな有様である。又龍頭山の東に向つて絶影島に對する市街は、三十一年若くは三十三年にも稍立派であつたが、其の西へ廻つた方面所謂龍頭山の裏へ亘つた方には家が疎であつた。然るに今度

參つて見ますと、立派な町並を爲して一杯に家屋を建て連ねて居る。或る部分は宏大な煉瓦家屋なども見えると云ふやうなことである。又學校其の他總ての設備が釜山港としては完備して居ると申しても宜い位に整つて居ります。唯一寸見ても厭ふべく思ふのは、白い著物を著して長い烟管を携へたる人がぶらぶらして居るのである。是無くんば宜からうと思ひますが、是無くんば朝鮮でないのでありますから據ないとしなければならぬ。

續いて私の今度の旅行は釜山からして京釜鐵道に依つて京城に參りましてございませぬ。此の途中、或は三浪津、密陽、大邱、續いて鳥致院だとか、太田だとか、成歡だとか、平澤だとか云ふやうな中には相應なる都會もあり、有名な古戰場杯も通過して夜十時過に京城に著しました。此の日は而も暑い日で、塵埃も多く、汽車中は随分困難だと言はざるを得んであります。左様に暑くても埃があつても、自分の心には是位な愉快な感情を持つた旅行はないのであります。日本の鐵道旅行で心地好い、例へば山陽鐵道に乗つて最上等の待遇を受け、瀬戸中の山水を眺望したよりも尚ほ好い心持がしたと云ふ事は、諸君御察し下すつたならば分るであらう

これ位愉快な旅行は無かつた



と思ひます。京城に著しますると、京城の有様も昔日と大變に違ひまして、三十三年に仁川から龍山に參つた時、龍山の停車場も至つて徹々たる有様であつた。永登浦の停車場も甚だ寂寥として居つたと云ふことを回顧しますると、實に龍山、永登浦あたりは家屋櫛比と云ふ有様で、且つ夜になると燈火の設備がございますから、昔は朝鮮の旅は全く暗黒であつたが、今日は即ち文明の夜中と言つて宜い程の立派な市街となり得たのでございます。

平壤見物

京城に兩三日居つて平壤に參りました。此の旅行は例の軍用で竣工された所の京義鐵道に便乗しましたのであります。平壤と云ふ所は今度初めて一覽致しましたが成る程思ふたよりも立派な土地で、舊帝都府と云ふに恥ぢますまいと思ひます。第一に地味が大層宜しうございます。市街の設は京城などと比べますると餘程狭い。また其の構造も規模も小でございます。併し日本人の居留の増しましたことは最も平壤が多いのであります。日露戦争の以前には漸く三百人位であつた平壤が今日は六千人、二年の間に殆ど二十倍を増加し、爲に日本市街を新市街と云うて、一區域出來て居ると云ふ程の有様にまで進んで居ります。例の

大同江が平壤の町の下を流れて居ります。此の江は大陸的の大河であります。唯水の流が緩てありますから、餘り水が清澄とまで褒める譯に行かない。併し濁水ではございませぬ。而も平壤より上流はずつと、斷崖になつて居つて、清流壁と云ふ地でございます。此の流に浜つて例の牡丹臺迄舟遊を致して見ましたが、其の邊の場所は殆ど文人墨客の隨分筆を執つて書切れぬ程の事柄があると申しても宜しい。少し文學者的に申すと、清流壁の牡丹臺に近寄つた山の名は錦繡山、大同江の向ふに一の島がありますが、夫は綾羅島、何だか錦繡綾羅杯と云ふと美人でも其處へ出さうな様子に見えますが、出るのは例の白衣ばかりであります。山の尖端に一の立派な樓があります。立派と云うても今は殆ど古色掬すべく、塗つた彩色も悉く禿げて居りますけれども、濤碧樓と云ふ一の樓があります。此處から大同江の流域を眺望すると、實に蒼茫たるものであります。夫より牡丹臺、乙密臺、玄武門、箕子廟等いろ／＼名所を一覽致しましたが、此の名所の中に二十七年の役に戦死した支那の將軍左寶貴の墓があるとか、當時我が軍が何れから進んでどう云ふ戰略を以て敵を破つたかと云ふことを聞きますと、軍事に關係せぬ吾々でも、

過日の京釜鐵道に乗つた時よりは、又更に心地好い様な觀念が致しましたのでございませぬ。平壤と云ふ所は兎に角舊都府で相當な商賣があるやうでございませぬ。殊に周圍の土地が至つて地味が良い爲に、其の近傍の大なる集散地になつて居りますから、追々に繁昌すべきだけの望があるやうです。併し左様に日本人が俄に殖えたと云ふことは、其の土地の商賣が日本人を澤山引附けたと云ふよりは、寧ろ日露戦争の軍事關係が、殊に平壤に著るしかつた爲と言はなければならぬ。果して然らば其の關係が止んでも、其の繁昌が繼續し得ると云ふ事は一の問題と言はねばならぬ。併し如何にも地味の良いのと土地の關係を以て、段々日本人の入込んで參る所の有様が、大に進んで往きましたならば、前に申す軍事關係が止みましても、尙ほ其の繁昌を維持する事が出来ぬものでもなからうかと想像されます。蓋し是等の事は今日斷言し能ふこととてございませぬ。唯海陸の聯絡は殆ど無いと云うて宜いやうな有様であります。鎮南浦からして海路十五里の距離があるけれども、此の道は朝鮮の駄馬ならでは通行が出来ぬと云ふ有様であります。船も大同江の下流は相應に通ずるけれども、平壤から二里ばかり河下に淺瀬が澤山

あつて、容易に大きな船が通ることは出来ぬ。支那ジャンクに似たる朝鮮ジャンクは多少交通して居るが、是以て誠に寥々たるものであります。先づ海陸交通運輸の聯絡と云ふものは、頓と附いて居らぬ、また附けようと企つる人も無いと云ふ有様であります。縦ひ農産のみを主とする場合でも、此の有様では、逆もいけまいと思ひます。これは吾々大に心を用ひねばならぬこと、自分は感じましたのであります。

鎮南浦の  
状況

夫から大同江を船で下りまして、鎮南浦に參りました。是も初めての旅行で三度參りました中、今度初めて經過したのであります。鎮南浦は大同江の河口から二里ばかり上にある港であります。即ち川港であります。山を負ひて川に臨んで居る。地勢も宜しく、風景にも富み、山には樹木もあつて、汚ない土地ではございませぬ。寧ろ朝鮮の港の中では先づ奇麗なと言つて宜い位であります。規模は小さいが、隨分望のある所と言つて宜からうと思ひます。併し先づ其の邊での都府たる平壤との交通機關が前に申す通りでありますから、其の他にも近傍に都會があるさうでありますけれども、是等との聯絡も附いては居らぬ。唯僅に地方か

ら出て来る米大豆が貿易品となつて居りますから内地に於ては道路の改良を圖り、海に於ては海陸の聯絡を附けなければ將來の繁昌が期せまいと思ひます。併し鎮南浦も昔日に比べると殆ど四五倍の人員が増して、其の初め山の方から家を造り掛けてあるから、まだ海に向つて良い場所に多くの空地がございました。追々に家屋を建築しつゝある様な有様であります。此の地は平壤の如く俄か進みが無い代りに、戦争關係に對して餘り困難を感ずる虞がなくても済まうかと云ふ有様であります。

京城及び  
仁川の發

京城の御話を充分申上げませなんだが、京城は此の前から比べますと、總ての設備が盛になつて居ります。諸役所に於ては現に統監府も立ち、理事廳も立ち、總てのものが具備して居ります。獨り日本の設備ばかりでない。韓國に於ても多少事物が變つて參りました。殊に泥岷の近邊は、日本の町が昔日から比べても大變に擴がりました。又電燈電話杯は釜山に申上げたと同じに自由に使用されて居ります。其の他或は料理屋でも、宴會をするやうな所でも、一回は一回より進んで參つて居りますやうであります。唯朝鮮だけに屬する家屋若くは總ての有様が、日

本のそれ程進んで居ると云ふ事は申上げ得られぬのであります。仁川は京城滯在中兩三日參つて滯留を致しましたが是も誠に奇麗な港でありまして、唯此の港は潮の干満の強い爲に潮の引いた時は甚だ見悪い有様がありますけれども、場所は狭いが方面も好し、而も朝鮮家屋はずつと山の傍の殆ど人の目に觸れぬ所にありますから殆ど日本町である。且つ所々に西洋館があり、又或る一部に支那町がある。貿易開港場としては朝鮮に於ては第一等に位して居ります。殊に總ての設備も、洋食とか、宴會とか、其の他遊戯に屬する場所に至るまで、寧ろ京城よりは一段を越えて居ると云ふやうな設備で、な、な、行届いた奇麗な町でございます。殊に軍事行爲として、例の月尾島への橋を架しまして、凡そ一海里以上もあらうと云ふ所はずつと聯絡を附けました。此の聯絡は他日如何なる方法にするのでありますか、先づ軍事の必要から一時の設でありませうが、これから先に如何にするかと云ふことは、まだ能く私共伺取りませぬが、何にせよ大工事であります。牧野と云ふ大佐からの案内に依つて、其處へトロックを一覽を許されまして參つて見ました。が甚だ愉快でございました。而して此の軍事行爲としての築港經營など

のことも、陸軍では種々考案を盡されて居りますが、まだ併し地方の商賣上若くは政治上の考を以て、仁川の港を如何にすると云ふ方法は立つて居りませぬ。故に海陸の聯絡はまだ其の緒に就いて居ると言はれぬやうに見ました。爲に私は仁川の人に向つて、既に軍人間にも斯かる考案のあるのに、諸君の間に其の論が上らぬと云ふことは甚だ奇異の思を爲すと云うて、少し詰る如き一演説をして別れたこととでございます。兎に角大に仁川の港が面目を改めたと云ふことは申上げ得らるゝやうでございます。

斯様に各所が面目を改めたと申上げて見ますと、即ち朝鮮が大層盛になつたかのやうに聞えるが、退いて能く考へて見ると、朝鮮が左迄盛になつたのではなくして、詰り日本の繁盛が溢れて朝鮮に流れて来て、吾々が朝鮮に於て盛になつたと云うて宜しい。朝鮮と云ふ國は餘り大なる變化は爲さぬのであると云はなければなりませぬ。然らば朝鮮は三十一年と少しも變りはないかと云ふ反問を起しますと、さうではございませぬ。家屋其の他にも多少變化はあるが、第一に商工業界に於て考が變つて居る。其の變つて居る一例を申上げますと、先づ三十一年

實業界より見たる朝鮮

頃には一切無かつた合本法と云ふものが近頃追々に企てられ、且つそれ等が細々ながら其の業も緒に就いて居るのがございます。即ち漢城銀行と云ふのが數年前から業を開いて、微々たるものでございますが、昨今では大分盛になつて居るやうであります。又天一銀行、獨立銀行、韓一銀行、妙な座頭の名のやうな銀行が澤山出来て居りますけれども、併し此等が兎に角資本を合して營業を爲すに至つたと云ふのは、吾々の徳化が行はれて來たと自慢しても宜いと思ひます。それと同時に昨年此の春に掛けて、金融逼迫から引續いて生じました手形組合或は倉庫會社、此の會社は庫へ物を入れて居るかと思ふと、庫も何も無い野天に貨物を積んで居る。倉庫會社でなく野天會社と言つても宜い。其の仕事は何をして居るかと思ふと、品物に對して金を貸して居るのである。誠に奇異の感がありますけれども、併し日本の三十年の昔を見たならば、決してさう云ふことは珍らしいことではないから、何も朝鮮許りさう笑はぬでも宜いことと考へる。左様な事物は縦ひ不完備にもせよ、明治三十一年頃には無かつた。三十三年にもまだ無かつた。同時に朝鮮の商賣人が第一銀行にも、其の他の銀行にも取引を開いて居る。して見ま

すと朝鮮も所謂豎子教ふべしと云ふ場合にまで相成つたと申して宜からうと考へます。さりながら此の朝鮮が決して工業國になるとか商業國になるとか云ふことは先づ今日の希望には上らぬので朝鮮國はどうしても農業國たらざるを得ないと考へるのであります。商賣も前に述べました通り多少進んで行く傾はありませぬけれども決して商業國などと云ふことは望む譯に行かぬ。又工業に於ても今日の朝鮮人では不可能とまで言はなければなるまいかと思ふ位に考へます。故に朝鮮に於ては將來の開発は農業一天張として勉強するのが相當の事と私は信じて疑ひませぬ。而して幸に我が同胞人が朝鮮に對する施設は先づ第一に鐵道は何の爲に敷設されたかと云へば即ち農業擴張の基礎に相成ると申して宜しい。又今日各地に手を著けて居る仕事はどう云ふことかと云へば大抵農業です。三浪津近所には此の會員中の有力なる村井氏などが大に力を入れて經營をして居る。又群山の最寄には大倉氏が力を入れて經營をして居る。又兼二浦最寄の土地を經營して居る華族では岡部子爵が居る。尙ほ鍋島侯爵も力を入れる。其の他細小なる種類で吾々知つた者にも指を屈して數へたならば十四五の數を數

今後の仕  
立方如何  
にあり

へ得らるゝ程に農事に手を着けて經營して居るのでございます。而して其の人が皆著々其の緒に就いて居ると云つても宜いのであります。殊に道路は徐々に改良し海陸の聯絡も著け而して鐵道の仕事が段々進んで農事に有効になつて參りましたならば蓋し朝鮮の富が數年の後には倍加するであらうと考へます。然らば決して朝鮮を農業國だからと云つて輕蔑する者ではなからうと思ひます。唯今席上の御話の中に世界に有名の大戦争をして残したものは英米に對する借金ばかりであると言つて會長が頻りに嘆息の御言葉がありました。成る程或る點までは嘆息の言葉も出さねばなりませんけれども併し朝鮮も大戦争の結果残したものの一部分である。而も將來大に望がありと考へますならば縦ひ十二億や十三億の金を費したからと云つて唯悲觀的にのみ終らんでも宜からうと思ひます。唯茲に私が更に一言末尾に申上げ添へたいと思ひますのは、どうしても彼の國の政體人情が殆ど形體無く恰も「萍や今日は向ふの岸に咲く」と云ふ有様たるを免れませぬ。之をして根據ある政體人情たらしめようとするのは實に困難と言はねばなりません。故に我が國の之に對する政治が如何なる方針を

以てするが宜いかと云ふことは、明治三十一年頃の如く、定まらぬ天氣のやうに、降るか照るか分らぬのは誠に困る。天候は人工を以て定むることは出来ぬのでありませうが、政治上の事は大體の方針が定まりましたならば、天候よりも定め易いものであらうと思ひますから、是非とも今日の主義を何處までも貫いて貫はねばならぬ。其の貫かんとする主義は今日の博愛で宜い。一視同仁で宜い。決して朝鮮人を嚴酷に對遇するやうな企望は持ちませぬ。吾々と同じく視て宜いのであります。只終始一貫して進むやうにして貫ひたい。果して其の政治の施設上から、彼の國民をして生命財産を安固ならしめ得られましたならば、——加ふるに交通機關海陸の聯絡若くは農事の改良等が充分行はれましたならば、彼の國の富は十數年の後には數倍しまして、今日吾々が彼の國に對する貿易高が僅に三四千萬圓に過ぎませぬが、是に數倍する高に達する事は困難ではあるまいと考へます。果して然らば、今後十年乃至十五年の後には、今申す大なる戦争の効果が、成る程是程の利益を爲し、是程の價值を増したと、豊川君が大いに御喜びなさる時期があらうかと信じます。先づ朝鮮に對する私の希望は右の通りで、現在の觀察のみを中

上げて今夕の謝意に代へます。(明治三十九年八月、銀行俱樂部晩餐會の席上に於て爲したる韓國視察談なり)

#### 六四 陸軍將官の凱旋を歓迎す

元帥、大將及び諸將官閣下。今夕は當銀行集會所、手形交換所、銀行俱樂部の三團體が申合せまして、元帥、大將及び諸將官閣下の尊來を請ひ上げました所、歳末御繁忙の中を御繰合せ下されて、茲に諸閣下の御尊臨を辱うしましたのは、會員一同の此の上も無い光榮でございます。依つて私は會員を代表して一言謝辭を申し上げます。

私は茲に會員に代りまして此の開宴の趣旨を申し上げようと考へますが、元來吾々銀行者は從來の習慣として軍務に御關係の方々とは頗る疎遠の嫌がございます。まして、軍事と經濟とは兩者相待つて國の進歩を謀らねばならぬ必要がありながら、維新以前にありては殆ど吳越も音ならぬといふ有様に打過ぎましたが、是は頗る遺憾千萬と考ふるのでございます。然るに明治の聖代に移りましてから、國民皆兵と云ふ制度となり、昔日の舊夢は全く覺めましたなれども、習慣の久しき軍事

軍人商工  
者が吳越  
の感あり  
なしは遺憾  
なり

と商工業とは兎角に親密を缺き、吾々から見ると軍人は何やら多く國費を費し、不生産的の事業をのみ經營なさるが如き觀察が生じます。又反對の軍事側の諸君から御覽なされると、商工業者特に銀行者杯は、けちな考を以て、始終卑屈に安んずるといふ感じを抱かれるであらうと、僻み考かは知れませぬが思つて居りましたのでございます。然るに維新以來段々に事物の進むと共に、已むを得ぬ勢からして或は支那と戦ひ、又此の一兩年以前の大國難大戦役これ等に就いて殊更に軍事經濟兩者の間柄を磁石と鐵の如く密著せしめたといふのは、蓋し諸君の御力に由るものと存じますが、また世の機運が大にこれを助けたと申さねばならぬのでございます。今般の大國難に際しては、實に御列席諸閣下の勇武絶倫なる、勳功を以て、幸に國威を發揚し國光を煥發せしめたことは、吾々國民として又銀行者として常に敬慕已まぬのでございます。昨年の冬から當春に掛けて、追々の御凱旋に際しては、其の時々宴を設けて感謝の意を表し、且つ御慰勞を申上げたいと考へ居りましたけれども、折々の凱旋にあらせらるゝ爲に、遂に恰好の時機を得ざりし故、實は今夕偶然に催す小宴の趣旨で御案内は申上げましたけれど、甚だ粗末ながら多

少御勤勞を慰めたいといふ微意の存し居りますことは、何卒御諒納を請ひ上げたいのでございます。

吾人も亦  
國家を思  
ふに赤誠  
に變りな

想ひ起すと三十六年の秋頃からして、密雲雨らず、段々に國交の紛糾して參りまするに就いては、吾々國民として如何に相成るであらうか。歐羅巴各國ですら眉を蹙め頭を悩ます所の國柄と、勢ひ衝突を免れぬとなつた日には、殆ど國運を賭してのことである。最早此の場合戦の一途あるのみ。既に戦の一途と決する以上は、また勝たねばならぬといふ希望は生ぜざるを得ぬ。此に至つて始めて御列席の諸公閣下を仰ぎ上げまするは、殆ど病に臨んで神佛を禱ると同じやうに、目の見えぬ吾々ではございますけれども、其の際吾々が臨場諸公閣下を口にこそ出さね、心では深く御信賴申上げたといふことは、諸君も必ず御承知下さることゝ存じます。其の初め三十七年二月早々國交斷絶といふことを承知しますると、忽ちに海軍の捷報を得て聊か喜の意を生じましたけれども、陸軍に於ては何れに相成るか、と吾々素人の評判は素より取るに足らぬ言葉ではございますが、今般の戦争は海軍は先づ大丈夫であらうけれども、陸軍は困難であらうといふことは謂ゆる下

馬評ながら、吾々は殊に其の邊に杞憂を抱かぬてもなかつたのでございます。故に九連城の戦捷によりて鴨綠江の連絡の著く頃は、私は病中に居りましたけれども、褥中に呻りつゝ心配をして居つたのでございます。定めし其の時分此の席に居る豊川氏及び其の他同業者諸君も、共に尙ほ一層心配致したといふことは、今日も想像するに足るのでございます。然るに其の戦争は誠に満足な勝利を得て、續いて追々に北進して参りますといふことを喜びつゝ居りましたる所、同じく三十七年の七月頃と覺えまするが、丁度浦鹽の艦隊が出て、種々日本海若くは太平洋に於て暴戻なる行動を逞しうするに就いては、商工業界も餘程憂慮を致しました。當初より制海權は充分に得たと思ひさや、多少の妨害を受けはせぬかといふことが、其の時分吾々の最も憂とする所でございました。續いて尙ほ懸念を増しましたのは、旅順陥落の遅延といふ事でございます。十月若くは天長節までには必ず陥落するであらうといふが如き風聞を耳にして居りましたのが、天長節が過ぎても未だ落ちぬ。これに反して婆羅的艦隊は、追々に東に進んで参るといふことが屢々傳聞されまするので、此の末は如何であらうかといふ事をば、丁度其の頃は私も

病が治りて漸く事務を取り得るやうになりました。銀行者間に數人相集る場合には、各、眉を顰めたこととございました。殊に十二月と覺えまする。私は第一銀行の關係から朝鮮に始終連絡を取つて居りまするので、或る筋からして内命で、向後凡そ四五箇月間朝鮮に於ける國費を維持するには幾許の金額を要するかといふ下問を蒙つたので、若しも是は制海權が破れもするかといふ憂慮を抱いて、窃に暗涙を注いだ事もございます。これは十二月末と記憶して居ります。併しそれ等の杞憂は全く素人の夢に過ぎませぬ。て、一月の二日には望の如く旅順開城となり、ステッセルに降参する。總て満足なる結果を得たといふのも、皆是諸閣下の大偉勳よりして、斯かる安心を吾々に御與へ下さつたと喜び上げねばならぬのでございます。其の前後或は南山に、得利寺に、遼陽に、沙河に、奉天に、數度の大戦争も著々其の戦機を誤らず遂に今日あるに至りましたのは、吾々は何と謝詞を申上げて宜しいか、其の言葉を知らぬのであります。但し私素人の記憶でございまするか、前に申上げましたる事も一向戦争の順序は立ちませぬが、今茲に其の當時を追想して見ますると、膚に粟を生ずるの感が起ります。是皆今日此の場合に吾々



の懐抱する感情を諸閣下の面前に陳狀して、吾々は左様にまで深く肝銘して居るといふ事を證明仕りたいのに過ぎませぬのでございます。

戦争に對する二種の見解

蓋し前にも申します通り、戦争と経済とは相離るゝといふ理はございませぬけれども、必ず又相伴ふとのみ申されませぬのは、元來一方は費消を専らにするもの、一方は生産を務むるものでございませぬから、戦争の必要から軍備にのみ力を入れるといふことは、國家の経済に甚だ困難だといふことを、始終經濟方面の者は申します。又反對に軍事經營の方々は、事は、事ある場合に其の準備が無ければ、之に應ずることは出来ぬと言はるゝことは、何時の時代にも生ずべき議論で、決して今日のみと申すてはなからうと考へます。而して其の間に戦争は國家に害を與へるものだ。戦争は國の繁盛を妨げるものだといふ判断を下し、又或は戦争は國の氣運を一新するものだ。國の事物を擴張するものだといふ判断も與へられる。是は兩方に説がございませぬやうに考へられるのでございませぬ。唯今御待請け申上げ居ります席で、上原閣下へ申上げましたのでございませぬが、丁度一年の晩秋と覺えます。第三回の公債を募集します頃ほひに、私の病も僅に癒え

ましたので、其の公債募集の事に就いて國民後援會といふものが大に一般の人氣を鼓吹する爲に演説會を開いて遣らう。それには演説家のみが出て談話するのは甚だ面白くないから、實業家からも出るが宜からうといふので、私も其の一人に選まれて歌舞伎座に出て、所謂檜舞臺の演説を始めて致したことがございませぬ。其の時に私は斯様な演説を致しました。之を此の席で申上げますれば、定めて御臨席の諸閣下は、貴様の言ふ通りだと兩手を御舉げ下さるだらうと考へます。御禮心に陳狀致します。

戦争と經濟

それは「戦争と經濟」といふ演題であつたのでございませぬ。前に申上げます通り、戦争は國の經濟を妨害するものだ。故に昔から俗諺に「地所持や、金持や、疝氣持はあたり近所に事無かれ」と云うて居る。畢竟是は悪く申せば、しみつかれなる、貨殖を努むる者は、成るべく近所に騒動の無いことを望むといふの意味で、即ち銀行者杯は、國家に戦争の事柄など無かれと思ふ如き心を意味したものと察せられる。然るに斯く申す濠澤も經濟界の一人であるが、私は反對に戦争は經濟上に大なる裨益を與へるものだ、と斷案して茲に申上げるのである。試みに戦争の國家

の經濟に裨益致した例を擧げて申さう。先づ歐羅巴の有様を見ても、決して戦争が經濟に妨害をしては居らぬといふことは數多の例があらうが、先づ第一に英佛の戦、二十一年も戦争をして居つて困難をしたと云ふけれども、英吉利の商工業は拿破崙戦争の後に大に發達したてはないか。又七十年の普佛の戦争も勝つた獨逸が發達したばかりでなしに、負けた佛蘭西すら尙ほ經濟が大に擴張したといふ事は、經濟家が充分證する所ではないか。さすれば外國の例に依つて見ても、戦争は強ち經濟を妨害するものでないといふ事は充分言ひ得られるやうである。私は歐羅巴の歴史に暗いから、尙ほ細い例を茲に擧げることが出来んけれども、日本で御覽なさい。總て戦争の後に經濟が發達したといふ事は著々其の例がある。遠く神功皇后の三韓征伐の如き、必ず其の時分の國家の機運は大に進んで、其の事物が擴張したに相違ない。其の以後と雖も、足利の末あたりの小競合は、或は如何であつたか判りませぬけれども、既に徳川氏の戦勝後が大に國運を發達せしめた。豊臣秀吉亦然り。維新以後に於ても、極く近例が即ち日清戦争の後を御覽なさい。二十八年、九年、三十年此の間に我が國の進歩と云ふものは容易なものではない。

而して三十一年頃には餘り進み過ぎて大に困難した。少し食事を過ぎて後で腹工合を悪くしたといふことはあつたけれども、それが爲め大腸加答兒を起して、身體を虚弱にしたといふ程には無うて、矢張相當なる進歩擴張を見た。畢竟其の戦争があつたから三十七八年の今日に至つたてはないか。果して然らば、戦争は總て經濟に對しては大に裨補するものである。然るに茲に一つ不思議な話がある。私が露西亞の經濟學者、しかも軍事學者で頗る有力の人——私は歐羅巴の事は知らぬ。況や露西亞の事などは尙更知らぬ。知らぬけれども、彼の有名なるブルボとか云ふ人の著はした『近時の戦争と經濟』といふ書籍がある。其の翻譯書に依つて見ると、此の人の論旨は全く戦争は經濟の妨害者で、殊に野蠻的戦争はまだしも宜しいが、文明的戦争程金の澤山掛るものはない。逆も國家は文明的戦争を無闇に遣られた日には堪るものではない。故にどうしても平和會議を起すが必要だと言つて露西亞皇帝を勸めて平和會議を起させたのみならず、其の『戦争と經濟』といふ書物は、數字を擧げて種々なる調査によりて、戦争が經濟を妨害する理由を證明してある。其の一としては、工業商賣の繁昌する國ほど戦争に堪へぬ。

之に反して農業國は戦争に餘程維持が出来る。例へば精神遲鈍の種類の者は、排氣鐘で空気を除かれても餘程命を保つ。蝦蟇は三十分保つけれども人は五分間で死ぬといふ様な差がある。工業又は商業國は、農業國に比べて戦争に際して其の困難の度が強いといふ事を種々なる例證を擧げて論じて居る。要するに戦争は經濟の大妨害ものと斷案をして居る。故に露西亞の經濟學者ブルポの説と、日本の經濟學者——とまでは言へませぬが、日本の經濟家の澁澤の説は正反對である。そこで如何なる判斷をして宜いかといふ疑が生ずる。所が私は一言に判斷することが出来る。併し是は私一己の説で、聽衆諸君が残らず此の説に同意して呉れるかどうかは判らぬ。而して私は之を何と判斷するかと云ふと、其の戦が仁義の戦、王者の戦であつたならば、戦後其の國が必ず繁昌する。若し其の反對に暴戾なる不義の戦であつたならば、戦後必ず其の國は衰微する。言換へれば、戦後國の衰微する戦争は暴戾の戦である。不義の戦である。戦後國の繁昌するのは君子の戦である。王者の戦である。然らば今日日本の露西亞と戦ふのは暴戾の戦であるか、仁義の戦であるかと云ふことは、直に諸君の判斷が著くではないか。果

して然らば戦後必ず國が繁昌する。國が繁昌するならば、此の國庫債券の募集に應ずる位は何でもないではないか。故に諸君大に奮發して公債募集に應じなさい、といふ事を申しましてございます。是は既往の演説で、今日價値の無い御話でございますが、私の戦争に對する解釋は、今申す如く考へて居りまするのでございますから、若し臨場の諸閣下が、銀行者は戦争は嫌ひだと思召すならば、不義の戦争を嫌ひ仁義の戦争は大に歓迎する、といふことに御解釋を願ひたいと思ふのでございませぬ。

實業家として軍事組織を整備するを美む

更に一つ茲に申上げて諸閣下の高評を請ひたいと思ひまする事は、吾々共其の方面こそ異なれ、是非諸閣下の統率せらるゝ軍人状態に我が經濟界をも進めて行きたいと常に希望して居りまするのでございます。それは如何となれば、元來吾々の管理する經濟界は、維新以後新に改造されたと申して宜しいのです。經濟社會の現況が、幕府以前にあつた有様とは全く形が變つて居ります。また御列席諸閣下の統率せらるゝ軍事界も、幕府時代のものとは全く面目が變つて居ることは明かであらうと思ふ。果して然らば維新の大改革後軍事といひ經濟といひ全く

新規に改造されたものであつて、而して此の改造されるに就いては、雙方の部類に新しい分子が混入して来たといふ事も御了解であらうと思ふ。事を分けて申しますと、御列席の諸閣下は大抵舊藩の士族といふ御方で在らつしやる。兵制で申すならば昔は武門武士といふ一種類がちやんと出来て居つた。然るに今日の兵制は豆腐屋の丁稚も小間物屋の小僧も皆軍人になつて居る。故に此の階級の混同から申しますると、今日の軍人は下級の者を上へ引上げて交ぜたといふ改造法になつて居る。之に反して商工業者の改造はどうであるかと云ふと、昔は士農工商というて商は四番目の最下級に居つた。士は一番の上級に居つた。此の上級の士が商に交つて来た。即ち下級の者へ上級から這入つて来たから、若し比較論で其の優劣を判断すれば、軍人の御仲間より吾々の方が餘程上進して宜い譯である。何となれば、善いものへ悪いものが交つたよりは、悪いものへ善いものが交つて来たのだから——。そこで吾々は其の當時は大に傲慢をして居つた。今に御覽なさい、吾々商賣人は軍人より立派な事をして見せると、斯う考へて居つたのです。然るに二十七八年若くは三十七八年の大戦役のあるに際して、著々其の實

際を拜見しますると、實に軍人の勇武絶倫にして死を見ること歸するが如く、獨り戦闘に強いのみならず、總て充分に行届いて居るといふことは、是は如何なる理由であるか。之に反して吾々商賣人は頻々と種々なる誹謗を受ける。いや、商業道徳が進まぬ。商賣人の契約は堅くない。商賣人は甚だ不品行だ。一致をせぬ。約束が守れぬなどといふやうなことを常に耳にします。單に商賣人に資力が足らぬとか力が乏しいとか云ふならば、未だ國が新しいからといふ理由もございませうが、不道德の誹謗には、甚だ吾々の辯解に、苦しむところでありませう。詰り諸閣下の御高配の行届く所からでもございませうが、軍人の働さに比較して見ますると、吾々商賣人は實に三舍を避くるところではございませぬ。赤面千萬額に汗するやうな有様でござます。是は何から原因するであらうかと云ふことは、種々考察して見ますが、到底吾々の智慧では發明が出来ませぬけれども、私は之を一々斷案して、軍人は至誠といふ事を以て第一の根本となさる。商賣人は誠を以て根本とするといふ事が充分に整うて居らぬ。此の誠の足ると足らぬのが、即ち兩者の著しき差別の生ずるところである。甚だ口廣い言分ではございませぬけれども、

吾々も同じ日本人である。軍人にのみ智恵が餘計あつて吾々に智恵が少いといふことには解釋が出来ぬ。さすれば外に何か一つ缺點があるであらう。其の缺點は即ち至誠を厚く遵奉せしむると然らざるとに原因するのであらうと、始終感じて居ります。斯かる御席に於て、敢て諸閣下に諛言を呈する意でも何でもございませぬ。眞に左様に考慮して居りますので一言申上げて、幸に諸閣下に於ても此の事に就いて御注意ありて、商賣人も斯く心得よ、といふ御示教を乞ひたいと考へまするのでございます。

長口上を申上げて恐入りましたが、今夕此の會を企てまして諸閣下の臨場を煩はしましたのは、斯かる意味であるといふことを、會員に代つて陳述致した次第でございます。(明治三十九年十二月十九日、銀行團體の陸軍將官招待會に於て)

## 六五 明治三十九年の經濟事情

食卓上で鹽島君から御紹介を戴いて居ります。今夕は私が此の目下の經濟の情態に就いて愚見を申上げるやうにといふことでございますが、御聞及びもござ

いまする通り——御聞及びと云ふより、御列席の中には、まゝ其の間に多くは這入つて居る御方があらつしやるであらうと思ひますけれども、此の經濟界は所謂企業熱物興の際、幾らか熱度が減じ掛つたか知れませぬけれども、まだ、中々高い熱度を保つて居るといふ時代と思はれる。而して私自身は矢張其の熱度の中に居る一人で、丁度其の渦卷の中の人と言はねばならぬであつて、所謂「鹿を追ふ獵師山を見ず」と云ふ位である。之を外から觀察する如く、良い冷靜の目を以て見得るや否やといふことは自らも測り得られませぬ。況や元來物を學んだことも少し、又不斷に物を調べるといふやうな能力も乏しい、能力と共に時間も乏しい。旁、以て先づ目前を纔かに經營して居るといふ營々汲々の身柄ですから、此の見渡し、たところの觀察を唯腰だめて申上げるといふに過ぎませぬ。經濟學協會の會員諸君などに對しては、殆ど少し御恥しいと言はねばなるまいと思ひます。併し左様に取得は乏しいが、唯一つ年を取つて居るといふだけは、前島男爵の如き御方が居るから餘り威張つては申されぬが、先づさう三人も五人も下に下らぬのです。是だけは確に諸君に優れて居るかと思ひ得るだらうと思ひます。而已ならず、唯

空しく年を取りませんが、明治四五年頃から經濟社會に、縦ひ良い眼識を持つて従事は致しませんでも、兎に角苦勞し來つたといふだけは事實でございます。其の間の經歷が若し多少効能を爲したとすれば、それを取得として戴く外ないと思ひます。

明治初年  
より十九  
年迄の經  
濟界一般

先づ現在の事情を申し上げます前に、經濟界に一張一弛のある有様を、私の僅かの記憶を繰返して、維新以後概略を申述べて見ようと思ひます。初め私は大藏省の一役人であつた。其の頃は私は大藏少輔といふものであつたが、今の大藏大臣は中々謙遜で、殆ど總てが平民的にやられますので結構と私共は思ひます。私共はまだ二本差の癖が餘程あつたもので、其の時分の大藏少輔は平民の前へ出るといふと叩頭を後へするといふやうな有様で、丁度明治六年から官を辭して、殆ど三十四五年此の商賣界に居りますが、まあさう數々變化は記憶も致しませぬけれども、ちよつと自分の記憶に存して居るところで五七回、其の間に進み、挽み、進み、挽みといふ所謂經濟の一張一弛があつたやうに思ひます。一番初めは、明治七年に小野組の破産といふのが東京の經濟に大なる打撃を與へて、それ金融通

迫といふことの聲は仲々えらかつた。此の事を知つてござるのは、殆ど前島君尾崎君位で、其の他の御方は後で御父さんから話に聞いた位であらうと思ひます。まだ何も彼も整頓せぬ時代でしたから、其の場合は餘りどういふ風に經過したといふことは、吾々も後で觀察が充分附かぬ位です。十年の西南の役、是は又一種の經濟界に變動を與へた。丁度其の前銀行が多く出來まして、此の銀行は紙幣が不換紙幣を以て紙幣を換へるといふ妙な制度が其の時に出來た。併し此の十年の戰爭以後の經濟界といふものは、十一年には大層諸物價が高くなつて參りましたからして、丁度今日のやうな有様に大に景氣を進めて參りました。總て是は何れの土地何れの時代でも、一の變化から總ての物價に騰貴を現はす場合には、經濟界の景氣は好いといふことはいつも同じ情態というても宜からうと思ひます。或は諸職工の賃金若くは普通の商品に、土地に、家屋に、總ての方面に段々價を上げて往きましたからして、大層商賣に活氣を惹起しました。其の原因は何であるかと云ふと、詰り經濟學者は其の時分は不換紙幣を餘り澤山發行したのが主なる原因であつたと結論されたやうです。また事實左様かと思はれたですが、結果十三四

年頃からまた大層景氣が好いと喜んで居るに引換へて、今申す不換紙幣であるからして、其の銀紙の差が段々に……其の時は金貨制度でないから金紙の差とは言はない。銀紙の差であつたのですが、是が甚しくて到頭此の銀貨に對して五十何錢といふ位まで紙幣が下つて往つたのは最も激しい場合で、紙幣が一圓なら銀から云ふと五十錢になるといふ程迄下落いたしました。是から又大分人氣を變動せしめて、是は大變だと言つて此の救護策といふことが中々喧しうございました。其の頃に此の經濟學協會に最も縁故の多い故田口先生杯は、大層其の時に憂慮し、又筆に口に種々なる意見を述べて、或る權貴には大に激怒を受けたといふことであつた程でございました。さういふ時代は、又大變に此の經濟界は沈鬱に赴いて參りました。而して政府は其の時分に如何なる手段を執つたかと云ふと、どうして此の紙幣を大に減縮せしめて、さうして紙幣は今の不換で無い兌換の物にする外ないといふ方針を探られました。是等のことに就いては、御列席の阪谷氏などは其の頃から執筆されて居りまして、充分御記憶があるであらうと思ひます。殊に其の方針は松方伯が専ら力を入れたところであつて、到頭是は十四年に兌換

し得るやうに相成りましたが、其の間五六七八四年ばかりの有様といふものは、總て物價低落商況沈鬱で、此の租稅此の費用で、國民は終に堪へるものであらうかといふ程の懸念心を吾々は持つた位でした。併し其の間にも多少また物の進みはあるものと見えて、今の懸念は左まで懸念するところ無くして、事實に於ては十九年に終に此の紙幣が價を復して參つて、茲に始めて兌換制度を行つた。尤も其の兌換制度を行ふに就いては、前以て其の兌換制度を行ふ方法として十五年に日本銀行を設立された。日本銀行を設立されると同時に、明治五年から各國立銀行に紙幣發行の權利を與へて居つた。其の權利を特に剝奪——と云うては言葉が悪うございますが、相談上から其の權利を繼續させぬといふ事にして、年限を待たずして管理方法に據つて其の紙幣を銷却せらるといふ、特殊の方法を以て國立銀行の維持策を立てられた。今私共の經營して居ります第一銀行なども、即ち其の銀行の一で、是は二十九年營業滿期になつて普通の銀行になつた。

そこで終に十九年に紙幣を兌換し得るやうに至りましたが、丁度二十一ヶ頃からしてまた一の春といふ時代になつて來た。四五六七八四五年の間の沈鬱が自

二十年以  
降の五年  
間

ら又進みをすべき原因を爲したものと見えまして、殊に其の兌換の出來ると同時に、これは能く歐羅巴人の言ふこととて、内に伏藏して居つた正貨が自ら流通時代に進むに随つて貨幣の數が餘計になる。諸物價が景氣を惹起すと云ふことは、何處の國でも不換紙幣が兌換制度になる時である、其の時分學者が言ひましたが學者ばかりでは無い。實際家でも言ふと同じやうな有様に、二十一年頃は又大分景氣附いて參りました。其の時分景氣附いた仕事は何に多く現はれて來たかと云ふと工業界、尤も二十一年の工業會社は、多く紡績會社に人氣が注入したやうに記憶いたして居ります。その他鐵道などにも段々力を入れた人があつたやうですが、或は製麻事業とか若くは其の他の工業も、京都の織物會社なども其の時に起つたけれども、先づ多數の工業熱は、多く此の紡績事業に歸嚮いたしたと言つても宜い位に見えます。現に二十年から二十一年頃に、其の前經營して宜からうと思ふ營業ですから、紡績業者が大層利益があつたものですから、殆ど大阪若くは伊勢或は岡山五畿内一圓に紡績業が我先にと争つて經營されるやうになりました。其の二十一年に反對して、二十三年四年となつて金融逼迫の有様を來して居り

ます。其の頃は丁度松方伯が大藏大臣で御いて、日本銀行總裁は故川田小一郎氏であつたやうに覺えて居りますが、大阪邊りでは殆ど紡績業者が業體を止め、棉を買ふ代を拂ふことが出來ず、銀行は更に割引をすることが出來ぬといふ如き有様になつて、例の見返り品といふ制度は、其の當時私共特に大阪へ參つて種々相談の末、さういふ制度を一つ成立たせんらぬといふ位に金融逼迫の有様を見たのです。此の二十三年四年に掛けては餘程大阪の方が劇しうございました。二十一年二十年の行過ぎが大なる變動を惹起した。平の裏は酷い破綻を起すと考へて居ります。其の時の大阪の各銀行は、今日から見るといふと其の取引高は餘程細いもので、是非これに五百萬まで金融の附く途を講じて欲しい。さうすれば大阪の維持が出来る。そんな大きなことを言つて若し……然らばせめて三百萬と言ふたのを私は記憶して居る。其の位で大阪の各銀行が大抵金融逼迫を維持するといふ話であつた。もう今日で見ると、私の銀行が一晩の出納でも三百萬位あるといふことになりました。實に世の中は甚だ可笑しいやうですが、總てこれは事實談でございます。二十四年から五年は左様に懸念しましたけれども、何でも



見返り品制度で日本銀行が確か二百萬圓拂出して、大恐慌でも來らうと思ふ有様で直ぐに鎮靜して仕舞つた。それで追々に別段の事無しに、經濟界が經營して行かれたやうに覺えて居る。

二十六年  
以降十年  
間の經濟  
状態

二十五年六年といふものは大變具合が善かつた。近頃で二十六年位金利の安かつた年は無いと言つても宜い位でせう。昨今ではございませぬが、昨年(三十八年)から當年(三十九年)の春に掛けて至つて金融緩慢です。始終利率は安うございませぬが、明治二十六年から三十年までの間に、二十六年位金利の安かつた年は無いと私は覺えて居ります。併し二十一年に懲りて、二十六年には左様に金利が安うても、事業勃興などといふことは殆ど無かつたのです。そこへ日清戦争が起つて來た。續いて其の戦争が大勝利をして三億五千萬の償金が取れる。殊に六年七年八年までは總て事業は休んだ。八年は講和談判から大に芽を吹きさうな有様になつたところへ、三國干渉からしてまた頓挫して、旁、總て其の企業熱といふものは、殆ど四五年の間は極く沈滞いたした代りに、二十九年三十年には此の又反對に大に勃興して參つたのです。丁度日清戦争後企業勃興は、其の頃は例の鐵道とい

ふものがありましたからして、數字から數へると、經濟事情は今日は其の頃より數層倍力が大きく相成つて居りますけれども、ちよつと此の程銀行集會所で取調べた——極く正しい數字であるかどうか分りませぬが、日清戦争後二十九年から三十年に掛けての諸事業の計畫はどれ程の數字を見ると言つた所が、十一億ばかりの數字を數へられるです。但しそれは皆本統に事業が成立つたと言ふては無いけれども、詰り斯ういふ希望を惹起した。殊に其の中鐵道が一番其の數字には多く關係をしたと言つて宜からうと思ひます。丁度二十六年から七年頃までの數年養つた芽先が稍發しようと思つたのが戦争の爲に中止した。そこへ勝つたから人氣が大に勃興しようと思つたのに、三國干渉からして又頓挫した。其の念慮も先づ薄らぎ金融は緩慢である。それに隨つて二十九年から三十年の事業勃興の有様は主に鐵道ですが、其の他總ての工業を概計しますと、今申述べます通り、丁度これが又三十一年に反對を現はして參つたのであります。三十一年伊藤さんが總理で井上さんが大藏大臣であつた頃には、今前に話をしました二十三年のは紡績絲を作る原料の買入に困ると云うて、日本の銀行が彼の強勁をしたのであつ

たが、此の三十一年には紡績會社が作った品物を支那へ持つて往つて賣ることが出来ない。内地の取引は何うか斯うかやりましたが、今の場合はもう紡績事業は迎も内地のみで經營しては居られぬ。多く海外へ出さなければならぬ。此の海外へ都合好く捌けなければ紡績工業は成立たぬ。而して此の賣方に困ると云ふので、正金銀行が大藏省の金貨を三百萬圓預けて貰つて、それを又安い利息で紡績業者に貸して遣つて、それで一時融通を附けるといふ方法を以て、先づ輸出の重要な品物の一種救護法などを講じたことを覚えて居ります。それと同時に、迎も此の金融では困ると云うて、大藏省で一方には公債を發行したやうに考へるのであります。然るに其の公債を買い上げなければ公債の維持が出来ぬと云うて、數字は確に覚えませぬが何でも二三千萬公債を買い上げるまでに至つて、一時を彌縫したやうに記憶して居ります。矢張此の二十九年三十年の企業熱勃興の丁度反對が、三十一年から二年に掛つた。二年は先づそれで宜いやうであつた。日本銀行の兌換券の發行力を増したのは明治三十二年でございませう。……そこでそれ等は先づ一つの經濟事情に多少緩和を與へて、三十三年も矢張此の金融界は始終平穩

と申せなかつた。或る時は進み或る時は退いて、所謂變調時代を經過したやうに覚えて居ります。それ等も追々自然療法から回復し來つて、四年五年六年此の二三年の間は、先づ平穩無事に經過したと申して宜しい。其の間に或は平素養生が悪かつたとか、或は其の前から大層其の銀行とか若くは會社の體格に異状を生じたといふので頓挫したのが二三ありませうけれども、是等は經濟事情が然らしめたのではなくて、其の物が平素特に良くなかつたといふに坐する。例へば百三十銀行の如き、是等は全く別問題と申すべきもので、決して經濟事情に連れての現象では無かつた。

そこで三十七年の戦争といふものに相成りまして、二年の間殆ど總ての事業は中止して、經濟界は唯一に此の戦争に應ずるをこれ事として經過いたしたのであります。丁度此の三十八年の有様も、二十八年と少し私共が見ると似た有様で、若しあのポーツマスの講和談判が吾々の極く希望する如く結了を見ましたならば、三十八年の秋から冬に掛けて、企業は追々に進歩を加へて往つたに相違無からうと思ふのですけれども、此の談判が甚だ不如意にあつたといふことが總ての方面

日露戦争  
後の財  
界の有様

に頓挫を與へて、殊に企業界に頓挫を與へたやうに考へます。而已ならず、久しい間——丁度凡そ一年も其の有様で繼續して、漸く昨年(三十八年)の秋とは申せ、企業熱の勃興といふものは殆ど當年(三十九年)の春になつてからでございますからして、随分長い間持つて居つたのが是はちよつとどういふ理由だか、はつきり此の理由を探すに甚だ私共には判断が付き兼ねます。元來金利は至つて安くつて金融は至極緩慢である。償金を取れぬが戦争は充分勝つたに相違ない。又戦時中大に利益を得たといふことは、それは總ての者が得たものではございませんけれども、或る方面は大變利益を得たといふことは事實である。殊に大阪伊勢邊りは石炭は高い。諸物貨が能く賣れましたから、どうしても、實は三十八年の半ば頃とか若くは冬頃からどしどし、と此の企業熱が起るべき筈のものが起らぬといふことは、寧ろ却て私共は起らぬ方に不思議を打つた位に思つたのです。惟ふに是は或は二十七年の後即ち二十九年三十年に掛けての事業勃興が、三十一年と二年に大困難を與へた。其の羹に懲りて居る觀念も一番原因でないかと、斯う想像します。或は其の他に原因があつたかも知れませぬ。今の現況で以て見ますと、若し

此の以降金利はどうなる。戦後の財政は至つて困難であらう。一方には大變な仕合せがあるが、一方には仲々國債は増して來た。元利の支拂が大いに海外に出るといふことは、誰の心にも皆記憶されて、多少何か金利に變動でも來す虞はありませぬかといふことが、企業熱をして鎮靜せしめたと思像する外なからうと思ふのです。所が段々春過ぎ夏來り、何時まで経つても其の様に氣遣はしくないといふので、終に此の最も激しく會社熱の進んで參る端緒を啓いたのは、私の記憶で六七月頃からであるやうに思はれます。それから今日まで殆ど半歳は、もう從つて唱へれば從つて出來る鹽梅で、始終何十倍の申込といふやうに經過し來つたのでございます。併し斯の如く進んで參りましたのが、唯單に冒險の突飛の人ばかりが左様にせしむるのかと考へると、大に是も理由があるのです。成る程さうなるべき筈に又考へて見れば思はれる。何故かならば、丁度之と同時に鐵道國有となつた。此の鐵道に對しては、姑く別問題ですが、他の諸工業に對して、殊に最も著しいのは紡績です。戦時戦後引續き事業が又仕合せとも云ふか、概して利益がえらい多いのです。どうも左様に利益が多いから、勞ひ其の株の價が生ぜざるを

得ぬ。此等が先づ一番導火線になつて、六十圓か七十圓のものが一躍して九十圓となり百圓になる。百圓のものは百二十圓三十圓になる。一例を申せば三重紡績會社の如き、今日は殆ど二百圓近い株の價を持つて居る。鐘ヶ淵紡績は其の實力から論ずれば、私は遠慮なく三重紡績の方であるであらうと思ふ。併し是が、更に市場の弄物になつた爲に、其の價は二割三割も三重紡績よりも高い景氣を惹起したのである。此の景氣は、ちよつと市場の一時の景氣の様に見えますが、其の數字の上から打算すると、其の人の計算上では意外の利益を引起さざるを得ない。例へば六十圓のものが百八十圓になるとすれば、此の間に百二十圓の差がある。百二十圓の差が若し三人の間に轉々したならば、一人で其の株式は四十圓の利益をしたことになる。それが損をしたことになる。若し此に一億圓拂込の紡績株があるとしたならば、丁度二百圓になると八億圓其の間に六億圓だけ自然の間に呼聲が高くなつて居ります。六億圓だけ呼聲の高くなつて居りますのはどうです。自分の家の算盤と云ふものが、それだけ身代が大きくなつたやうに氣位が大きくなつて、こんな株がある、申込まうといふことが、どうしても

出来る譯です。此の株熱をして強く至らしめたといふ事は、是から起す事業に就いて望み有りといふ一方の實際の觀念と、最う一には從來持つて居る株が今の如くに競上げられるからして、是に就いて己一身に利益が増したといふ觀念と同時に、猶ほ之と同じ様に往くならば千株持つて居つて十五萬圓儲かる。一萬株で百五十萬儲かるといふ數字が生じますから、どうしても株を持たうといふ觀念を此に持つて来る。尙ほ加ふるに所謂權利株を持つて之を賣れば唯權利を賣るだけで、一の株に付いて七圓八圓の利益が出来る。悪く申せば所謂彌次馬と申すべき手段です。其の事は少しも事業に對して裨益を與へるで無く、國家に對して公益が生ぜぬ方法でありますけれども、或は利に伴ふ弊害かも知れぬ。さういふ事が彼に傳はり此に傳つて、唯其の熱を助長せしむるので、是亦勢ひ免れぬこと、申して宜からうと思ふのです。

私共は、どつちかと申しますと、總て物を悲觀に考へるの方である積りですが、それならさういふ判斷は過かも知れぬ。丁度二十九年三十年頃の財政經濟に對しても、どうも俄かに進み過ぎる。餘り擴張に傾き過ぎるが、最う少し遠慮しなければ

悲觀論者  
にも一分  
ある疑問は

ばなるまいと、吾々己一身の銀行若くは紡績事業といふやうな事にのみ依らずに、尙ほ先づ分外の話でありますけれども、例へば財政に對して、支那と戦争前には歳出入の數字は一億圓以内と計上されてあつたものが、俄かに一億九千とか二億幾らといふやうになるのは、財政の扱方が餘り暴激ではないか。それと同時に商賣人の費用を考へますと、三十萬圓五十萬圓の會社を大きくして、何百萬圓でなければ相當の會社ではない位に思つて直ぐに大きな考をする。斯ういふことは吾々には始終危ないといふ觀念を有つた。成る程三十年三十二年頃は今申す紡績が賣れないと云うも、何か方々公債で金を拵へる。公債を買つて來るといふ時はそれ見たことかと申しましたけれども、其の時擴張がしたばかりで出來たてはないかといふやうに、反對説も大に道理があるといふやうになつて來たてすから、今日の此の事態に於ても或は唯斯うぢみの考ばかりするのは、國の進みに悖つた譯ではあるまいか。猶且つ石橋主義とか悲觀論者も一分疑を持つてす。況や之を進んで取るといふ方の流派では、如何にもそれやれといふことの傾は、これまた尤も千萬と云うて宜からうと思ふのです。それが今日茲に立つた現況と申し

て宜いかと考へます。今申上げました通り、明治六七年以降出たり縮んだり、其の經過は山道を爲して六度七度變化して今日に至つた。但し其の度毎に斯う段段上に進んで往きますが、其の變化區域は原因が違ふ。爲に生ずる變化に多少差がありますけれども、此の經濟界といふものは、つと一直線に、眞つ直に棒は、引けぬものと考へるのでございます。

或は樂觀  
論者であ  
るかも知  
れぬ

そこで現在の此の有様が何れであらうかといふのが、尙ほ第二の觀察をせねばならぬのですが、茲に至つて私共には殆ど考を申上げ得るだけのまだ調査は届かぬと、遁辭を申すか、若くは能力が無いと自白をするか、どちらかと言はねばならぬ位に思ふのです。之を樂觀に唱へて云うて見たならば、業に既に最善の事業に對して左様に利益が多いのである。五十圓拂込んだ株券が二百圓にも相成つて居るではないか。二百圓だけの價すべき利益がそこに生ずるならば、三割の配當をするのは尙ほ安いと言つて宜い。若し之を五分近の金利に對して相當なりと言ふならば、六百圓にしても宜いぢやあないかといふ論理も生ずる。左様に日本の事業が利益が多いならば、いゝ、其の事業をやつたら宜い。一向差支は無い。

現に亞米利加邊りてする仕事は、どうである。隣の朝鮮ばかり見て居ると、そんな  
けちな考になるが、最う一つ眼を放つて亞米利加を見るが宜いぢやあないか。斯  
ういふ樂觀説を言ふときは、今日電氣電力會社を千五百萬圓で起さう。小樽木材  
會社を二百萬圓で起して一年の間に六百萬圓にする。又少しも怪しまないので  
ある。それだけ利益があるぢあないか。いつまでも貧乏人の日本と思つて居る  
からけちな根性が出る。日本はいつても貧乏人でありはしない。富有になるだ  
けの力がある。富むだけの働を平生するが宜いてはないか。斯う考へて見ると、  
決して悲觀にばかり考へんでも宜い理窟が生ずる。現に二十七八年頃はそれは  
いけさうもないと思ふたので、果していけさうもないから其の三四五年は何も彼  
も衰退した。悲觀論者の説が誠に尤もと言へないが、實はさうで、二十七年三十  
二年は悲觀論者の説であつた。三十六年七年は少し失敗して、吾々は敗將勇を語  
らずといふ位置に居る。故に此の樂觀論から言へば、私は今日どしどしやるべし  
と云ふ方が宜いやうです、といふ言葉申して宜いやうにあるです。但し今如何  
に左様申すからと云うて、權利株を成るだけ盛にするが宜いといつて、滿洲鐵道の

申込の如き有様を歓迎する主意ではありませぬ。例へば三重紡績或は小樽木材  
會社といふやうなものゝ類を進めて往くといふことは、どうも一概にそれをしも  
尙ほ廢すが宜いといふ議論になりはしないかと恐れるので、此の點に就いては或  
は濫澤も樂觀論者と稱せらるゝ其の一人に居るかも知れませぬ。

併し又翻つて考へて見ると、餘程氣遣はしいといふことにどうしても申さざる  
を得ぬのです。此の現在は昨年(三十八年)來の金融が斯の如く緩慢で、市中の金利  
が安かつたといふことは、果して經濟の力が大に進んで、其の資力だけで斯く金融  
緩慢であるかといふことも一の疑問である。總て國の金融の有様といふものは、  
經濟其の物だけの働きてはございませぬ。て必ず此の奧政治に屬する支途が經  
濟に注入されて居つて、或る場合には其の爲に緊縮され、或る場合には其の爲に膨  
脹し、或る場合には其の爲に緩慢を來すといふことが始終ございます。追々政府  
でもそれに注意して、金融をして一時は小捻りをさせないやうに、例へば租稅徵收  
期を成るだけ區切りを多くして數を餘計にして、さうして一時に緊縮を來さぬや  
うにといふ注意は、吾々共も頻りに希望して居りますが、政府にもそこに注意は厚

財政の影  
響を受け  
たる結果  
には非ざ  
るか

うて、其の邊には今日は稍行届いて居ると申して宜いやうであります。一つさういふ場合も生ずるが、此の金融界はそれだけ經濟上の金融ばかりでない。今申す其の財政上の金融が大に金融の緩慢緊縮に與つて力ありといふことは、一番立派な證據と申して宜からうと思ひます。されば此の一年半乃至二年近い金融の緩慢は、私共の懸念には財政の餘力が始終此の金融界に及ぼして、斯の如く日に緩慢なる有様を示して居るのである。一方には紡績とか、其の他の事業に就いて事實利益が多いから價を増す所もありますけれども、勢を附けて段々膨脹せしむると云ふのは、金融界の大いに又助を與へるやうで、前の如く三割の利益を配當する株式であつても、金融緊縮例へば百八十圓の價の物を百五十圓の割合を以て見返り品に取るといふことをして呉れといふ位であつたならば、そんなに上せることは出来ない。是は商賣の常であります。然るに一方では成るだけ金利を引下げ、且つまた割合を善くして取るといふは即ち其の價をして益高からしめるといふものになりますから、相待つて今のやうに勢を養成するやうになつて往く。其の往く一部は、前申す財政界が大に此の我が金融界に各種の膨脹を助長するといふ有様

が現實にありはしないかと思ひますのです。殊に財政から考へて見ますると云ふと、現在の税法が決して吾々は満足の税法であるとは見ぬ。一體其の前の税法すら、尙ほ随分學者から論じたならば、餘程改正を加へたいに違無いのでありませう。就中此の戦時税大藏大臣が御出での所て斯かることを申すは失禮でありませうが、あれを何時までもあゝして置くのは、國に取つて餘程不利益ではないかと申したいやうであります。之を果して改正するとしたならば、其の改正の結果税が増すか或は減ずるか云うたら、増すことは出来ぬとしか言へないだらうと思ふ。而して此の國が負擔して居る内外の公債が幾らあるかと考へて見ましたならば、其の昔日の數層倍の數を加へて、現に二十三億圓になつて居るだらうと思はれますから、茲に此の鐵道國有公債でも出て往く譯になりましたならば、二十七億までに立上るに違無い。また現在豫算は如何に協定されたか知らぬが、定めし大藏大臣は骨を折られたてありませう。併し其の豫算が出ない内は吾々の知る所ではありませぬが、蓋し吾々國民の負擔に堪へない、今の倍大いなる數字を加へねばならぬといふやうなことで、まてゝも無からうと思ふ。而して其の數字の結果は

必ず矢張一部分は尙ほ借金をせねば其の數字を満足せしむることは出来ぬといふやうな現象も尙ほ籠つて居はせぬかと恐れる。即ち二十七八億の公債が是から先に減ずるといふは、それは減債基金の法もありますけれども今は仕方がありません。減債基金は減利息金で、元は返すことは出来ないと言はねばならぬかとも思ひます。若し茲に一朝工業會社の利益もそれ程に無い。株式の價も自ら頓挫をする。金融は同時に逼迫するといふことになつたならば、必ず此の間に丁度明治二十九年三十年の有様が、三十一年三十二年の悲觀の有様に變るといふことは、さう遠い未來ぢや無い。直きに明日にも來はせぬかとまでの懸念も出來るのでございます。若し之を最う一層強く論ずる向の人は、四十二年には金貨は一切日本に無くなる。兌換券は全く不換に變じて仕舞ふとまで論ずる御人が有るやうに聞きます。縦しそれまでにならぬにしても、中々前の喜と差引いて、何だか急に肌粟を生ずるやうな觀念が起りはせぬかと、自身等は思ふのでございます。

其の可否  
は數字に  
質さん

そこで此の二つの意味は、どこを界限してどの程度の判斷が宜からうといふことに就いては、寧ろ私は今夕此の經濟學協會に御質しをして、さうして經濟學協會は斯ういふ數字であるから、斯様であらうといふことの判斷が一番其の中を得る、其の宜しきに適ふ方法ではないかと思ふ。逆も吾々の思想で之を判斷すべきものではなからう。詰り茲に幾度論じて見ても、悲觀説と樂觀説との間は果してどつちが宜いと取極めたる言葉を申し切れることは、どのやうな經濟學者でも、どのやうな政治家でも、私は若し取り宜い利益ある仕事があつて、權利でも十分進めるは至極宜いが、どうしても之をしも仕ちやあならぬと云ふ如き大事取りの説があつたら、殆ど人間は廢めろといふ議論になりはしないか。されば至極宜しいがと云うて、誠に此の權利株ぢやあ困るといふやうになつては、是から先何處へ船を押上せるやうになるか、其の點は大に注意せねばならぬ。して見ると、私の申上げることは悲觀にもなり樂觀にもなり孰れてあるか分らぬやうになつて、自身も尙ほ分らぬ間に居りますが、之を分らせるといふことは、どうも今日では唯御上でもなければ年を取つた人でも無い。詰り眞正な數字の學問が分らして下さる。それが一番宜からうと思ひます。是は愈、此の點だけは斯うである。斯かる場合は



どうしても斯ういふ理窟になるといふ御研究は、どうぞ此の經濟學協會に御依頼したいと思ひます。經濟學協會に御依頼すると同時に、特に乗竹君、鹽島君などは別して統計には始終御注意にもなり、色々御取調なすつて居りますから、何時の時代は斯うである。——比較上斯ういふ有様になる。故に其の結果は經濟上斯く斯くになる。どうしても此の場合は向ふへさう進んではいかぬ。——といふ理由は斯うである。それで總て進んで往くと斯ういふ譯になるから此の程度が宜からう。——といふ事柄は、唯年を取つた人に御依頼なさるより、數字に御依頼なさるが宜からうと思ふ。自分の今日に於ける大體の意見は先づ此の邊でございませう。此の向ふは此の經濟雜誌に御質しなさるやうに願ひたい。

(明治三十九年十二月二十一日、經濟學協會に於て)

## 六六 實業家側より學者教育家に望む

閣下諸君、今夕の當俱樂部の晚餐會には、文部大臣閣下、文部次官、大學總長、其の他諸學校を管理なさる諸君の尊臨を請上げました次第でございませう。茲に會員

學問ほど  
俗人に必  
要なるは  
無し

を代表して、臨場を辱う致しました大臣始め來賓の諸公に一言の謝辭を申し上げます。

吾々銀行者が教育家諸君と斯様に密接なる關係を惹起すと云ふことは、是までもあつたか知れませぬが、蓋し此の俱樂部に於て斯く教育家諸君多數の尊臨を請うたのは、未だ初めてと申して宜からうと思ふのでございませう。殊に文部省と云ふ官邊のみならず、民間に於て最も有數な學校の諸君にも尊臨を請上げる積りて、慶應義塾、早稲田大學等にも御案内を申上げましたが、生憎鳩山君は今日御差支て御出を戴き得ませぬが、慶應義塾では鎌田君の御出席を辱うしました。元來私共は平生錙銖の利を争ふ所の極めて俗人である。又尊臨を辱うしました方々は學者である。此の學者と俗と云ふものは一見縁の遠いやうな者である。昔は學問を始めると、もう商業は止めるのだと云ふ如き時代もあつたのです。あつたところではない、現に私杯は商業教育としては「塵劫記」と「商賣往來」の外受けたことがない人間でございませう。所が斯く文部大臣を始め、大學總長、其の他各學校長の尊臨を請うて、斯の如く膝を交へて談話を換はすまでに至つたのは、商工業の位置

の大きいに進んだと云ふことを、既に業に證據立て得られるのでございますが、斯く申すと少し我が田へ水引くやうに聞えるか知らぬが、俗人には學問の必要がないと、若し臨場の諸君が今日も尙ほさう思召すなら間違です。學問ほど俗人に必要なものはない。それを誤つて學問と俗事とは縁の遠いものゝ如く考へたのは、天保時代の教育法であつたと云ふことを私は斷言して居るものでございます。

而して今日は其の縁が如何にも近く相成りましたが、併し日本の現況は、此の實際と學理とが極めて密接して居るかと思ふに、悲しい哉、歐米諸國に較べて見ると未だ満足とは申せぬかも知れませぬのです。想ふに此の距離が極く密接する程、其の活動も充分に行はれて、其の國の進歩の度合もトし得られ、隨つて富力も強力も之に伴ふものであると云ふ事は蓋し私の妄斷ではない。臨場の學者諸君も此の言を變へることは御出來なさるまいと思ふ。果して然らば、吾々が今夕斯様に兩者を接近する企をしたことは決して奇異なる催てはなくて、勿論相當なる事であつて、何故是までに度々斯う云ふ御會合を願うて、學理に付いては斯う吾々は考へる。實際に付いては吾々は斯く企望する。又吾々は將來養成する學生には、斯

學問と實際との接近を切望す

う云ふ思想、斯う云ふ人格、斯う云ふ才能を持たせたいと注文もし、教示を受けると云ふことをせなんだかと、私は却て其の遲きを憾むのでございます。

併し、今夕幸に御打揃ひで尊臨を請ひ、且つ大臣及び其の他の諸君から、教育に關することに就いて吾々に御指導的の御話をも承り得られることゝ考へますれば、遅いとは申しながら、前途遠遠の吾々の社會に大に公益を増すことであらうと、前に悦ばしい次第に考へます。茲に一同に代りまして大臣其の他の諸君に御禮を申し上げます。終に臨んで臨場を辱うしました閣下諸君の御健康を祝します。

(明治四十一年一月二十二日、銀行俱樂部の教育家招待會席上に於て)

## 六七 財政經濟の調和

總理大臣閣下及び内閣諸公閣下。今夕は誠に御繁多と察せられまする議會開會の節に、特に我々商工業者の爲に此の盛宴を開かれ、眞に感謝の至りに存じます。只今總理大臣より御懇切なる御演説を拜聴致しまして、私共殊に深く感謝致す次第でございます。其の御言葉中に、第一に食事を出しても後段に「扱」は無いから、

安心して飲め食へと云ふ仰は、我々誠に安心して頂戴の出来る次第で大に悦びます。丁度兩三年前に御集會のあつた頃には、私は病氣中でありまして餘り其の席に參上致しませぬ故に、茲に御列席の大藏大臣即ち當時の次官の話に、一杯の酒が五十萬圓或は百萬圓に價したと云ふ事を聞及んで居ります。然るに今夕は御馳走は誠に結構で其の價は只でありますから、胸襟を披くどころではない、眞に腹を空しうして頂戴いたす次第であります。經濟界のことに就いては、御言葉短てはありましたが我々に對しては頂門の一針で、此の御列席中、特に私に對して御説諭を下すつたかのやうに拜聴いたしました。蓋し濫澤の僻み心かは知りませぬが、併し是は斯かる機會に愚説を陳述いたしますのも、所謂胸襟を披くの一端ではなからうかと考へますから、此の場合に於て申上げると餘り面白からぬ御話のやうではございますが、とうぞ暫時の御清聴を煩はします。

機運相當  
計の進歩を  
計れ

元來世の進んで參ると云ふことに付いては必ず其の時々の節がある。其の節の時に伸張を圖ると云ふことは、精神に於ては私共微力と雖も、聊か心を用ひねばならぬと不斷に思うて居るのでございます。故に譬へば日清の戦後とか、若くは今日日露の戦後とか云ふ様な場合には、餘程其の進むことに對して心を用ふると同時に、其の進みが又過ちはせぬのかと云ふ考慮も、俱に盡さねばならぬと考へて居るのでございます。若し世の中を轉びさへせねば可いと云ふ方に考へて走るならば、必ず其の進歩の鈍いと云ふことを考へねばならぬ。又躓いても可い、何ても早く走ると云うたらば、或は溝へ落ちぬと云ふことがないとも限りませぬ。故に必ず躓かぬ程度に於て世の進みに伴はねばならぬと云ふことは、政治界經濟界總て世の進運に従事する人の務であらうと思ひます。今日我々が經濟界に處するものは、猶ほ總理大臣及び内閣諸公の政の、政界を支配し財政を料理すると同一の苦心であること云ふことは、諸君に於ても已に御了解のことと思ふのである。故に或る一方に於ては相當の進歩をするやうに務め、又或る一方に於ては蹉跌を防ぐやうな考もせねばならぬと思ふのであります。單に轉びさへせねば宜いと申して杖突いて走ると云ふことは、全世界皆然りと云ふことならば宜しう御座いませうが、此の進歩の世の中に我一人後走りの者となるを免れぬ虞があらうと思ひますから、矢張機運相當の進歩を計ると云ふことが必要であらうと思ひます。

然るに其の進歩を計るに付いては、又それに伴ふ弊害と云ふものが生じて防がんとして防ぐ能はざる、誠に已むを得ぬことと申さねばならぬ。此の點に付いては、丁度内閣諸公が財政上に付いて御苦心なさると同一と考へるので御座います。故に我々は斯かる戦後の經營杯に付いては、力めて財政經濟を成るだけ同じ方針を持ち、同じ氣派を通じて、並び馳せて相戻らぬやうにと言ふことを微力ながら深く希望いたしました。已に昨年も銀行業者は申合せて、總理大臣其の他内閣諸公の責臨を請うて、財政經濟上に付いて上下の脈絡を通ずる様に致したいと云ふことを、訥辯ながら申上げたことを記憶いたして居ります。幸に總理大臣は深くそれ等のことも御心に留められて、財政界に付いては斯かる方針を以つて調査し斯かる方法を以つて起しつゝある。其の一方今や經濟界の有様を考へると、茲に集まれる人々は皆相當の考慮を以て支配するであらうけれども、しかし一般は或は所謂渦中に溺れはせぬかと云ふ氣遣ひがないでもありません。幸に爰に集まれる方々は先づ經濟界の有力者と考へますから、宜しく心を用ひ力を盡して、若しも左様な狂奔の憂があり、若くは渦中に陥るやうな憂があるならば、火の中水の中に陥

らぬ様に救へと云ふのは、誠に御尤なる御注意と考へて、我々は之に當る積りてあります。これに當ると共に我々が財政上に付いて希望することは、斯く申すと甚だ恐多いやうであるが、我々に於て財政を懸念いたしますことは、丁度總理大臣が我々經濟界を御懸念下さると同じ心を以て憂慮いたすのでございます。決して今日の財政が危険と申す譯ではありませんけれども、至つて健全であると云ふことは、大戦争の後を承けたる今日或は云ひ得られぬと云ふ者が世の中にありませんかと思ふのであります。是は我々が經濟界の方面に於て慎むと同時に、財政界の方面に於ても御慎みになつて、國家の進運は妨げぬ、併し過度には走らぬと云ふことに上下一致することを希望して已まぬのであります。謹んで御趣旨の在る所を服膺して、我々の力のあらん限り、進まぬものは進め、奔り過ぎる者は止める様に致すと云ふ精神でございます。甚だ恐入つた申分ではありますけれども、財政界に於ても經濟界を亂すやうなことのございませぬやうに、どうぞ御返杯と申す譯ではありませぬが、然るべく御配慮を願ひます。之を以つて御答辭と致します。(明治四十年一月二十五日、西園寺首相邸に催された實業家招待會の席上に於て來賓を代表しての答辭)